

みずほの台遺跡群

(根本西台古墳群第2次・瑞穂野団地遺跡東地区)

平成20年3月

宇都宮市教育委員会

序

宇都宮市の瑞穂野地区は、昭和40年代までは実り豊かな農地と緑の平地林がひろがるのどかな田園地帯でした。しかし、新4号国道と住宅団地・工業団地の造成を機に、その後も次々と開発が進み、現在ではその様相が大きく変わりつつあります。

このたびトヨタウッドユーホーム株式会社による住宅団地の建設により、根本西台古墳群・瑞穂野団地遺跡の一部が影響を受けることになりました。とくに瑞穂野団地遺跡については、周知の埋蔵文化財包蔵地以外の場所からの発見であったため、対応に難しさもありましたが、同社と宇都宮市教育委員会では文化財保護の見地から誠意を持って協議した結果、発掘調査による記録保存を実施することになりました。

調査は、トヨタウッドユーホーム株式会社が費用を負担し、株式会社日本竊業史研究所が発掘調査及び報告書の作成を担当し、宇都宮市教育委員会が調査主体として関係事務を執り行う体制で行われました。

その成果をまとめたものが本報告書であります。多くの方々が、さまざまな方面におきまして、広くご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、埋蔵文化財に係る協議から発掘調査・報告書刊行にいたるまで多大なご理解・ご協力をいただきました関係各位に対しまして厚く御礼申し上げます。

平成20年3月

宇都宮市教育委員会

教育長 伊藤文雄

例 言

- 1 本書は栃木県宇都宮市西刑部町及び下桑高町に所在するみずほの台遺跡群の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査はトヨタウッドニューホーム㈱が施行する「みずほの台ニュータウン」建設に伴うもので、事業主の依頼により宇都宮市教育委員会を調査主体者とし、調査実務は本社より委託を受けた㈱日本産業史研究所がこれにあたった。
- 3 調査は根本西台古墳群第2次調査が、平成17年12月より平成18年9月まで、瑞穂野団地遺跡東地区は同18年8月より同年9月まで実施した。報告書作成作業はその後断続的ながら、平成20年3月まで行った。
- 4 野外調査は、根本西台古墳群が水野順敏、栗田欣行、柏崎広伸、瑞穂野団地遺跡東地区は水野、柏崎が担当し、両遺跡の整理・報告書作成作業は水野・柏崎の他、三輪孝幸、新井潔があたった。報文の執筆はⅠ、Ⅱ-3、Ⅲ-3を水野が、Ⅱ-1・2、Ⅲ-1・2は柏崎が執筆し水野が補訂した。
- 5 調査組織（報告書刊行時）

宇都宮市教育委員会

伊藤 文雄 教 育 長
渡辺 卓 文化課長
大塚 雅之 文化財保護グループ係長
神野 安伸 文化財保護グループ

㈱日本産業史研究所

水野 順敏 調査統括
三輪 孝幸 調査員
新井 潔 調査員
柏崎 広伸 調査員

- 6 調査記録・出土遺物は宇都宮市教育委員会が保管する。
- 7 野外調査・整理報告書作成において下記の機関・方々よりご指導とご助力を賜った。記して謝意を表する。

トヨタウッドニューホーム㈱、興和産業㈱、渡辺建設㈱、㈱ダイショウ、㈱三井考測、㈱日本特殊映像、
㈱テクノプランニング、岩上照朗、上野修一、梁木 誠、今平利幸（順不同・敬称略）

調査・整理作業参加者

朝倉栄子、荒井光美、荒井みや子、稲毛 清、入江つや子、押久保 毅、後藤ゆかり、佐藤達男、
鈴木 清、鈴木タミ、高島勝征、高松米子、田崎勝明、沼子中和、福富 準、藤田文子、藤田俊雄、
星野栄治、増渕妙子、増渕正弘、松村民子、森脇一也、渡辺明美

凡 例

- 1 各遺跡の略号は根本西台古墳群は、MNT-N、瑞穂野団地遺跡はUNMD-Eで、遺物の注記はこれによる。遺構はSⅠ（竪穴住居跡）、SB（掘立柱建物跡）、SK（土坑）、SD（溝跡）、P（小穴）、PT（住居内の小穴等）である。
- 2 第3図は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図「宇都宮東部」【上三川】を部分複製した。
- 3 遺構図面は、古墳の墳丘が1/200、石室、周溝土層、住居跡、掘立柱建物跡、土坑が1/60、これ以外のはそれぞれスケールによる。遺物は土器類1/3、大型土器1/4、石・鉄製品1/2、古墳の飾身具は原寸を基本とするも、一部異なるものはスケールによる。
- 4 遺構図等の北の方位は磁北を示し、断面の水準線の数値は海抜標高を示す。

目 次

I はしがき	
1 調査に至る経緯と経過	9
2 遺跡の位置と環境	11
(1) 地理的環境	11
(2) 歴史的環境	12
II 根本西台古墳群第2次調査	
1 調査の概要と調査の方法	17
(1) 調査の概要	17
(2) 調査の方法と基本土層	17
2 遺構と遺物	19
(1) 14号墳	19
(2) 15号墳	23
(3) 16号墳	27
(4) 17号墳	32
(5) 18号墳	36
(6) 19号墳	43
(7) 20号墳	48
(8) 21号墳	52
(9) 古代の土坑	61
(10) その他の遺構・遺物	64
a 縄文時代(土坑・遺物)	64
b 近代(土坑・溝)	65
3 まとめ	69
III 瑞穂野団地遺跡(東地区)	
1 調査の概要と調査の方法	73
(1) 調査の概要	73
(2) 調査の方法と基本土層	74
2 遺構と遺物	75
(1) 住居跡	75
(2) 掘立柱建物跡	101
(3) 土坑	103
3 まとめ	105

挿図目次

第1図 調査区配置図	第4図 根本西台古墳群第2次調査区全体図
第2図 遺跡の位置と周辺の地形分類図	第5図 基本土層図
第3図 遺跡の位置と周辺遺跡	第6図 14号墳墳丘

- | | | | |
|------|--------------------|------|---------------|
| 第7図 | 14号墳周濠土層, 石室(1) | 第38図 | 21号墳墳丘, 周濠土層 |
| 第8図 | 14号墳石室(2), 出土遺物 | 第39図 | 古代の土坑 |
| 第9図 | 15号墳墳丘 | 第40図 | その他の遺構 |
| 第10図 | 15号墳石室(1) | 第41図 | その他の出土遺物 |
| 第11図 | 15号墳石室(2), 出土遺物 | 第42図 | 第1次調査区全体図 |
| 第12図 | 16号墳墳丘(1) | 第43図 | 第1次・2次調査石室比較図 |
| 第13図 | 16号墳墳丘(2), 周濠土層 | 第44図 | 基本土層図 |
| 第14図 | 16号墳石室(1) | 第45図 | 調査区全体図 |
| 第15図 | 16号墳石室(2) | 第46図 | SI-1・掘方・カマド |
| 第16図 | 16号墳出土遺物 | 第47図 | SI-1出土遺物 |
| 第17図 | 17号墳墳丘(1) | 第48図 | SI-2・掘方 |
| 第18図 | 17号墳墳丘(2), 土層 | 第49図 | SI-2カマド |
| 第19図 | 17号墳石室(1) | 第50図 | SI-2出土遺物 |
| 第20図 | 17号墳石室(2) | 第51図 | SI-3・掘方・カマド |
| 第21図 | 17号墳出土遺物 | 第52図 | SI-3出土遺物 |
| 第22図 | 18号墳墳丘(1) | 第53図 | SI-4・掘方 |
| 第23図 | 18号墳墳丘(2), 周濠土層 | 第54図 | SI-4北カマド |
| 第24図 | 18号墳石室(1) | 第55図 | SI-4出土遺物(1) |
| 第25図 | 18号墳石室(2) | 第56図 | SI-4出土遺物(2) |
| 第26図 | 18号墳出土遺物(1) | 第57図 | SI-4出土遺物(3) |
| 第27図 | 18号墳出土遺物(2) | 第58図 | SI-5 |
| 第28図 | 19号墳墳丘(1), 周濠土層 | 第59図 | SI-5掘方 |
| 第29図 | 19号墳墳丘(2) | 第60図 | SI-5出土遺物(1) |
| 第30図 | 19号墳石室(1) | 第61図 | SI-5出土遺物(2) |
| 第31図 | 19号墳石室(2), 出土遺物(1) | 第62図 | SI-5出土遺物(3) |
| 第32図 | 19号墳出土遺物(2) | 第63図 | SI-6 |
| 第33図 | 20号墳墳丘(1), 周濠土層 | 第64図 | SI-7・出土遺物 |
| 第34図 | 20号墳墳丘(2) | 第65図 | 金属・石製品 |
| 第35図 | 20号墳石室(1) | 第66図 | SB-1・2 |
| 第36図 | 20号墳石室(2) | 第67図 | SB-3, SK-1~4 |
| 第37図 | 20号墳出土遺物 | | |

表目次

- | | | | |
|-----|-------------|------|-------------|
| 第1図 | 周辺遺跡一覧表 | 第6図 | 18号墳出土土器観察表 |
| 第2図 | 14号墳出土土器観察表 | 第7図 | 19号墳出土土器観察表 |
| 第3図 | 15号墳出土土器観察表 | 第8図 | 20号墳出土土器観察表 |
| 第4図 | 16号墳出土土器観察表 | 第9図 | 各古墳出土の王類計測表 |
| 第5図 | 17号墳出土土器観察表 | 第10図 | その他の出土遺物観察表 |

第11表 S I - 1 出土遺物観察表
第12表 S I - 2 出土遺物観察表
第13表 S I - 3 出土遺物観察表
第14表 S I - 4 出土遺物観察表



第15表 S I - 5 出土遺物観察表
第16表 S I - 7 出土遺物観察表
第17表 金属・石製品観察表

図版目次

- 図版1 A. 第1次調査区(南より・上端第2次調査区)
B. 第2次調査区(北より・中央上方が第1次調査区)
- 図版2 A. 調査区全景(西より・鬼怒川を望む)
B. 調査区全景(上より)
- 図版3 A. 14号墳全景(北より) B. 14号墳周濠西側土層(南より) C. 14号墳石室全景(南より) D. 14号墳石室裏込断面(南より) E. 15号墳全景(南より) F. 15号墳前庭土層(西より) G. 15号墳石室全景(南より) H. 15号墳石室側壁(東より)
- 図版4 A. 15号墳石室根石(北より) B. 15号墳石室竅穴(南より) C. 15号墳石室側壁断面(北より) D. 15号墳石室奥壁の支石(東より) E. 15号墳石室閉塞部(北より) F. 15号墳石室耳環出土状況 G. 16号墳全景(南より) H. 16号墳周濠南側土層(南東より)
- 図版5 A. 16号墳南西周濠(SK-51)土器出土状況(西より) B. 16号墳石室(南より) C. 16号墳石室根石・敷石(北より) D. 16号墳石室竅穴(南より) E. 16号墳石室玄門部付近(北東より) F. 16号墳側壁裏込断面(南より) G. 17号墳全景(南より) H. 17号墳周濠北側土層(東より)
- 図版6 A. 17号墳石室全景(南より) B. 17号墳石室側壁(東より) C. 17号墳石室根石・敷石(北より) D. 17号墳石室根石(南より) E. 17号墳石室竅穴(南より) F. 17号墳石室遺物出土状況 G. 18号墳全景(南より) H. 18号墳周濠西側土層(南東より)
- 図版7 A. 18号墳石室閉塞部(北より) B. 18号墳石室全景(北より) C. 18号墳石室側壁(東より) D. 18号墳石室根石・敷石(南より) E. 18号墳石室根石(南より) F. 18号墳石室竅穴(北より) G. 18号墳石室側壁断面(北東より) H. 18号墳石室竅穴の工具痕
- 図版8 A. 19号墳全景(南より) B. 19号墳周濠西側土層(南東より) C. 19号墳周濠東側土層(南より) D. 19号墳石室閉塞部(北東より) E. 19号墳石室全景(南より) F. 19号墳石室根石・敷石(南より) G. 19号墳石室側壁(東より) H. 19号墳石室側壁断面(南東より)
- 図版9 A. 20号墳全景(南より) B. 20号墳周濠北側土層(西より) C. 20号墳前庭に廃棄された石材(南より) D. 20号墳石室落下天井石(南東より) E. 20号墳石室全景(南より) F. 20号墳石室側壁(東より) G. 20号墳石室根石・敷石(北より) H. 20号墳石室根石と奥壁(南より)
- 図版10 A. 20号墳石室奥壁(南より) B. 20号墳奥壁断面(西より) C. 20号墳石室側壁断面(南より) D. 20号墳石室耳環出土状況 E. 21号墳全景(北より) F. 21号墳周濠西側土層(北より) G. 21号墳周濠東側土層(北より) H. 21号墳周濠北側土層(東より)
- 図版11 A. SK-1(西より) B. SK-2(西より) C. SK-5土層(北より) D. SD-5(東より) E. SK-6土層(南より) F. SK-6(東より) G. SK-7土層(南より) H. SK-7(西より)
- 図版12 A. SK-20土層(北より) B. SK-20(東より) C. SK-39(東より) D. SK-40土層(北より) E. SK-40(西より) F. SK-51(西より) G. SK-17土層(西より) H. SK-17(西より)

- 図版13 15・16・17・18号墳出土土器
- 図版14 18・19号墳出土土器
- 図版15 装身具・鉄製品
- 図版16 A. 調査区全景（西より） B. 調査区全景（東より）
- 図版17 A. SI-1完掘（北より） B. SI-1掘方（北東より） C. SI-1カマド（南より） D. SI-1カマド掘方（南より） E. SI-2完掘（西より） F. SI-2掘方（西より） G. SI-2カマド（南より） H. SI-2カマド掘方（南より）
- 図版18 A. SI-3（西より） B. SI-3掘方（西より） C. SI-3カマド（西より） D. SI-3カマド掘方（西より） E. SI-4遺物出土状況（東より） F. SI-4遺物出土状況（西より） G. SI-4（東より） H. SI-4掘方（東より）
- 図版19 A. SI-4北カマド（南より） B. SI-4北カマド掘方（南より） C. SI-4東カマド東西土層断面（北より） D. SI-4東側遺物出土状況（南東より） E. SI-4炭化木皿と須恵器（南東より） F. SI-4鉄先出土状況（南西より） G. SI-5（南より） H. SI-5掘方（南より）
- 図版20 A. SI-5掘方（北より） B. SI-5東壁柱穴P12（西より） C. SI-5隅柱穴（北東より） D. SI-5 P2（南より） E. SI-5高台坏（南西より） F. SI-6掘方（西より） G. SI-7（西より） H. SI-7掘方（西より）
- 図版21 A. SB-1・2確認状況（東より） B. SB-1・2完掘（西より） C. SB-2PT-4A・B（南より） D. SB-3完掘（南より） E. SB-3 PT-3土層（南より） F. SK-1土層（北より） G. SK-2完掘（西より） H. SK-3完掘（西より）
- 図版22 SI-1・2・3・4・5・7出土遺物
- 図版23 SI-2・4・5出土遺物
- 図版24 SI-4・5出土遺物
- 図版25 SI-1・2・3・4・5出土遺物
- 図版26 SI-1・4出土遺物、石・金属製品（1）
- 図版27 金属製品（2）

凡 例（2）

- 5 挿図の遺物番号は、本文、表、写真図版の番号と合致（玉類は備考欄）する。写真図版では前が挿図番号で後が遺物番号である。
- 6 遺構図面に使用したスクリーントーンは以下の通りである。
 はカマド用材粘土  は焼土・焼け面
- 7 遺構平面図中の●は土器、▲は金属・石製品等を示し、数字は遺物番号である。
- 8 図版1Aは㈱テクノプランニング、図版1B、図版2A・Bは㈱日本特殊映像の撮影による。

I はしがき

1. 調査に至る経緯と経過（第1図）

遺跡は宇都宮市西刑部町及び下桑島町に所在する。平成10年、トヨタウッドユーホーム株式会社（旧社名は㈱ユーエスケー・以下事業主）が、30haに及ぶ大規模な住宅造成（仮称みずほの台ニュータウン）を計画した。対象地は、大部分が水田、畑地と平地林で、所々に宅地が散在する程度の自然に恵まれた田園地帯であった。

この開発計画予定地内には根本西台古墳群（県No3325）と桑島古墳群（県No3324）の2か所の埋蔵文化財包蔵地の存在が周知されていた。また、古代東山道の推定ルートが開発予定地区を縦断している。

このため、埋蔵文化財の取り扱いについて、事業主と宇都宮市教育委員会（以下市教委）の協議の結果、周知の遺跡に近い開発予定区域南東部において、試掘調査を実施し、遺跡の範囲、古墳の員数等を確認することとなった。

本調査（第1次）は、市教委を調査主体者とし、事業主より委託を受けた㈱日本竊業史研究所（以下当研究所）が調査実務にあたった。野外調査は平成10年7月から翌11年11月まで実施し、根本西台古墳群で13基の古墳を確認、1基は地区外の為12基（部分を含む）を調査、桑島古墳群では2基（ともに周漕の一部のみ）を調査した。さらに、根本西台古墳群では、古代の土坑や中・近世の土葬墓、火葬跡などが多数認められた。

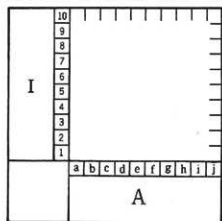
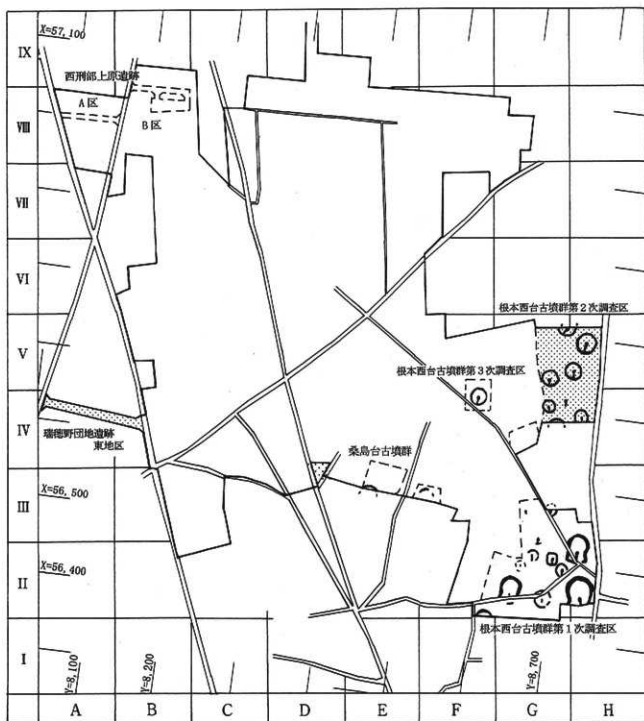
その後、諸般の事情により当地の開発は一時休止し、早期再開の予定であったが、ようやく平成17年に至り開発計画が本格化した。この時点で、第1次調査終了時の事業主と市教委の協議事項により、推定古代東山道跡に対する試掘調査及び1次調査の折に撮影した空中写真に、調査区北方で古墳の存在を示すソイルマークが認められた地区の試掘調査が必要となった。

そこで平成17年10月18日付で事業主より栃木県教育委員会に遺跡の新規発見届を提出し、同年10月28日付で、根本西台古墳群の範囲拡大との通知を受けた。これより、古墳群の範囲、員数等の確認の為試掘調査を実施することとなった。試掘調査は、市教委を調査主体者とし事業主より委託を受けた当研究所が調査実務にあたった。試掘調査は同年11月1日より同月20日まで実施し、対象面積の約10%の1,000㎡を調査した結果、6基の古墳と多数の土坑、溝などを確認した。この為、試掘対象地のほぼ全体が発掘調査の対象とされた。

発掘調査も、市教委を調査主体者とし、事業主より委託を受けた当研究所が調査実務にあたった。本調査は平成17年12月より翌18年9月まで実施し、古墳8基と土坑約90基などを調査した。整理・報告書作成作業は平成18年7月より順次着手し、同20年3月まで行った。

また、平成18年7月、同じ仮称みずほの台ニュータウンの開発事業に伴い実施された工事において、遺跡が発見された。開発計画地区より、西方を南流する江川（船付川）に向けての放水路敷設工事によるもので、古代の住居跡の存在が確認された。平成18年7月25日付で事業主より栃木県教育委員会宛に遺跡の新規発見届が提出され、8月1日付で瑞穂野団地遺跡（県No3320）の範囲拡大との通知を受けた。

工事中の発見であり緊急を要することから、翌8月3日より、市教委を調査主体者とし、事業主より委託を受けた当研究所が調査実務にあたった。調査対象地は、放水路とその上面に予定される道路部分の約1,800㎡で、古代の竪穴式住居跡7軒、掘立柱建物跡などを調査し、9月15日に終了した。整理・報告書作成作業は同年10月より断続的ながら平成20年3月まで行った。



第1図 調査区配置図

2 遺跡の位置と環境

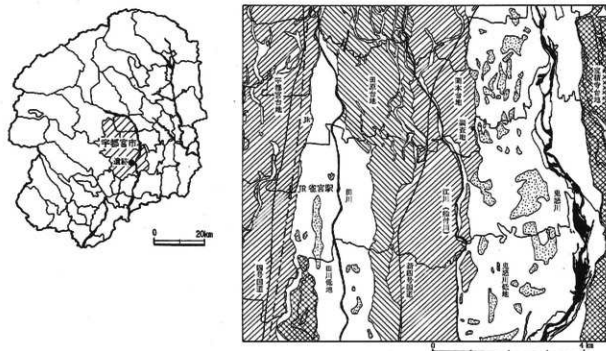
(1) 地理的環境 (第2図)

開発予定地は、宇都宮市西刑部町、下桑島町、上桑島町に跨って所在する。なお、根本西台古墳群(第2次調査区)は西刑部町2,599番地他、瑞穂野団地遺跡(東地区)は同じく西刑部町2631-1番地他に所在する。

栃木県のはほぼ中央に位置する県都宇都宮市は、県域の中央やや東寄りを南流する鬼怒川に跨って所在するが、市街地を含むその大半は鬼怒川右(西)岸に立地する。この鬼怒川の流路に沿って鬼怒川低地があり、現在は大部分が水田として利用されており、点在する微高地上には小集落が所在し、縄文時代の遺跡や古墳が立地する場合もある。また、鬼怒川と市域の中央を南流する鬼怒川支流の田川との間には南に向かって細長く延びる台地があり、東側が岡本台地、西側が田原台地と呼ばれる。当地はこのうち東側の岡本台地の東縁に立地する。ことに根本西台古墳群は鬼怒川低地に面する縁辺部で、東方直下を越戸川が南流し、標高は93~94m、東下方の水田面との比高は4~5mほどである。

瑞穂野団地遺跡は台地の東縁より西方約600mを南流する江川(船付川)に跨って所在し、今次調査区(東地区)はその左(東)岸、遺跡全体の北東隅に位置する。古墳群と同じ岡本台地に立地し、標高は93m程で、現在の江川までは100m程である。

当地は、JR宇都宮駅の南東方約6kmに位置し、西方約1.2kmを新4号国道が南北に、南方約0.9kmを宇都宮環状線が東西に延びる。さらに南西方約3kmには北関東自動車道の宇都宮・上三川インターチェンジが設けられており、西は既に東北自動車道に連結し、東は茨城県方面に向けて工事が進捗しているなど交通の要衝である。この為、インター周辺の地域は、独立行政法人都市再生機構が施行する「宇都宮都市計画」に基づく大規模な土地区画整理事業が実施され、大規模商業施設の建設や宅地造成等の開発が急増している。



第2図 遺跡の位置と周辺の地形分類図

(2) 歴史的環境 (第3図)

当地の周辺地域は、従前より多くの遺跡の存在が知られていたが、近年の度重なる大規模開発に伴う発掘調査成果の蓄積がそれに拍車をかけている(第3図参照)。

今次調査の対象となった根本西台古墳群(1)は、前回の第1次調査の成果と合わせ、南北500m以上、東西150m以上の範囲に21基の古墳を確認し、部分的なものも含め20基を調査したが、本来は30~40基の古墳が存在したと推察される。また、前回はその極一部を調査(2基の周濠の一部)した桑島古墳群(2)は今次調査区の南西方約150mに位置し、大部分は開発区域外となっているが、雑木林の中に低い地ぶくれが見られ、10数基が存在すると推察される。なお、根本西台古墳群では、縄文時代と見られる土坑が認められ、前期の土器や晩期と推定される石器などが出土した。また、古墳の周濠内より奈良・平安時代の土器が出土し、第1次調査区では東西に延びる道路跡が見られ、平安時代の須恵器が出土している。さらに、第1次調査区は中世末~近世初頭にかけては墓所(築城)として利用され、多数の土葬墓や火葬跡が確認されている。このような本遺跡における土地利用の状況を踏まえ、周辺の遺跡を概観する。

先土器時代については、開発区域の西に隣接(一部が区域内)する瑞穂野団地遺跡(3)で該期の遺物の出土が知られるのみである。

縄文時代の遺跡は、北方約1kmの同一台地上に中・後期の集落跡(散布地)と推定される柿木坂遺跡(9)、南東方約700mの低地の微高地上に中期の集落跡の根本台遺跡(12)があり、10軒程の住居跡が調査されている。また、前記の瑞穂野団地遺跡をはじめ、他の多くの遺跡でも土坑の確認や遺物の出土はあるものの、近隣で大規模な集落遺跡の調査例はない。

弥生時代の遺跡も、瑞穂野団地遺跡で後期の住居跡が調査されており、集落跡の存在が知られる。

古墳時代に入ると、中期以降の集落跡や古墳が見られ、後期~終末期にかけての遺跡は急増する。中期の集落跡は、瑞穂野団地遺跡のほか、成願寺遺跡(15)、砂田遺跡(29)、磯岡北遺跡(32)などに見られた。また、後期の集落は、瑞穂野団地遺跡、成願寺遺跡、上横田A遺跡(28)、砂田遺跡、西刑部西原遺跡(30)、笹塚遺跡(31)、磯岡北遺跡など遺跡数、集落規模ともに増大する。一方古墳を見ると、本古墳群と同じ越戸川右岸には、北方約2.6kmに円墳5~6基からなる三日月神社古墳群(4)、その南東に前方後円墳の久部浅間山古墳(5)、これらの南方約200mに前方後円墳1、円墳3基からなる久部愛宕塚古墳群(6)、このやや南に前方後円墳1、円墳1、不明1基がこの石井久保田古墳群(8)、さらに南で本跡の北方約800mの柿木坂遺跡(9)には前方後円墳1、円墳1基が見られる。南方には約300mのところ、墳長38.5mの前方後円墳の飯塚古墳(13)があり、その南には成願寺北遺跡(14)内に前方後円墳と見られる飯塚山古墳があり、この西に隣接する成願寺遺跡では方墳3、円墳4、不明1基などが調査されている。以上の如く、越戸川右岸の台地東縁部には200~800m程の間隔で古墳群が点在している。

次に西方を南流する江川沿いに目を向けると、北方の右岸に円墳2基がこの大塚神社古墳群(20)、この南には猿山城跡内(24)に前方後円墳2、円墳9基などが見られ、その対岸の左岸には天王山遺跡(22)、東原古墳群(23)があり、合わせて前方後円墳2、円墳7基の残存が知られる。これらの下流の瑞穂野団地遺跡では左岸に2基以上の円墳の存在が知られ、この下流右岸の西刑部古原古墳群(19)では、前方後円墳1、円墳5、方墳2基が調査され、このうち2基の方墳は古墳時代前期の所産と考えられている。こちらは1~1.5km程の間隔で古墳群が存在する。

さらに西方を流れる田川と江川との間の地域には、北西方約3.3kmに市指定史跡の終末期の大型円墳である下栗大塚古墳(21)が存在する。また、西方約1.5kmに下桑島西原古墳群(26)があり、円墳2、方形周溝墓

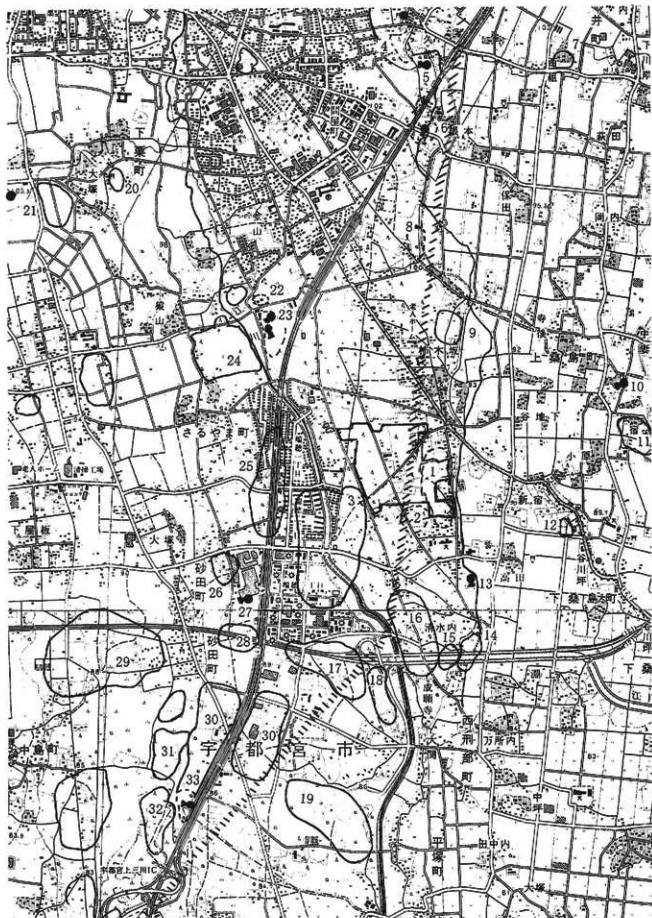
1基などが調査されている。この南には前方後円墳の南原古墳(27)が所在する。また、南西の琴平塚古墳群(33)では、前方後円墳3、円墳11基などが確認され、二重周濠を持つ前方後円墳の琴平古墳は現状保存されている。この西に隣接する磯岡北遺跡の古墳群(32)では円墳8基、その北に隣接する中高古墳群(31)では5基の円墳が確認されている。なお、本古墳群の東下方に広がる鬼怒川低地の微高地上にも古墳が築かれており、東北東約1.3kmの小原高尾神社古墳群(10)では前方後円墳1、円墳9基以上が存在したと推定される。

これらの古墳群の大部分は後期～終末期に属するものと考えられるが、西刑部古屋原古墳群には前期、磯岡北遺跡の古墳群には中期に属するものがある。さらに西方の田川寄りには、左岸に全長100mで二重周濠をもつ笹塚古墳(図外)があり、5世紀前半では県内最大級とされる。さらに田川の西(右岸)には、前方後方墳3基からなる茂原古墳群(図外)があり、当地の前期古墳の嚆矢と見られている。田川流域を中心に見られた前・中期の古墳群より派生した古墳群は後期～終末期にかけては鬼怒川沿いの台地縁辺部から低地の微高地まで拡散したものと推察される。これは集落の拡散と合わせ、広範囲な生産基盤の開墾が進捗した結果と判断される。

律令制下においては、当地は下野国河内郡に属し、本遺跡の南西方約8km(図外)の本市と上三川町に跨って所在する上神主・茂原遺跡が郡の行政・経済の中心たる郡衙(家)跡と推定され、国指定史跡となっている。また、河内郡にはこの他にも西下谷田遺跡、多功遺跡などの官衙跡及び類似遺跡が所在する。なお、本郡は11郷を管する中郡で、現在も「西刑部」、「東刑部」という地名が残っていることから、和名類聚抄に見える刑部郷に比定されている。しかし、南西約1kmの古屋原遺跡の調査で「財部」の墨書銘の見える土器が多数出土したことから疑問視する向きもあるが、前記の上神主・茂原遺跡の人名文字瓦群に「財部」が多く含まれていることからすれば、地名ではなく人名と見ることもできよう。なお、この上神主・茂原遺跡では古代東山道と目される道路状遺構が調査され、その延長が西刑部西原遺跡まで伸びていることが確認されている。さらに、この先は北方約7kmの陽東地区までルートが確定されておらず、今次開発区域内を通過している可能性が高いとされた。

集落跡をみると、今回の調査で遺跡の北東への拡大が確認された瑞穂野団地遺跡(3)をはじめ、その西に隣接する猿山遺跡(25)、成願寺遺跡、古屋原遺跡、大岡台遺跡(17)、上横田A遺跡、西刑部西原遺跡、砂田遺跡、笹塚遺跡(31)、磯岡遺跡などが知られ、成願寺北遺跡、藤越遺跡(16)もその可能性が高い。これらの遺跡では平安時代に至っても集落が継続して営まれたものが多い。

中世には当地は巨視的に宇都宮氏の勢力下にあったものの、同族間の争いなどもあり、その時々によりいずれの勢力に属していたかは微妙である。遺跡としては、鬼怒川低地の北北東約2.6kmに石井城跡(7)、同じく東方1.2kmに桑島城跡(11)があり、西方約1.3kmの江川右岸の台地上には猿山城跡が所在する。石井城跡は室町時代、桑島城跡、猿山城跡は鎌倉時代の築造と推定されている。また、南約1kmの成願寺は、天平神護元年勝道上人の開基と伝えられ、中世には宇都宮氏の庇護の下に隆盛したといわれる。近隣の調査事例を見ると、磯岡北遺跡では方形堅穴遺構、井戸跡などが確認され、溝や墳丘上から常滑産の陶器片などが出土している。根本西台古墳群の第1次調査でも、古墳群を再利用して中世末～近世前葉にかけての築城が営まれており、土葬墓80基の他火葬跡20か所ほどが確認された。また、墳丘周辺より、常滑産の陶器片や凝灰岩製の五輪塔の一部が出土しており、火葬された遺骨は甕等に納められ墳丘に安置・埋納されたと推定される。それが開墾によって墳丘が削平された際に失われたと考えられる。また、石塔類は古墳の石室用材を転用加工して作られた可能性が高い。

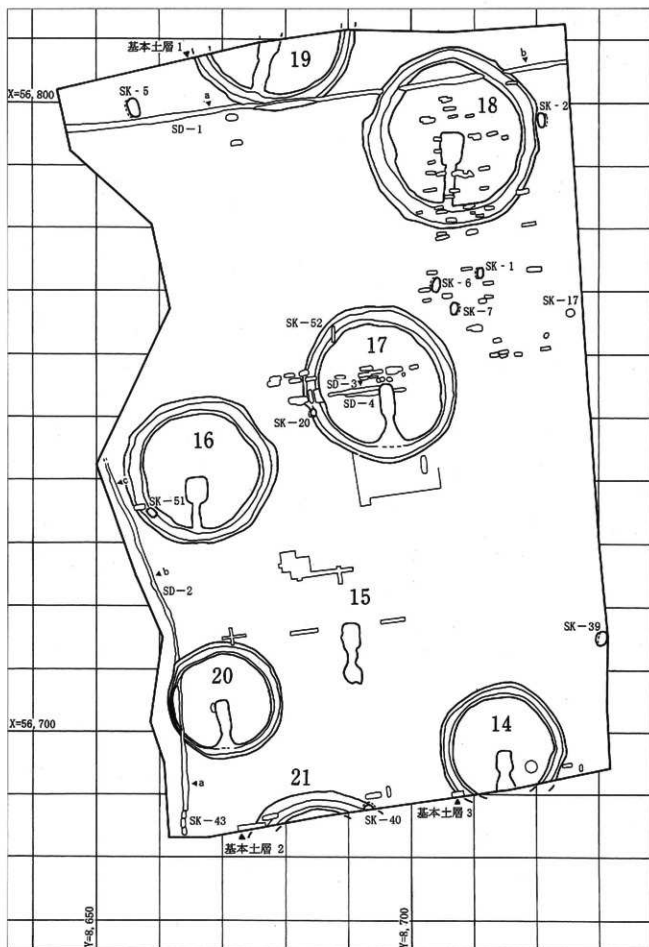


第3図 遺跡の位置と周辺遺跡

近世においては、宇都宮藩領に属し、鬼怒川流域の新田開発等が進められるが、開発区域の所在する台地上では宅地、墓地部分を除き雑木林になっていた所が多いと推察され、明治期には炭焼きも行われている。遺構・遺物の状況から、現在のような耕作地に開墾されたのは近代それも第二次世界大戦以降の場合が多いと推考する。

第1表 周辺遺跡一覧表 ○は本遺跡群

No	遺跡名	備 考
①	根本西台古墳群	前方後円墳3、方墳1、円墳14、不明2基調査（Ⅰ・Ⅱ次）、30～40基と推定
②	桑島台古墳群	円墳2基調査（Ⅰ次）、10数基存在と推定
③	瑞穂野団地遺跡	古墳中期～平安の集落跡3地区（Ⅰ・Ⅱ次）調査、旧石器、縄文土器も出土
4	三日月神社古墳群	円墳5～6基と推定
5	久部浅間山古墳	墳長32mの前方後円墳
6	久部愛宕塚古墳群	前方後円墳1、円墳3基
7	石井城	室町時代の城跡
8	石井久保田古墳群	前方後円墳1、円墳1、不明1基
9	榑木板遺跡・古墳群	縄文中期の集落跡、前方後円墳1、円墳1基など
10	小原高尾神社古墳	微高地上の前方後円墳、墳長36mを含め9基以内
11	桑島城跡	鎌倉時代の城跡
12	根本遺跡	微高地上の縄文中・後期の集落
13	飯塚古墳	墳長38mの前方後円墳。クビレ部に横穴式石室
14	飯塚山古墳・成願寺北遺跡	前方後円墳と奈良・平安時代の集落跡
15	成願寺遺跡・古墳群	古墳中・後期の集落跡、方墳3、円墳4、不明1基の古墳群
16	藤越遺跡	奈良・平安時代の散布地
17	大岡台遺跡	古墳後期～平安時代の集落跡
18	小屋原遺跡	奈良・平安時代の集落跡
19	小屋原高塚群	近世の高塚群？
20	大塚神社古墳	円墳2基
21	下栗大塚古墳	終末期の径43.5mの円墳、小円墳1
22	天王山遺跡・古墳	縄文・平安の散布地。円墳3基確認
23	東原古墳群	前方後円墳2、円墳4基
24	猿山城跡・古墳群	中世城郭、前方後円墳2、円墳9基など
25	猿山遺跡	奈良・平安時代の集落跡
26	下桑島西原古墳群	円墳2、方形周溝遺構を調査
27	南原古墳	墳長35mの前方後円墳
28	上横田A遺跡	古墳後期・平安の集落跡
29	砂田遺跡	15万㎡の大集落跡、古墳中～平安の集落跡
30	西荆部西原遺跡	新4号国道に跨って所在、西側で古墳後期～平安の集落跡
31	中島古墳群・笹塚遺跡	古墳5基、古墳～平安の集落跡
32	磯岡北遺跡・古墳群	古墳中期～奈良の集落、推定古代東山道調査、円墳8基
33	琴平塚古墳群	墳長52mの琴平塚を含め前方後円墳3、円墳11基



第4图 根本西台古墳群第2次調査区全体图

II 根本西台古墳群第2次調査

1. 調査の概要と調査の方法

(1) 調査の概要 (第4図)

今次調査区はI章に記した如く、第1次調査時の空中写真に古墳の周遶と思われるソイルマークが認められ、現地踏査によりその可能性が確実視された。今回開発計画が本格化したことにより、平成17年10月遺跡の新規発見手続きを取り、根本西台古墳群の範囲拡大と判断された。これに伴い、同年11月に実施した試掘調査によって6基の古墳と土坑などを確認した。事業主と市教委との協議により、遺構の確認された約1万㎡が発掘調査の対象となった。古墳の号数は第1次調査区最終の13号に続け14号より名称した。

第1次調査区の南端から今次調査区の北端まで約500mで、それぞれ南と北に広がる事が確認されている。また、前回の調査では13基中3基の前方後円墳が所在し、空中写真によれば今次調査区の南隣にあたる開発区域外の畑地にも前方後円墳の存在が推察される。しかし、当地は、いずれも円墳(1基は周遶が無く、墳形不明)と考えられ、本古墳群は1次調査区付近が中心と推察される。

本調査は同年12月1日より開始し、廃土置場の関係から調査区を南と北に分割して北半部から着手した。北半部16～19号墳の調査の進捗に伴い、18年3月に南半部の調査に取り掛かったところ、試掘調査の見込みより2基増えて計8基となった。古墳は、周遶の認められない15号墳、周遶の北端部のみの21号墳を除きいずれも円墳であった。また、埋葬主体部を確認できなかった21号墳を除き、全て川原石小口積みの横穴式石室で、深い墳穴内に構築されていた。全体に遺存状態が悪く遺物の出土も少なかった。また、90基ほどの土坑と数条の溝跡などを確認したが、縄文時代2基、古墳～古代9基の土坑以外は全て近代以降の農業耕作に関する施設と判断された。

調査は、長雨やⅢ章で報告する瑞穂野団地遺跡の調査の関係もあり、一時休止を含め、18年9月10日の空中写真撮影により全ての野外調査を終え、同月12日に市教委による立会いを受けて同月13日に終了した。

整理・報告書作成作業は同年7月より順次着手し、20年3月に終了した。

(2) 調査の方法と基本土層 (第5図)

今次調査区は開発区域の東端に位置し、北西部と東・南・北側の三方が未買収地に接していて、廃土置場が南西隣接地に限定されていた。また、調査区が南北に細長いことから、南・北に分割して調査を進めることとなった。

まず、北半部の表土を重機により除去し、人力作業による廃土を南半部に仮置きして作業を進めた。北半部の16～19号墳の調査がほぼ終了した後、南半部の表土と廃土を除去して南半部の調査を行った。南西部で新たに20、21号墳を確認し計8基となった。

いずれも削平により墳丘が遺存しないため、重機による表土除去後、人力により周遶、埋葬主体部の確認作業を行った。確認後は、それぞれ並行して埋積土の除去を行う。周遶は土層の実測・写真撮影の後、セクションベルトを除去し完掘。埋葬主体部の埋積土(破壊後の流入土)は廃土置場近くに集積し飾掛け作業を行った。この作業で全く成果の無かった場合でも、さらに取り置いた土・砂粒を水洗いすることによりガラス小玉、土玉等を確認したものもある。石室と並行して墓道・前庭部の調査を行った。石室と古墳の全景写真を撮影の後、石室の実測、遺物の取り上げを行う。その後、側壁、奥壁、敷石の順に解体しつつ構築状態を記録する。石室の解体を終了し墳穴のみの状態となった時点で再度全景写真を撮影した。また、平面調査で周遶の認められな

かった15号墳は周溝の推定位置にトレンチを設定して追及したが確認することができなかった。

土坑類については平面確認後、半截して土層を記録、完掘して写真撮影、実測を行った。なお、多数存在した近代の土坑は調査途中で性格が判明した場合は記録を省略したものもある。

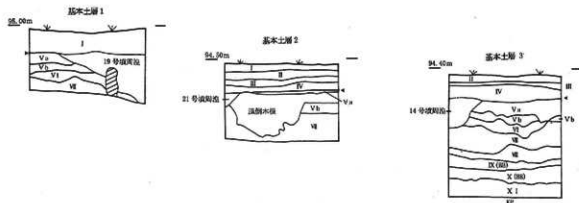
遺構配置図、墳丘図の作成は三次元測量を行った。他は全て人手で行い基本的に縮尺20分の1で作図した。調査の基準点は開発に伴う任意のものを利用したが、最終的にGPSにより公共座標（世界測地系・第Ⅱ座標系）に合致させた。

調査区の基本土層は次の通りである。

- 第Ⅰ層 暗褐色土 (10YR3/4) 締まりは弱い(耕作土) ローム粒微量を含む。
- 第Ⅱ層 暗褐色土 (10YR3/4) 第Ⅰ層と同様であるが、こちらは締まりが強い。(耕作土) ローム粒を5%ほど含む。
- 第Ⅲ層 褐色土 (10YR4/4) 締まりは強い。ローム粒を3%程含む。第Ⅱ層の直下に約4~12cmの厚さで堆積しているが水田の床土とは様相が異なっており、調査区の南端のみに堆積していて北端では見られなかった。
- 第Ⅳ層 黒褐色土 (10YR2/2) 締まりは強い。ローム粒5%程と約1~2mmの小石を微量に含む。
- 第Ⅴa層 暗褐色土 (10YR3/4) やや軟質で締まりは強い。(ローム漸移層上部) ローム粒3%程と赤色スコリア粒(今市軽石)を少量含む。
- 第Ⅴb層 暗黄褐色土 (10YR5/4) やや軟質で締まりは有る。(ローム漸移層下部) ローム粒を5%とローム塊(径約2~7mm)を少量含み、赤色スコリア粒(今市軽石)も微量含む。
- 第Ⅵ層 黄褐色土 (10YR5/6) やや軟質で締まりは有る。僅かにb層が混じり、部分的にロームブロックが含まれる。
- 第Ⅶ層 明黄褐色土 (10YR6/8) やや軟質で粘性があり、締まりは強い。単一層である。
- 第Ⅷ層 黄褐色土 (10YR5/6) やや軟質で粘性があり、締まりは強い。黄褐色スコリアを微量含む。
- 第Ⅸ層 暗褐色土 (10YR3/4) やや軟質で粘性があり、締まりは強い。(ブラックバンド上部)。
- 第Ⅹ層 暗褐色土 (10YR4/3) やや軟質で粘性があり、締まりは強い。(ブラックバンド下部) 黄褐色スコリア粒(鹿沼軽石)を少量含む。
- 第Ⅺ層 黄褐色土 (10YR5/6) やや軟質で粘性はない。締まりは強い。(鹿沼軽石漸移層) X層より明るくKP粒(鹿沼軽石)を7%程含む。

調査区は台地の東縁に南北に細長くあり、北と南では約50cm程の高低差が認められ、地山面は東の越戸川に向かって緩やかに下降する。

V a層が古墳周溝等の確認面であり、縄文時代の土坑(SK-17)の確認面はV b層となる。また、石室の竈穴周辺には旧表土層と考えられる黒色土が部分的に残存する古墳も見られた。



第5図 基本土層図

2 遺構と遺物

今次調査では古墳時代終末期の古墳8基、土坑90基、溝跡などを確認した。古墳は8基のうち周濠の認められなかった15号墳、周濠の北端のみの調査であった21号墳以外の6基はいずれも円墳である。開鑿などにより墳丘は全て失われていたが、周濠が遺存し周濠の内側に旧地表が残存するものが多い。埋葬主体部の石室も全て後世に破壊されていたものの、深い横穴内に構築された半地下式であった為、本来の形態を推定することが可能であった。主体部分が調査区外にあって調査できなかった21号墳以外はいずれも川原石小口積みの横穴式石室で、天井や玄門、奥壁に凝灰岩を使用していたと思われるものも見られた。全体に遺物の出土量は少なかったが、石室の埋積土の篩掛け及び水洗い作業によって多数のガラス小玉を確認した。

土坑類は90基以上を確認したが、縄文時代2基、古墳時代終末期～奈良・平安時代9基のほかは全て近代の農耕に関するものと判断された。溝跡も耕作地を境する地境・根切り溝と考えらるものである。

古墳時代以外の遺物は周濠・土坑より縄文時代の土器片、石器、平安時代の土師器などが少量出土している。

(1) 14号墳

現況 調査地は荒地であったがそれ以前は畑地であり、近代の開鑿による削平を受けて墳丘は消失し、その存在は全くわからない状態であったが、試掘調査によって周濠及び石室の痕跡が確認できた。

位置 調査区南東隅に位置し、円墳と思われるが、南側周濠と墓道の一部は調査区外の為に確認できなかった。本墳の南西約14mに21号墳、北西約15mには15号墳がある。全域がごほう耕作による攪乱を受け、石材もそのほとんどが抜き取られ敷石すら失われていた。今次調査区で最も破壊の著しい石室である。

墳丘及び外部施設 (第6・7図, 図版3 A・B.) 平面形は円形と思われ、中心よりやや南寄りに南向きに開口する横穴式石室が構築されていた。規模は周濠の内側の立ち上がりで径約17m。周濠を含めると約20m。封土は全く遺存せず、残存高は最も高い部分と周濠底部との比高が約70cmである。

周濠は幅160～235cm、旧地表面からの深さ52～68cmで全体を圍繞していると思われる。底面は西側が若干浅いもののほぼ平坦で、南に向かって僅かに下っているが南側は未調査の為に明確ではない。壁は緩い弧状で立ち上がり、断面形は碗形である。埋積土は暗褐色土・黒褐色土・暗黄褐色土の3層で、締まりの良い自然埋没である。

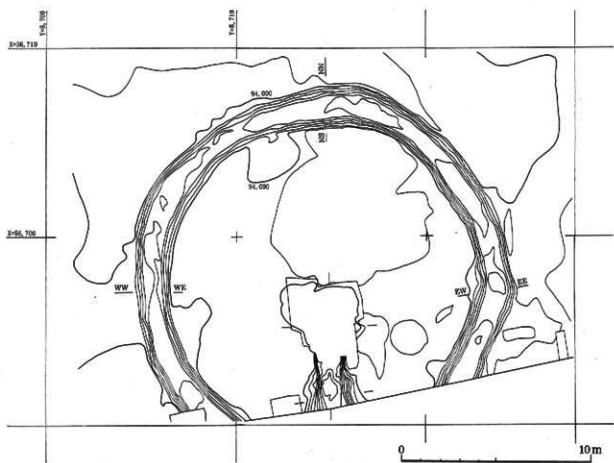
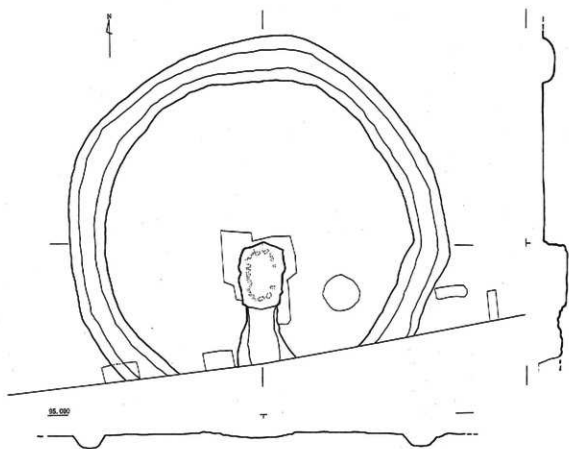
本墳に葺石の施設や埴輪の樹立は無かったと考えられる。

墓道は周濠寄り未調査のため全容は判然としない。現状の規模は長さが130cm、幅は約180～280cmで、南に向かって扇状に広がっている。深さは約85cmである。底面は凹凸が激しく、壁は弧状に立ち上がった後上位では傾斜が緩くなっている。埋積土は周濠と同様であるが、追葬もしくは古い盗掘の影響か最下層よりガラス小玉が1顆出土している。

埋葬主体部 (第7・8図, 図版3 C・D.) 石室は石材のほぼ全てが失われており遺存状態が極めて悪かったが、石材の痕跡から袖無型横穴式石室であったと推察し得る。旧地表面より掘り込まれた長さ約457cm、幅約240cm、深さ約100cmの横穴内に、川原石の小口積みで南に出入口を向け設けられていた。石室全長は推定370cm、主軸方位はN-1°-Wである。

玄室は壁材の遺存は1点も無く底面に残る根石の痕跡から長さは東壁約230cm、西壁と中央部は約200cm。幅は奥壁部約90cm、最大幅約115cm、入口付近約70cmの朋張型であったと推定される。

天井石と思われる石材は全く遺存していなかった。玄室奥壁の詳細も不明だが、痕跡から長軸約60cm、短軸約15°以上の大きめの川原石が奥壁として玄室長軸と直行するように設置されていたことが伺える。玄門



第6图 14号墳填丘

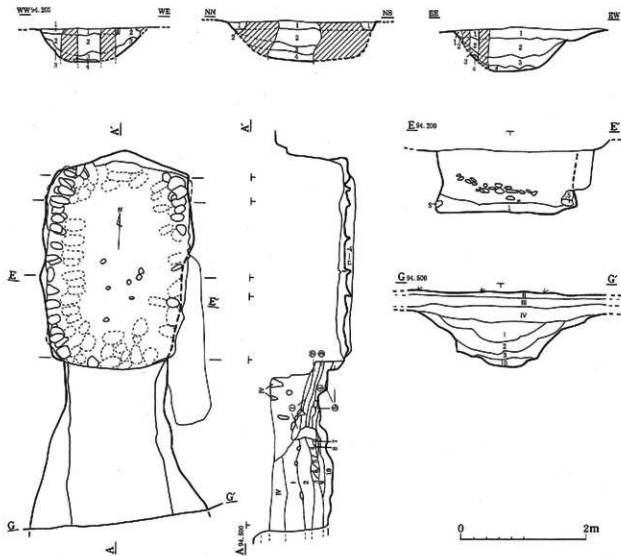
はその痕跡すら遺存せず、詳細は不明である。床面は攪乱された埋積土中に径6~20cmの円礫が多数混入していたことから、敷石が施設されていたものと判断される。玄室の埋積土はほとんどが攪乱土であったが、一部壁際に裏込めが遺存していた。土層観察により10~25cm程の厚さづつ作業されていた事が推察できる。

羨道も遺存状態が悪く詳細は不明だが、現状の長さは約120cmで羨門の痕跡は認められない。

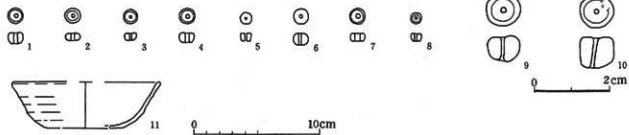
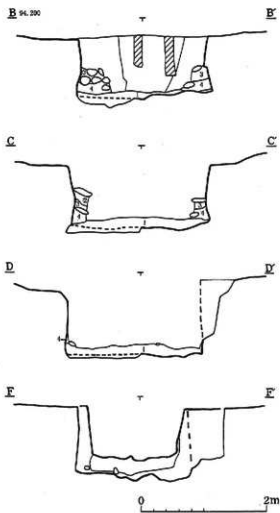
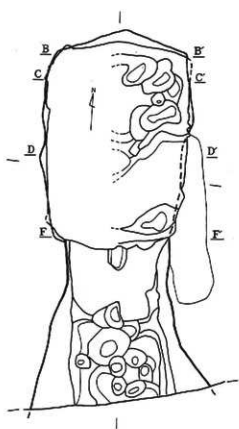
塚穴底面は凹凸があり、羨道部が玄室より40cm程高くなっている。

羨道の閉塞は上位の攪乱によって遺存状態が悪く判然としなが、下層にはローム粒・ブロックと混合した黄褐色・暗褐色土等が互層に堆積しており、複数の追葬が推察される。なお、これらの土の上にはいくつかの川原石が見られ、最終時の閉塞もしくは盗掘時の痕跡と考えられる。

遺物(第8図, 第2・9表, 図版15) 石室埋積土の篩掛け及び水洗いでガラス小玉108顆(1~8), 土玉2顆(9・10), 鉄片2点が出土した。また、周濠の東側より内面黒色処理の土師器杯の破片(11)が少量出土している。ガラス小玉は第9表, 土器は第2表参照。



第7図 14号墳周濠土層, 石室(1)



第8图 14号墳石室(2), 出土遺物

(2) 15号墳

現況 調査地は荒地であったが以前は畑地であり、近代の開墾による削平を受けて墳丘が消失しており、本墳の存在も全くわからない状態であったが、試掘調査によって石室の所在が確認された。

位置 調査区の南方に位置し、西方約12mに20号墳、南東約15mには14号墳が所在する。全域がごぼう耕作による攪乱を受け、石材の抜き取りも行われていたが、石室下位の石材は辛うじて遺存していた。尚、周濠は平面調査で確認できなかつたため想定位置にサブトレを入れて精査したが確認できず、石室・墓道・前庭部の調査となった。今次調査区で、唯一周濠を確認できなかつた古墳である。

墳丘及び外部施設(第9図、図版3 E・F.) 墳丘は開墾による削平で封土は全く遺存せず、周濠も確認できなかつたことから、墳形・規模とも判然としない。石室の確認面が旧地表面で周囲より5cmほど高くなっており、この付近に封土が存在したものと推察される。

墓道は玄室及び羨道よりも10cm程高くなっており、遺存状態が非常に悪い。長さ約175cm、幅約105~160cm、深さ16~25cmである。底面は緩やかに南へ下降し、そのまま前庭部へと落ち込んでゆく。また、石室寄りの底面には1~2cm程の厚さで、淡黄色の粘質土が認められた。壁は緩く外傾して立ち上がり現在高15~25cmで、上位は削平によって消失したものとと思われる。埋積土は暗褐色土と黄褐色土で、よく締まっていた。

前庭部は南北を長軸とする楕円形で330×290cm、深さは最大約70cmで断面形は碗形である。北側は墓道と連結し、底面は南に向かって緩やかに深くなってゆく。埋積土は4層で構成されており上層より暗褐色土・黒褐色土・暗黄褐色土・黄褐色土で締まりが強く自然堆積と考えられる。また、上層には石室材が混入していたが、追葬時のものか古い時期の盗掘によるものかは明確にしがたい。西壁際の底面近くより、ガラス小玉が1顆出土している。

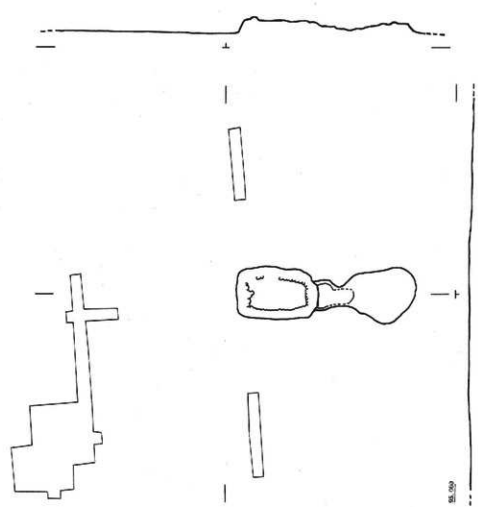
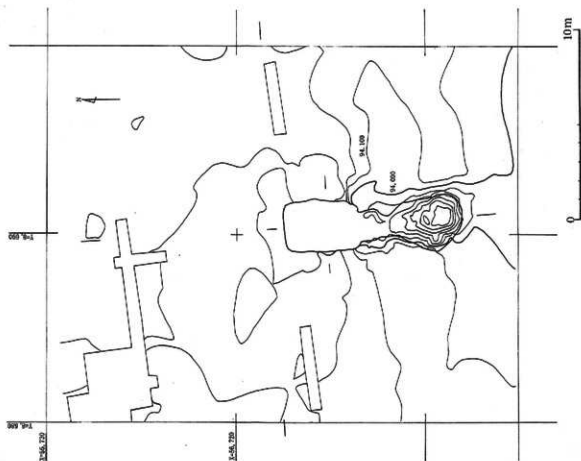
本墳に葦石の施設や埴輪の樹立は無かつたものと考えられる。

埋葬主体部(第10・11回、図版3 G・H. 4 A~F.) 南向きに開口する袖無型の横穴式石室であったと思われるが、根石に至るまでの攪乱を受けており、遺存状態は良好ではない。石室は旧地表面より掘り込まれた長さ約425cm、幅約273cm、深さ78cmの壙穴内に半地下式で構築されていた。羨道を含む石室の全長は350cm、主軸方位はN-4°-Wである。玄室の長さは約300cm、幅は奥壁部約120cm、最大幅170cm、玄門付近が約100cmと東西壁が大きく外側に張り出す胴張型である。

玄室の奥壁も大部分の石材が失われているが、残存状況から幅約50~60cm、厚さ30cm程の板状の石材を鏡石として据え、その両脇は川原石を小口積みしていたと判断される。調査時に石室の埋積(攪乱)土中より凝灰岩の破片が多数出土したことから、奥壁に凝灰岩が使用されていた可能性が高い。側壁は奥壁鏡石の両脇から続く川原石小口積みで、径約15~20cm、長さ約20~30cmの細長の川原石が使用されていた。玄室の床面には径5~15cmの礫を12cm程の厚さに敷き詰め埋葬面としていた。敷石は大きさに規則性を欠くが、大ぶりのものは厚さ3~6cm程の扁平なものが多く、所によりこれらが縦位になっているところも見られた。したがって盗掘もしくは破壊の際に敷石が攪乱されたものと思われ、遺物の出土状況からも伺える。

玄門の施設は認められなかつたが、床面の南側には敷石が無く長さ22~33cmの細長の川原石が石室長軸と直行するよう2列に並べられていた。これより南が羨道に相当すると判断され、幅約100cm、長さ約50cm、確認面からの深さは55cmで玄室の敷石とほぼ同じ高さとなる。羨道部は壙穴の壁が露出していて石材の遺存は認められず、羨門の施設も認められなかつた。

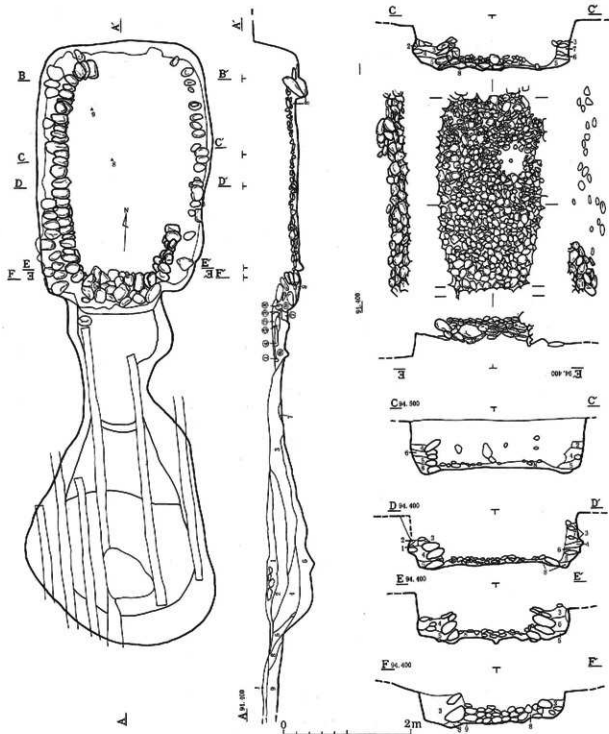
天井部は玄室・羨道部ともに全く遺存せず、用材の残存も見られなかつた。しかし、前述の石室の埋積(攪乱)土中より凝灰岩の破片が多数出土しており、玄室の最大幅が170cmと胴張りが強いことから、奥壁のみな



第9图 15号城址

らず天井部にも凝灰岩が使用されていた可能性が高い。

壙穴の底面は、敷石の下部がほぼ平坦で、玄室の側壁根石部と羨道部分がやや窪んでいた。しかし、敷石の下部は地山ではなく、黒色土主体の土で整地したもので、非常に堅く締まっていた。さらに、側壁の根石は平らではなく、外側が前記の窪みに揃えられ、内側が高くなるよう斜めに設置されていた。その後、外側をローム主体の土で整地して2段目以上はほぼ平らに積み上げられていた。また、壁材と壙穴の壁の間隙には黒色土混じりのロームが裏込め材として詰められて堅く締まっていたが、他の石室程は川原石が混入されていなかった。

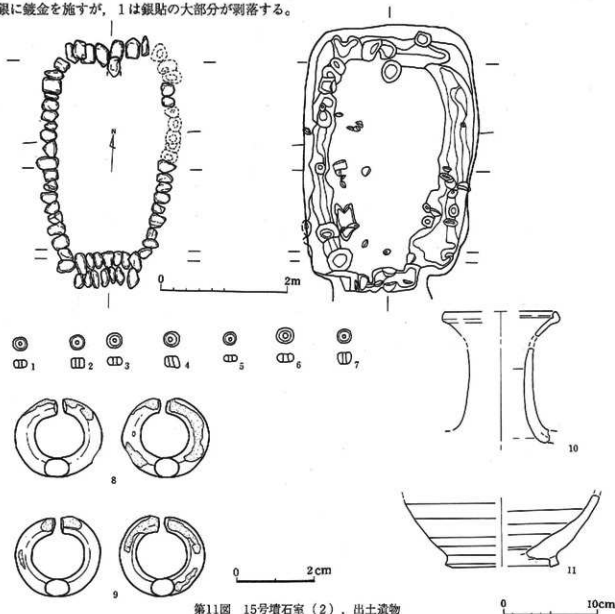


第10図 15号壙石室 (1)

尚、奥壁鏡石の推定位置の中央手前に、長さ約40cmと側壁の根石よりも長大な川原石が、上部を奥に向けた斜めの状態で認められた。当初は落下した壁材が敷石間に食い込んでいたと思われるが、下端は墳穴底面に掘られた小穴内に埋め込まれていることが判明した。その目的としては、設置位置から奥壁鏡石の内傾を防ぐ支柱的なものと推察され、石室の使用時に鏡石が内傾してきた為に設けられたものか、当初より施設されていたものか判然としない。

本跡の閉塞については明確でないが、羨道部床面近くに川原石が35～40cm程の高さに乱雑に積み上げられており、これがその痕跡かと推察される。尚、前述のように墓道の石室寄りの床面に薄く粘質土の遺存が確認されており、あるいは当初羨道の外の粘質土で閉塞されていたものが追葬に際して石材による閉塞に変わったものやもしれない。

遺物（第11図、第3・9表、図版15） 遺物は支室の敷石上面と敷石下より金銅製耳環が各1計2点（8・9）、敷石上面及び埋積土中よりガラス小玉計76顆（1～7）が出土。また、閉塞部より須恵器瓶（10）、前庭部より壺下半部（11）が出土した。ガラス小玉は第9表、土器は第3表参照。8・9は銅地銀貼の耳環で、8は外径が20×22cm、芯は径5×6.5mm、重量7.7g。9は外径が21×22cm、芯は5×6.8mm、重量6.2g。ともに銀に鍍金を施すが、1は銀貼の大部分が剥落する。



第11図 15号墳石室（2）、出土遺物

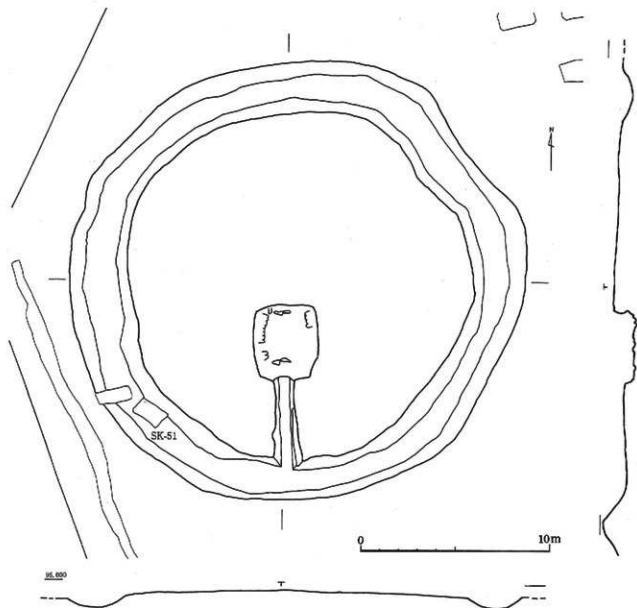
(3)16号墳

現況 調査時は荒地であったが以前は畑地であり、近代の開墾による削平を受けていた。本墳は僅かな地影が残っており、平成10年度の空中写真に周濠と思われるソイルマークが写っていた事から当初より古墳の存在が予想されていたところで、試掘調査によって主体部及び周濠が確認された。

位置 調査区中央の西端に位置する円墳で、北東約8mに17号墳、南方約15mには20号墳が所在する。全域がこぼり耕作による攪乱を受けており、石材も根石の一部にまで至る大部分が抜き取られていた。

墳丘及び外部施設(第12・13図、図版4 G・H 5 A.) 墳丘の平面形は円形で、中心よりやや南寄りに南に向かって開口する横穴式石室が半地下式に構築されていた。墳丘の規模は周濠内側の立ち上がりで径約19m、周濠を含めると約23~24mである。残存高は墳丘の最も高い部分と周濠底部との比高が約100cm。封土は全く遺存していなかった。

周濠は幅約220~300cm、深さ約50~60cmで全体を圍繞している。底面は北東部が最も浅く、南に向かって緩やかに下降し、南西が最も深くなる。断面形は皿形で最も深い中央部付近から弧状に立ち上がってゆくが、墳丘側の勾配が外側より若干急になっている。埋積土は3層に大別され、上層より黒褐色土・暗褐色土・暗黄

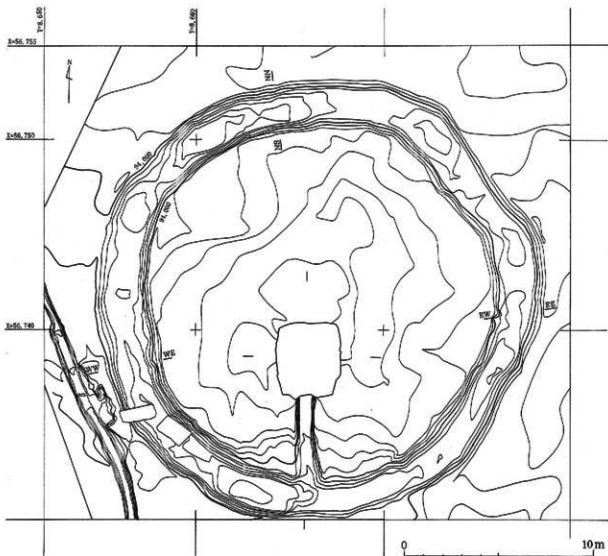
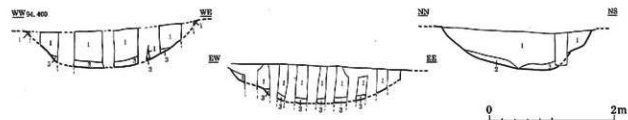


第12図 16号墳墳丘(1)

褐色土で良く締まった自然埋没である。尚、周濠南西部にはSK-51 (64頁) が重複しており、SK-51の直上にあたる周濠埋積土の中・下層より多量の土師器片が出土している。

墓道は、長さ約500cm、幅約90~143cm、深さ55~75cmで周濠に近づくにつれて少しずつ広がっている程度で、扇状にはならない。底面はほぼ平坦だが、周濠に向かって僅かに下降している。壁はやや外傾しつつ立ち上がり、断面形は逆台形である。埋積土は周濠とほぼ同様であるが、上位には凝灰岩片が混入しており、北側の最下層には閉塞の残存と推定されるにぶい黄褐色土が、長さ約165cm、厚さ25cm程度遺存し、層の中ほどには追葬時の痕跡と思われる砂質の黒色土層が見られた。

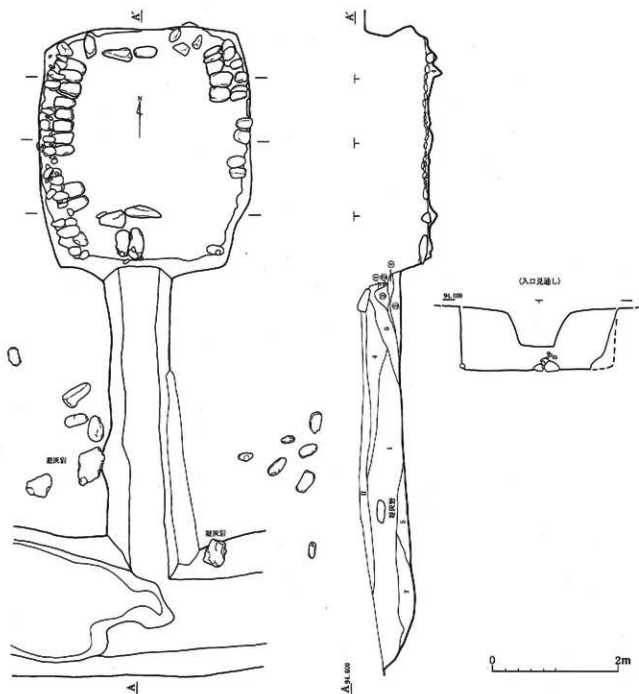
本墳には、葦石の施設や埴輪の樹立は無かったと判断される。



第13図 16号墳墳丘(2)、周濠土層

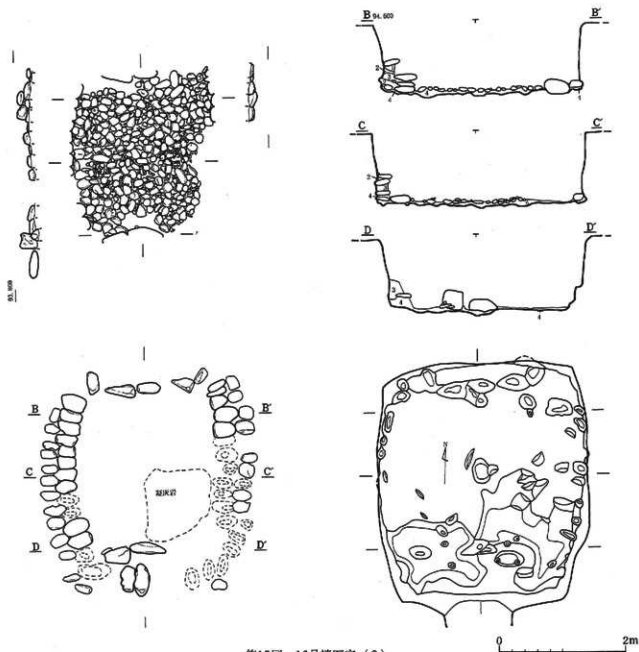
埋葬主体部（第14・15図，図版5B.～F.） 石室は敷石や根石の一部を含む大部分の石材が抜き取られていて遺存状態は悪かったが，遺存した石材の痕跡から両袖型の横穴式石室と推察し得る。旧地表面より掘り込まれた長さ約370cm，幅約330cm，深さ約110cmの横穴内に南を入口に構築されていた。羨道を含む石室全長は約320cm，主軸方向は磁北である。玄室の長さは約230cm，幅は奥壁部で約180cm，最大幅約210cm，玄門付近が推定190cm程の胴張型だが，長軸と短軸に差が少なく，正方形に近い形状であった。

天井石は全く遺存していなかったが，墓道の両脇の墳丘上に川原石の石材に混じて加工された凝灰岩塊が散在しており，奥壁・玄門か天井石等が抜かれて加工された残材が廃棄されたものと考えられる。玄室奥壁は石材の抜き取りが著しく詳細は不明だが，径約16～20cm，長さ約40～47cmの川原石が2個，玄室主軸と直交する状態で遺存していた。鏡石を設置のため土台石と推察される。前記のように鏡石については遺存が無く不



第14図 16号墳石室（1）

明であるが、敷石下の整地層上に多量の凝灰岩細片が散乱しており、凝灰岩の鏡石や玄門等を加工した痕跡と考えられる。側壁は西壁と東壁の奥の一部が僅かに遺存するのみであったが、川原石の小口積みで、径約10～25cm、長さ約25～40cmの細長い川原石が使用されていた。玄門は玄室中心軸の20cm程西に東西長約43cm、南北長約25cmの長方形で、現存高約35cmの柱状に加工された凝灰岩が、床下約7cmの掘り込みに据えられた状態遺存しており、東側にも掘り込みのみではあるが対となる痕跡が遺存することから、約55cmの幅で施設されていた玄門柱と推定される。また、玄門柱の間には、径約18cm、長さ約55cm、高さ約20cmの細長の川原石が、長軸を玄室の中軸線上に直交して設置されており、これが樞石と考えられる。玄室床面は、一部攪乱されている所があるものの、径約8～20cmの大きさを主体とする礫が10cm程の厚さで敷き詰められており、ここが埋葬面と考えられる。しかし、並べ方には整然性が欠けており、追葬もしくは盗掘等の攪乱の可能性も推測できる。したがって玄室は床面まで攪乱を受けており、裏込の一部と敷石下の整地層のみが築造時のまま遺存していた。西壁の裏込めには壁材よりもやや小振りな川原石が根石部を主体に用いられ、黒色土混じりの口



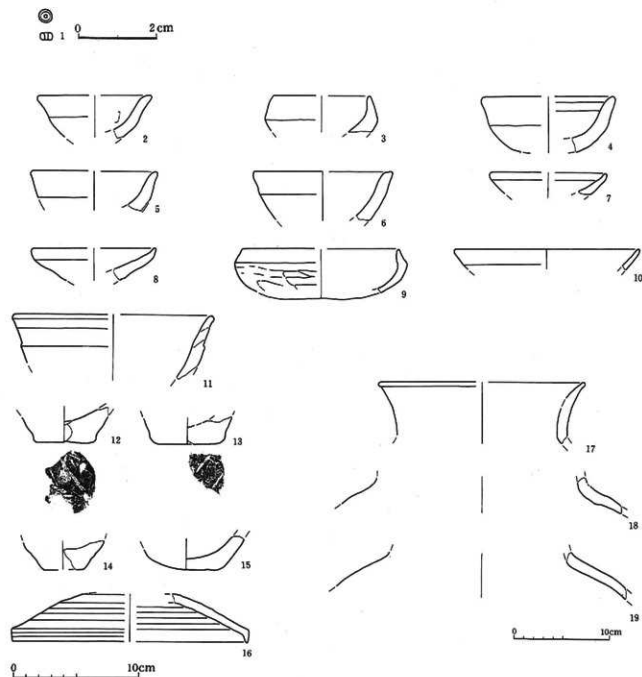
第15図 16号墳石室(2)

ームで突き固められていた。土層観察では約10~20cmの厚さづつ、作業が繰り返されたことが伺える。

羨道は、椀石の南側に径約20cm、長さ約40~50cmの細長い川原石の根石が縦位に2個並んで遺存するのみで、羨門も痕跡すら確認できなかった。規模は長さ約50cm、幅約70cmと推定されるが、遺存が悪く断定はし難い。

墳穴底面はほぼ平坦だが、羨道部に若干の掘り込みが見られる。玄室と羨道の床面に高低差は無かったと推考するが、墓道は羨道より30cm程高くなっていた。

遺物 (第16図, 第4・9表, 図版13) 遺物は石室埋積土の篩掛けでガラス小玉1顆(1), 周濠埋積土中より土師器・須恵器(2~19)が出土。南西周濠の土師器類はSK-51(64頁)に伴うと考えられる。ガラス小玉は第9表, 土器類は第4表参照。



第16図 16号墳出土遺物

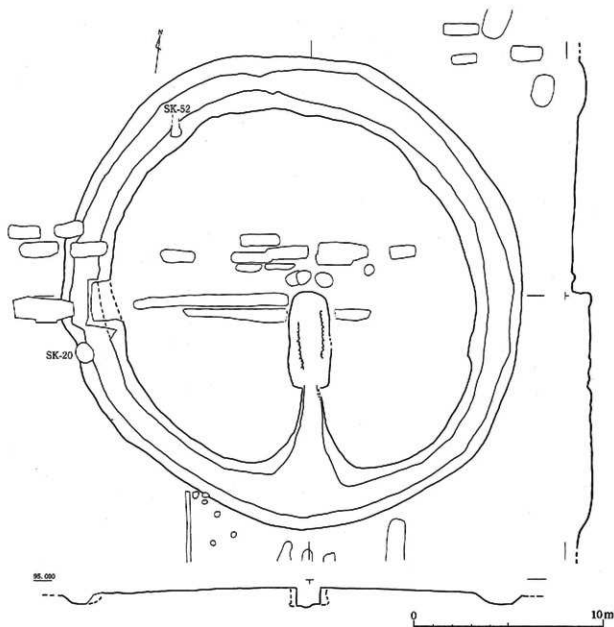
(4) 17号墳

現況 調査時は荒地であったが以前は畑地であり、近代の開墾による削平やごほう耕作による擾乱を全域に受けていた。僅かな地彫れが残っており、平成10年の空中写真に周濠と思われるソイルマークが写っていた事からその存在が推察された。試掘調査によって主体部及び周濠が確認された。

位置 調査区のほぼ中央に位置し、南西約8mに16号墳、北東約15mには18号墳が所在する。石室は石材の大半が抜き取られていた。

墳丘及び外部施設 (第17・18図, 図版5 G・H.) 平面形は円形で、墳丘の中心よりやや南寄りに半地下の横穴式石室が構築されていた。墳丘は周濠内側の立ち上がりで径約20m, 周濠を含めると約24mの円墳である。現存高は墳丘の最も高い部分と周濠底部との比高が63cmで、封土は全く遺存していなかった。

周濠は幅250~295cm, 深さ38~60cmで全体を圍繞している。底面は多少の凹凸はあるものの北から南へと下っており、墓道の南側が最も深くなっている。壁は緩く弧状で立ち上がっており、皿形の断面形である。埋

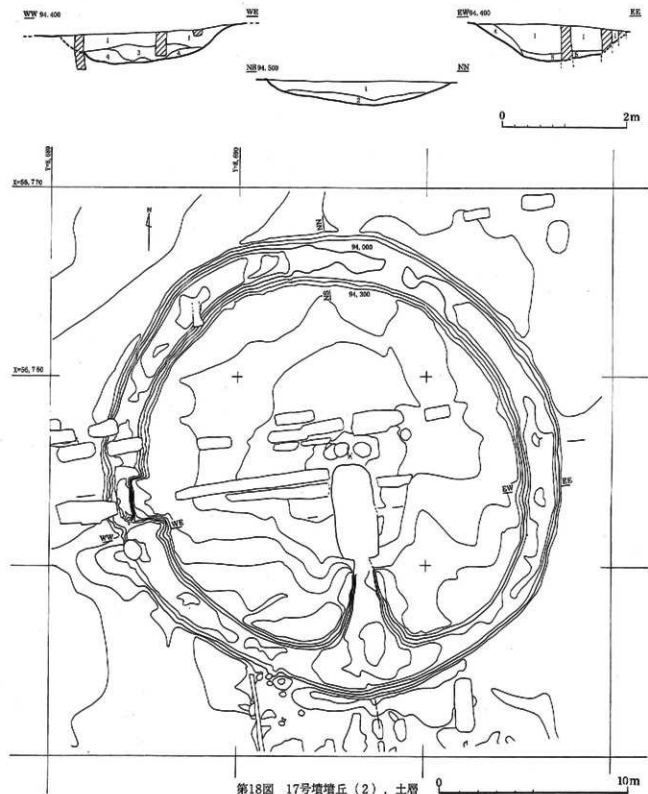


第17図 17号墳墳丘(1)

積土は上層より黒褐色土・褐色土・ぶい黄褐色土・暗褐色土の4層で、ローム粒を含んでよく締まった自然埋没である。また、南西部には周濠外周に沿うように外壁際に抉り込み土坑（SK-20，62頁）が確認されており、本墳と関係をもつ土坑墓と考えられる。

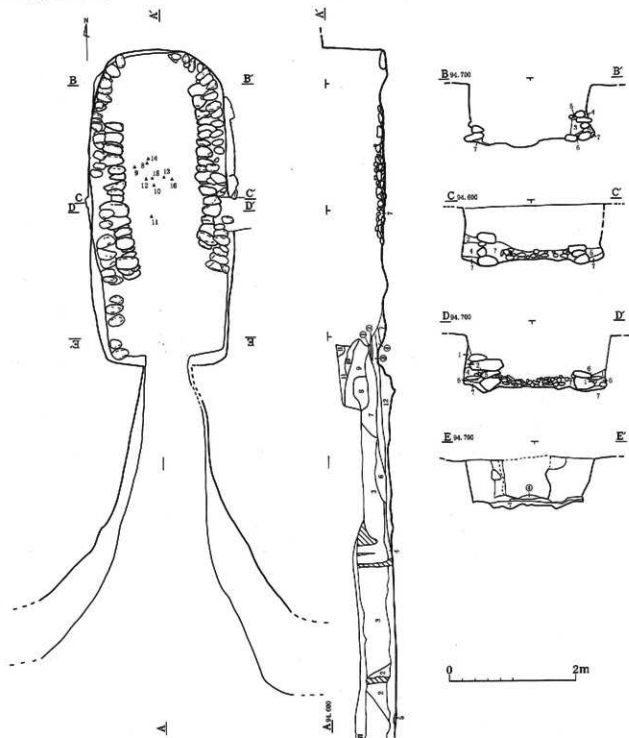
本墳には葺石の施設や埴輪の樹立は見られなかった。

墓室は、長さ約560cm，幅約77～320cm，深さ約60cmで、石室側が最も狭く南に向かって扇状に広がりながら周濠に連なってゆく。底面は僅かに凹凸があるものの高低差は無く，壁はほぼ直立し，断面形は箱型である。



埋積土は黒色土・黒褐色土・暗褐色土・黒色土とロームの混合土で自然埋没と思われる。

埋葬主体部（第19・20図，図版6 A.～F.） 石室は石材の抜き取りが著しく大半が失われていて遺存状態が悪かったものの，破壊の目的が石材の抜き取りであったためか敷石直上には副葬品が遺存し，今次調査区では最も多く遺物の出土した石室である。袖無型の横穴式石室である。旧地表面より掘り込まれた長さ約500cm，幅約225cm，深さ約90cmの横穴内にほぼ南を入口に構築されていた。石室の全長は約420cmで主軸方位はN-7°-Wである。玄室は長さ約280cm，幅は奥壁部が推定で約95cm，最大幅約115cm，玄門付近が約90cmと僅かに胴張型である。



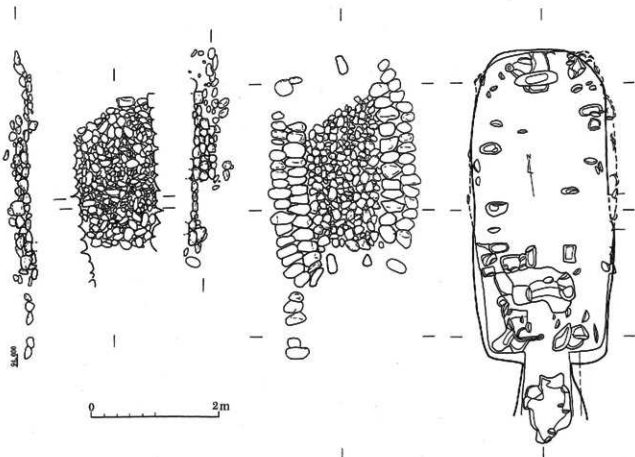
第19図 17号墳石室（1）

天井部は全く遺存せず、石材の残存も見られなかった。玄室奥壁は径約13cm、長さ約30cmの根石が1個遺存するのみで、鏡石も石積みも失われていたために詳細は不明である。玄室の側壁は径約10~23cm、長さ約18~45cmの細長の川原石を小口積みにして構築されているが、上部の石材が抜き取られていて現状では根石を含む3~4段、現存高約20~45cmが遺存するのみである。玄門部もほぼ全ての石が抜かれていて、框石も遺存せず、側壁のものと思われる根石が2個残るのみであった。玄室床面は、塚穴底面に径約5~20cmの礫を敷き、さらにその上にやや小粒の混じる同様の礫を10cm程の厚さに敷き詰められており、ここが最終埋葬面と考えられる。石室の埋積土は全てが擾乱であるが、塚穴と壁材の間には築造時の裏込めが遺存していた。裏込めは根石部を主体に壁材よりやや小振りで細長の川原石が用いられ、黒色土混じりのローム土で突き固められていた。土層観察から約20~25cmづつの厚さで作業したと推察される。

羨道はほぼ全ての石材が失われているために判然としないが、僅かに遺存する根石の痕跡から長さ推定100cm、幅が約45cmの規模であったと推される。羨門は石材が全く遺存しないものの、僅かに塚穴に痕跡が認められ、幅40cm程の規模と推察される。

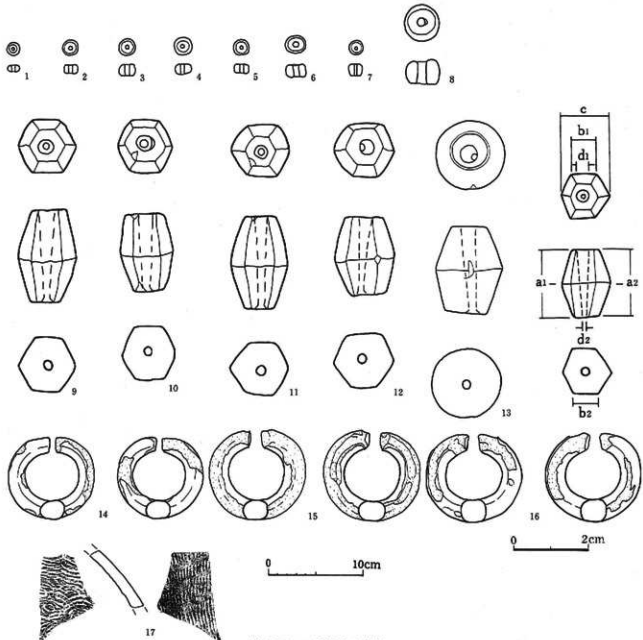
塚穴底面は羨道部に窪みを持つものの、玄室部はほぼ平坦に整地されていた。整地層の下には、全域に掘削時の工具痕が残されていた。

墓道北端の閉塞は石材の抜き取りによる擾乱によって遺存状態が悪く明確ではないが、暗褐色土・黄褐色土・白色粘土・黒褐色土などで構成されていたと考えられる。範囲は東西長約80cm、南北長約55cmで、厚さ20cm程が遺存した。尚、遺存する閉塞上面に黒色で砂質の硬化面が見られることと、下層の敷石中から副葬品が出土していることを考えると、あるいは追葬が行われて敷石が動いた可能性も推察される。



第20図 17号墳石室(2)

遺物 (第21図, 第5・9表, 図版13・15) 玄室の敷石直上より金銅製耳環3点 (14~16), 切子玉4顆 (9~12), 琥珀製薬玉・丸玉各1顆, 石製丸玉1顆 (8) が出土し, 下層の敷石よりも切子玉1顆 (13) が出土。玄室埋積土の篩掛けで, ガラス小玉29顆 (1~7), 須恵器甕 (17) などが出土した。玉類は第9表, 土器類は第5表参照。14~16は銅地金貼りの耳環で, それぞれ金貼りの40~60%は剥落する。14は外径22×23mm, 芯は径4.5×6mm, 15は外径23×26mm, 芯は径4.5×6mm, 16は外径23×25mm, 芯は径5×7mm。



第21図 17号墳出土遺物

(5) 18号墳

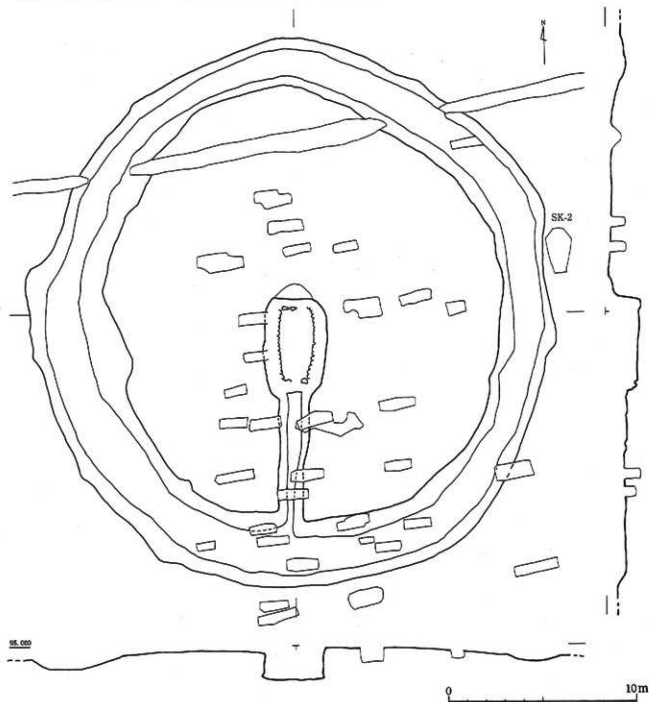
現況 調査時は廃屋の敷地内で荒地状態となっていたが, 墳丘の存在が予想されており, 試掘調査によって主体部及び周濠が確認された。

位置 調査区北東に位置し, 調査区を東西に横切る近代の溝に北側墳丘の一部が切られていた。本墳は上位を近代の開墾によって削平されてはいるものの, 民家の敷地内であったためにごほう耕作による擾乱は受けていなかった。しかしそれ以前のものと思われる多数の土坑により擾乱を受けていた。

墳丘及び外部施設（第22・23図，図版6 G・H.） 平面形は円形で墳丘の中心よりやや南寄りに，南に向かって開口する半地下の横穴式石室が構築されていた。規模は周濠内側の立ち上がりで径約23m，周濠を含めると約29mの円墳である。残存高は墳丘の最も高いところと周濠底部との比高が120cmで，黄褐色土の封土が主体部の周囲に1～10cm程の厚さで遺存していたが，墳丘本来の規模の推定には至らなかった。

周濠は幅約250～350cm，深さ約40～50cmで全体を圍繞している。底面はほぼ平坦で北東部が最も浅く，南に向かって徐々に下降し，西側が最も深くなっている。壁は弧状に立ち上がっているが，底面は広く，断面形は皿形である。埋積土は黒褐色土・黄褐色土で，ロームを含みよく締まった自然埋没である。

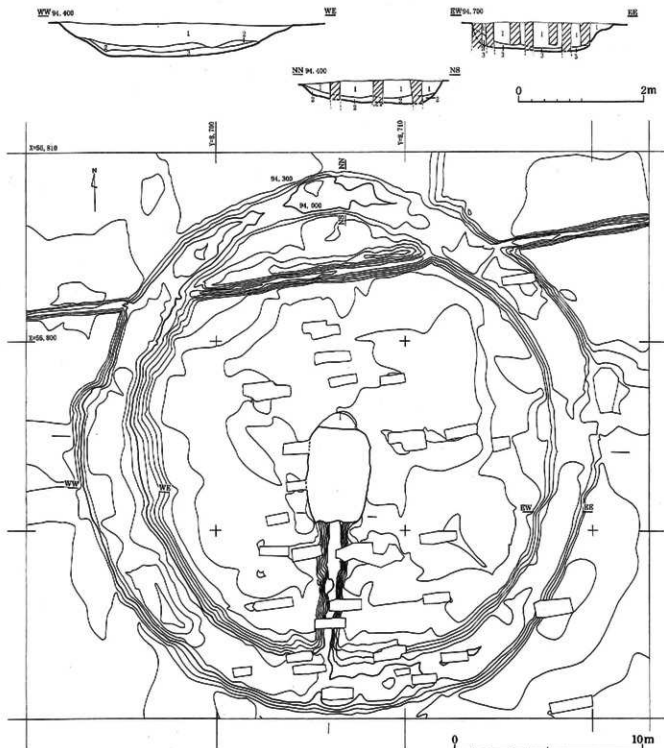
本墳には葦石の施設や埴輪の樹立の痕跡は認められなかった。



第22図 18号墳墳丘（1）

墓道は長さ約765cm、幅約128~165cm、深さ約70cmで南側が若干広くなる程度で扇状の広がりは見られない。底面はほぼ平坦である。壁は下位ではほぼ直立するものの上位ではやや外傾し、断面形は逆台形である。埋積土は上層より黄褐色土・暗褐色土・黒褐色土の3層に大別でき、褐灰色粘土塊を含んでいた。

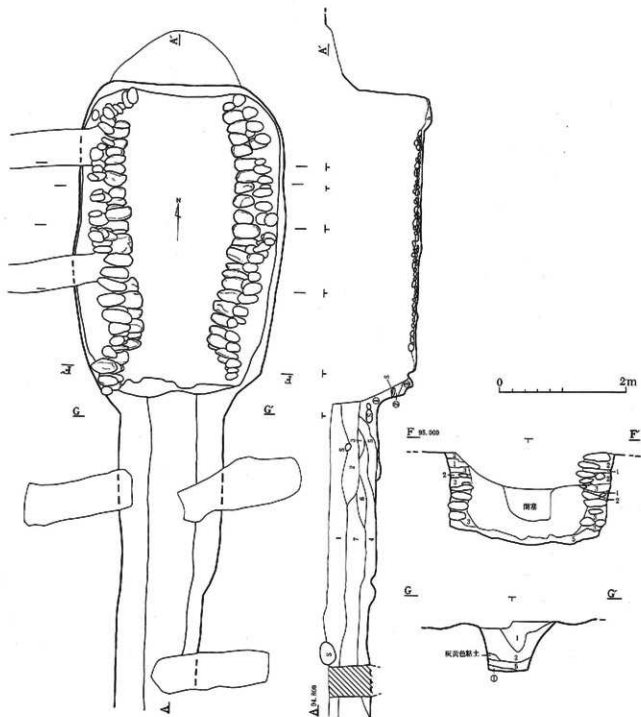
埋葬主体部（第24・25図、図版7A.~H.）石室は石材の抜き取りが著しく、奥壁・玄門・側壁部の上部が持ち去られていて遺存状態が良好とは言えないが、側壁に関しては最高で7段までの石材が遺存していた。袖無型の横穴式石室である。旧地表面より掘り込まれた長さ約485cm、幅約305cm、深さ約130cmの竈穴内に南を入口に構築されていた。羨道を含む石室の全長は約420cmと推定され、主軸方位はN-3°-Eである。玄室



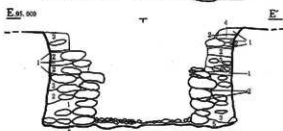
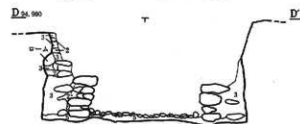
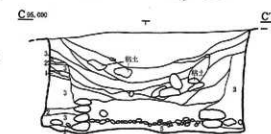
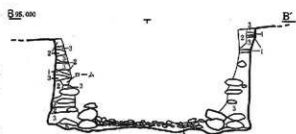
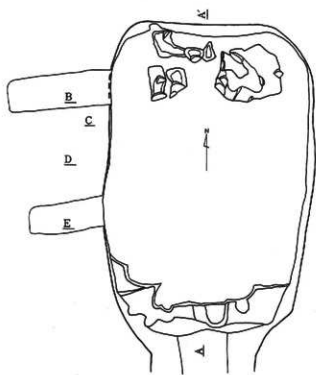
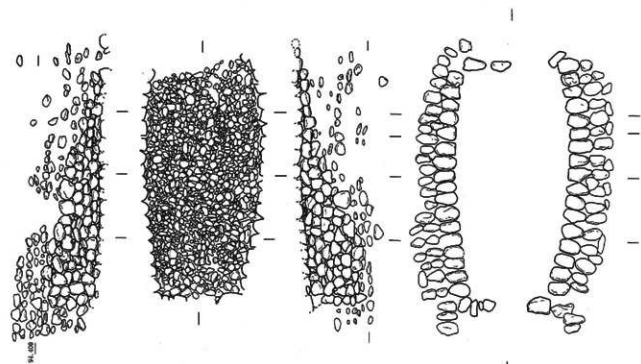
第23図 18号墳墳丘(2), 周濠土層

は長さ約360cm, 幅は奥壁部約150cm, 最大幅約180cm, 玄門付近が推定125cmで胴張型と判断される。

天井石は遺存していなかったが, 玄室埋積 (攪乱) 土中に凝灰岩片が混入しており, また玄室の幅も広いことから天井石に凝灰岩が使用されていた可能性が高い。玄室奥壁は径約15~20cm, 長さ33~35cmで主軸と直交するように設置された川原石が2個遺存するのみで判然としない。側壁は径約13~25cm, 長さ約28~40cmの細長い川原石を小口積みにして構築されており, 高さ15~100cmほどが遺存していた。玄門部も奥壁同様に攪乱を受けており, 雁石も遺存していない状況であった。玄室床面は径約10~15cmの礫が10cm程の厚さで敷き詰められており, そこが埋葬面と考えられる。この敷石下には約10cmの厚みでロームによる整地が施されていた。石室の埋積土は攪乱土であるが, 竈穴と壁材の間には裏込めが遺存していた。裏込めは根石部を主体



第24図 18号墳石室 (1)



0 ————— 2m

第25图 18号墳石室(2)

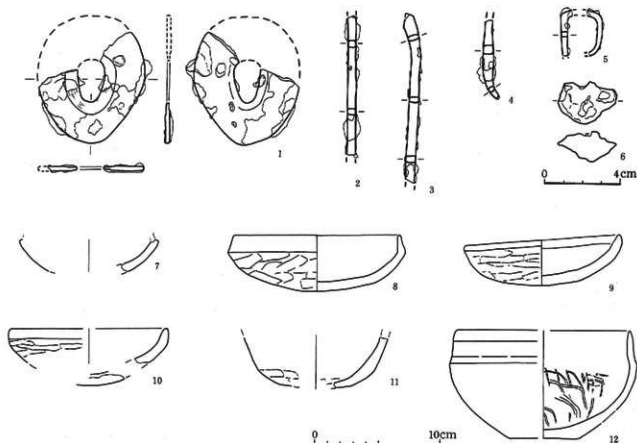
に壁材よりもやや小振りな川原石が用いられ、黒色土混じりのロームで突き固められていた。しかし、土層を観察したところ、西側は10~25cmの厚さで作業していることが明確に確認できたのに対して、東側では土質・色調の変化に乏しく明確にし難いなど、東・西で相違が見られた。

羨道も遺存状態が悪く、竈穴底面に残る僅かな痕跡からの推考であるが、長さ推定50cm、幅推定50cmで羨門の状況は不明である。

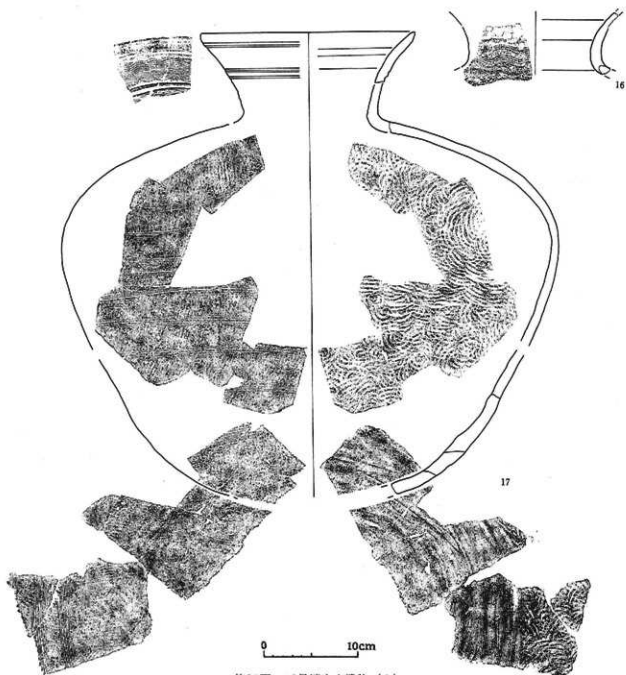
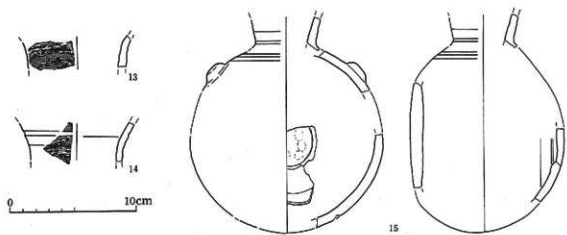
竈穴底面はほぼ平坦に整地されていたが、奥壁付近には長さ約7~14cm、幅約17~30cm、深さ約6~11cmで先端の丸い工具痕が残る窪みが認められた。玄室と羨道に高低差は認められなかった。

羨道の閉塞は石材の抜き取りによってほとんどが攪乱されていたが、範囲は東西長、南北長とも70cm、厚さ80cm程と推定される。埋積土は黒褐色土が僅かに遺存していたが、上位に褐色粘質土が乗っておりそれが墓道へと延びていることから、追葬か旧い盗掘の痕跡と考えられる。

遺物(第26・27図、第6表、図版13~15) 遺物は玄室の敷石直上より須恵器甕の体部片、埋積土の篩掛け及び水洗いで須恵器甕片と鉄製品・鉄滓(1~6)などが出土。また、石室確認面より土師器坏、碗(7~12)、須恵器甕(13・14)、甕(17)、周濠南東部より須恵器提瓶(15)などが出土した。土器は第6表参照。1は錐、倒卵形で3分の1程を欠損する。長径は67mm、幅は中央で57mm程と推定される。茎樞孔は長径2mm、幅は中央で14mm程と推定される。茎樞孔の周囲には柄もしくは鞘の痕跡と思われる木質が認められる。2・3は鐵、2は現存長7.4cm、篋被部分のみ遺存。3は現存長88mm、茎を欠失、鐵身部も欠損する。間は認められず、現存鐵身長は14mmで、形態は不明。4、5は断片で詳細は不明であるが、4は鐵の茎、5は鐵の可能性あり。6は鉄滓の破片と思われる、現存重量9.5g。



第26図 18号墳出土遺物(1)



第27图 18号填出土遗物(2)

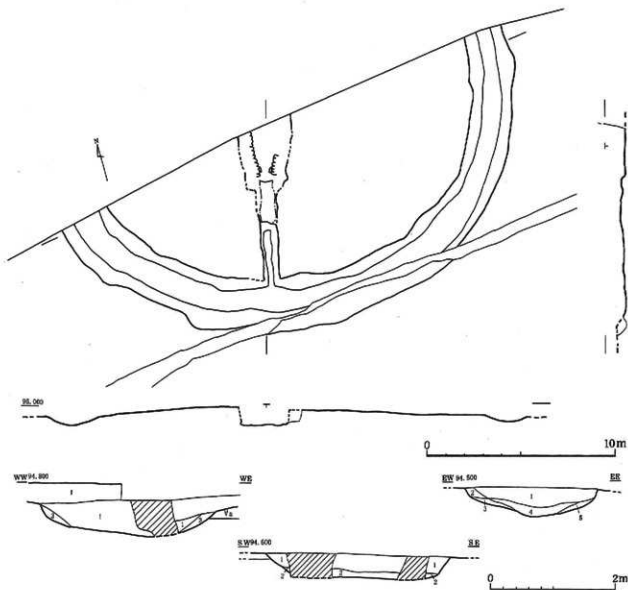
(6)19号墳

現況 調査前は荒地であったが以前は畑地であり、近代の開墾による前平のほかには重機による掘削痕や獣穴等の擾乱が著しく、本墳の存在は予想されなかった。しかし、試掘調査を行ったところ、主体部及び周漕を確認することができた。

位置 調査区北端中央のやや西寄りに位置する円墳で、本墳の南東約6mには18号墳が所在する。南側周漕の一部を近代の溝に切られており、石室の約半分を含む北側の60%ほどが調査区外へと続いている。また、全域がごぼう耕作による擾乱を受けている。

墳丘及び外部施設(第28・29図, 図版8A.~C.) 平面形は円形で、墳丘の中心よりやや西寄りに南に向かって開口する半地下式の横穴式石室が構築されていた。規模は北半分が未調査のために現状からの推測で、周漕内側の立ち上がりでの径が約22m, 周漕を含めると約25mである。墳丘の残存高は現状の最も高いところと周漕底部との比高が約100cmで、封土は全く遺存していなかった。

周漕は現状で幅約220~290cm, 深さ約39~55cmで、北半分は未確認であるが全体を閉鎖しているものと思われる。底面は南側が最も深く、北に向かって徐々に浅くなっていった。壁は弧状に立ち上がり、断面形は皿形



第28図 19号墳墳丘(1), 周漕土層

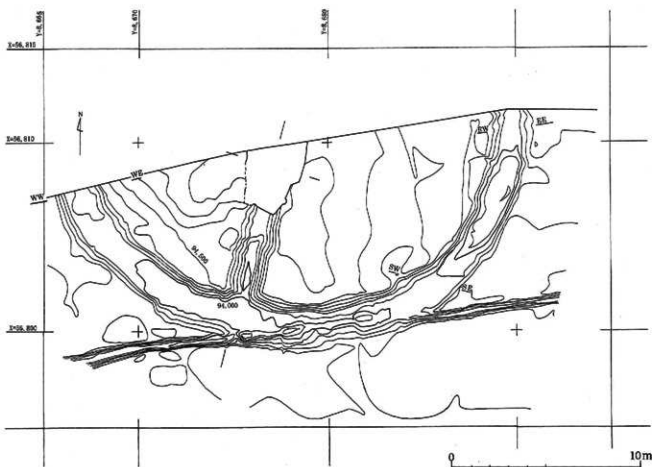
である。埋積土は黒褐色土・にぶい黄褐色土・黄褐色土の3層に大別され、よく締まった自然埋没である。

本墳に葦石の施設や埴輪の樹立は無かったものと考えられる。

墓道は擾乱を受けて上位が変形しているが、下位の形状から長さ約530cm、幅は推定110cmで一定して周溝へと続いたと推考される。底面はほぼ平坦で、高低差も無く周溝底面へと続いてゆく。壁はやや外傾しつつ立ち上がり、断面形は逆台形である。埋積土は黒褐色土と暗黄褐色土で自然埋没と思われる。

埋葬主体部(第30・31図、図版8 D.~H.) 石室は石材の抜き取りに加えて、耕作や獣穴等の擾乱を受けていて遺存状態が悪い。さらに、北側が調査区外の為に南半分のみ調査となり、不明点が多い。残存する側壁と根石の痕跡から、袖無型の横穴式石室と推察される。旧地表面より掘り込まれた、長さが現状で320cm、幅約280cm、深さ約100cmの横穴内に南を入口に構築されていた。羨道を含む現状の石室全長は330cm、主軸方位はN-13°-Eである。現状の玄室の長さは約220cm、幅は最大幅約140cm、玄門付近が約70cmで胴張り型と推定される。

天井石は全く遺存していなかった。玄室奥壁は未調査のために不明。玄室側壁は径約15~25cm、長さ約25~40cmの川原石を小口積みにして構築されていたが、石材の抜き取りが著しく西壁が高さ約80cm、東壁は30cm程が部分的に遺存するのみであった。玄門部もやはり、抜き取りによって石材は遺存していなかった。しかし、玄室から羨道へと続く側壁の根石の幅が墓道の70cm程北で急に狭まり始め、北寄り60cmのところには側壁根石の内側に径約10cm、長さ約25cmの川原石が壁と沿うようにして縦位に設置されており、玄門か或いは羨道の痕跡と考えられる。根石は遺存していなかった。玄室床面は一部重機によるものと思われる擾乱を受けていたものの、径9~15cm程のものを主体とする礫を約7cmの厚さで敷き詰められて埋葬面としている。また、

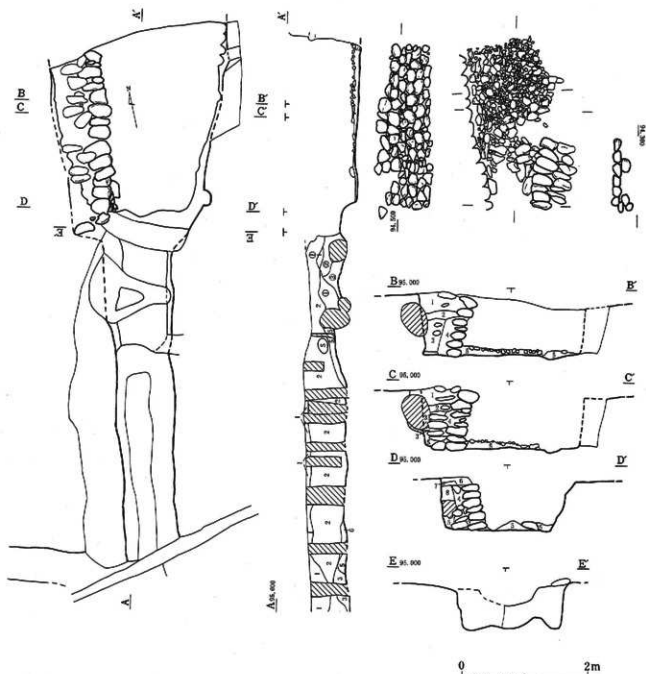


第29図 19号墳丘(2)

敷石下には堅く締まったローム主体の層が見られ、整地層と考えられる。玄室の埋積土は全て攪乱土であるが、墳穴と壁材の間には一部裏込めが遺存していた。裏込めは根石部を主体に壁材よりやや小振りで細長の川原石が用いられ、黒色土混じりのロームで突き固められていた。土層観察により10~20cm程の厚さで作業が進められたと推定される。

羨道は石材の遺存が少なく判然としないものの、東・西壁際に上記の通り縦位に配置された根石を痕跡と仮定すると、長さ約50cm、幅約40cmで、床面には玄室との高低差が無かったものと考えられる。羨門の痕跡は無い。尚、墓道は羨道よりも20cm程高く構築されていた。

墳穴底面はほぼ平坦であるが、玄門部付近の中央には、長さ約2~25cm、幅約7~14cm、深さ約13~18cmで先端の平坦な工具痕の残る、東西長約75cm、南北長約70cm、深さ約18cmの窪みが有り、位置的に根石の痕

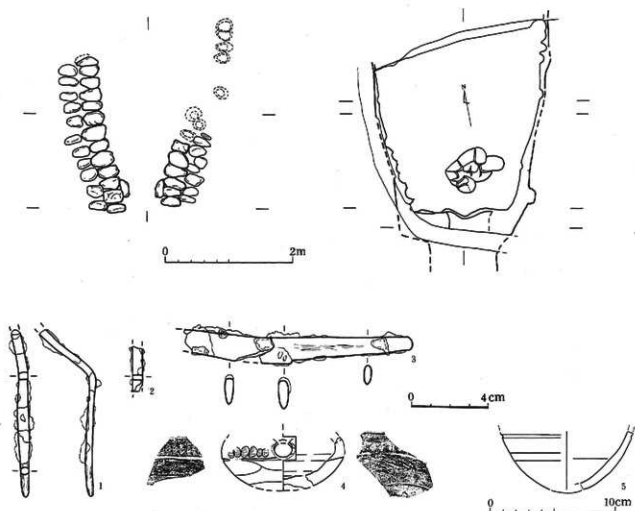


第30図 19号墳石室(1)

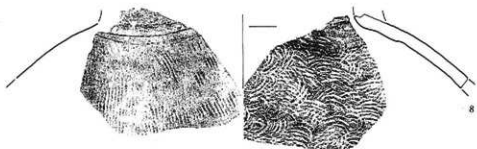
跡と推察される。

閉塞は墓道と羨道に跨って施設されていたと思われるが、獣穴による攪乱が著しく、全容は判然としなかった。遺存する閉塞の範囲は、東西長約73cm、南北長約100cm、厚さ約40cmである。埋積土は黒褐色土・褐灰色土・ローム粒・塊の3層に大別される。

遺物（第31・32図、第7表、図版14・15） 遺物は主体部からは全く出土せず、墓道の埋積土より鉄製品（1～3）、周漁及び墓道より須恵器甕（4）、瓶（5）、甕（6～11）などが出土。土器類は第7表参照。1・2は鉄で、1は鐵身を欠き、現存長50mm、茎と筥被が遺る。茎部には木質の痕跡が認められる。2は断片で、茎もしくは筥被の一部と思われる。3は刀子で、刃部の先端側半分ほどを欠失し、現存長69mm、研き減りが目立つ。関は刃関で、茎には木質の痕跡が見られた。



第31図 19号墳石室（2），出土遺物（1）



0 10cm

第32圖 19号墳出土遺物(2)

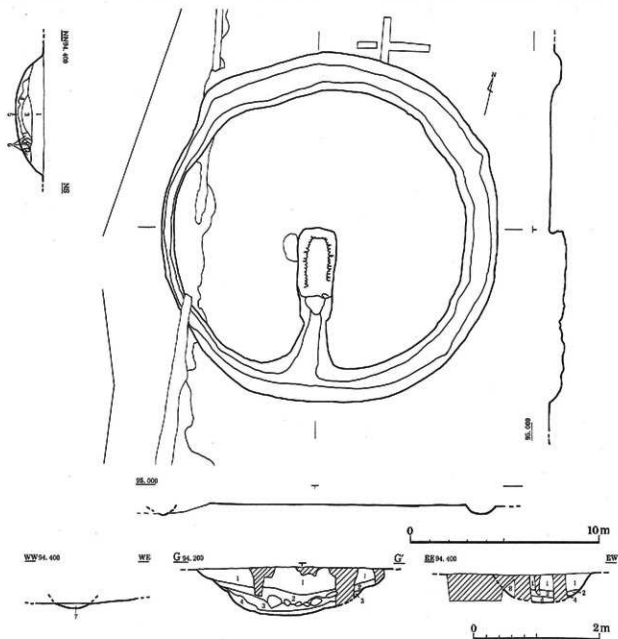
(7)20号墳

現況 調査時は荒地であったが以前は畑地であり、近代の開墾による削平を受けており、本墳の存在は全くわからなかった。また、試掘調査によって周濠の一部が確認されたものの、僅かな範囲の確認であったために溝との見分けが難しく、本調査による表土掘削でようやく古墳との確認に至った。

位置 調査区南西の西端に位置し、本墳の南東約9mには21号墳、北方約16mには16号墳が所在する。ほぼ全域にごぼう耕作による攪乱を受けており、西側周濠は開田によって削平されていて痕跡のみの確認である。

墳丘及び外部施設(第33・34図, 図版9A.~C.) 平面形は円形で、墳丘の中心よりやや南寄りに、南に向かって開口する横穴式石室が構築されていた。墳丘の規模は周濠内側の立ち上がりで径約16m, 周濠を含めると約18mの円墳である。残存高は墳丘の最も高い部分と周濠底面との比高が約80cmで、封土は全く遺存していなかった。

周濠は幅約160~200cm, 深さ約46~67cmで全体を圍繞している。底面は曲線的で凹凸も少ない。東側が最



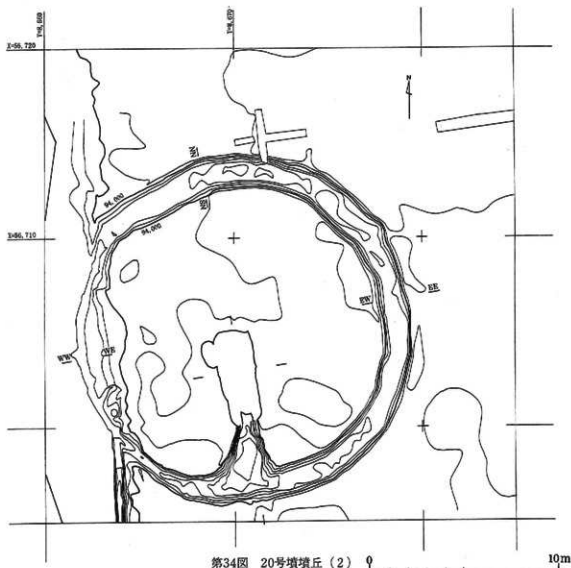
第33図 20号墳墳丘(1), 周濠土層

も浅く南が深くなっているが、高低に一貫性はない。壁は弧状に立ち上がり、断面形は碗形である。埋積土は5層に大別され、黒褐色土・暗褐色土・褐色土・にぶい黄褐色土・黒色土で全体的にローム粒が多く、下層の締まりが弱い自然埋没と思われる。

本墳には、葦石の施設や埴輪の樹立された痕跡は認められなかった。

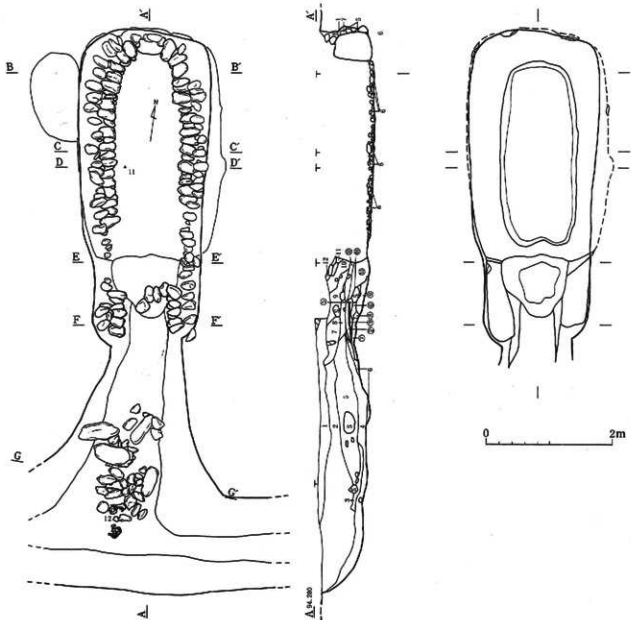
墓道は長さ約190cm、幅約100～230cmで深さは約66～80cm。北側の幅が最も狭く、南に向かって扇状に広がり周濠へと連なっていく。底面はさらに南に向かって徐々に下降し、最深部に至っては左右の周濠底面よりも深く前庭状になっていた。埋積土は黒褐色土・暗褐色土・にぶい黄褐色土・黒色土・灰黄褐色土で自然埋没と思われるが、北端の閉塞部を含めた中層には一度攪乱を受けた痕跡があり、その層上から南側周濠にかけて多量の石材が廃棄されていたことから、古い時期の盗掘の痕跡と推察される。また、南側周濠からは、須恵器のフラスコ形瓶の破片が出土し、前述の石材に混入していた破片と接合した。

埋葬主体部（第35・36図、9D.～H.、10A.～D.） 石室は上位の石材の欠失はあるものの、奥壁鏡石及び羨道側壁までが遺存していた。また、石室内に崩落した多量の壁材に混じって、天井石と思われる径約25～40cm、長さ約45～60cmという大形で細長い川原石が13個ほど、落下を思わせる状態で埋没していた。したがって開鑿により破壊されるまでは、天井石が構築時の状態で遺存していたものと推察される。半地下式で袖無型の横穴式石室である。旧地表面より掘り込まれた長さ約495cm、幅約210cm、深さ約100cmの墳穴内に



南を入口に構築されていた。羨道を含む石室全長は約445cmで、主軸方位はN-8°-Wである。玄室の長さは約310cm、幅は奥壁部で約60cm、最大幅約110cm、玄門付近約70cmの胴張り型である。

玄室奥壁は幅約50cm、高さ約60cm、奥行約45cmの安山岩製の鏡石を中心に据えて、両脇から側壁へと径約13~24cm、長さ約27~49cmの細長い川原石を小口積みにして構築されていた。尚、鏡石の内側は平らな面に加工され、上部部には長軸約33cm、短軸約17cmの平坦面を削り出してあり、上位にもう一個小振りの石を配置する二段構造になっていたものと判断できる。側壁は最高で高さ約75cm、8段の石積みが遺存していた。玄門部は、玄室と羨道の境に東西に1列のみ仕切りと思われる根石とその痕跡が遺存しており、これが樞石か或いはその上に樞石が施設されていたと考えられる。玄室床面は径約4~20cmのものを主体とする規格に均一性の無い礫が18cmほどの厚さで地山の上に乱雑に敷き詰められており、ここを最終埋葬面としている。しかし、敷石層の下位より金銅製の耳環が1点(11)出土しており、追葬の最に敷石が乱れた痕跡と思われる。石室の埋積土は天井崩落後の流入土であるが、塚穴と壁材の間には裏込めが遺存していた。裏込めは、根石部を主体に壁材よりやや小振りの川原石が用いられ、黒色土混じりのロームで突き固められていた。土層を観察



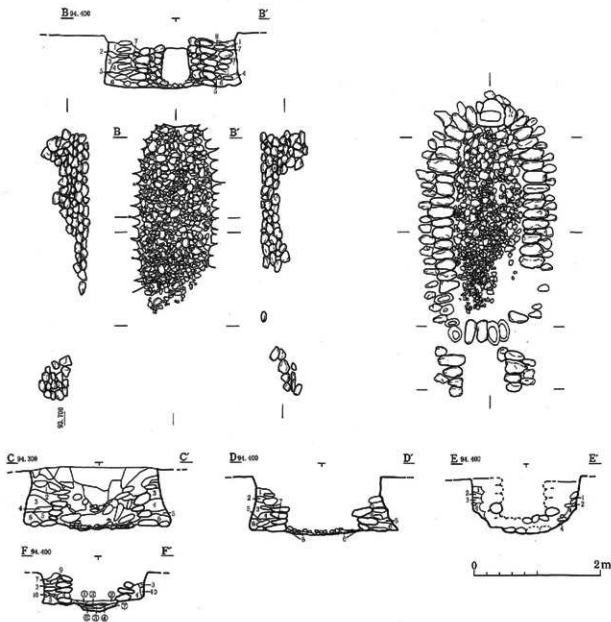
第35図 20号墳石室(1)

したところ、10～25cmの厚さで作業が進められたと判断される。

羨道には玄室の側壁が継続して施設されていたが、底面には配石の痕跡はなかった。規模は長さ約90cm、幅約65cmで側壁には2～5段ほどの石材が遺存しており、残存高は最高で約45cmである。底面はロームで墓道に向かって緩い傾斜で15cm程上がっており、直上には閉塞が施設されていた。尚、羨門は痕跡もなく、存在しなかったものと考えられる。

塚穴底面は、玄室中央に東西長約12cm、南北長約290cmの僅かな窪みを持っており、その範囲に敷石が施設されていた。また、壁際には長さ約2～5cm、幅約10～17cmで、先端の丸い工具痕が僅かに遺存していた。

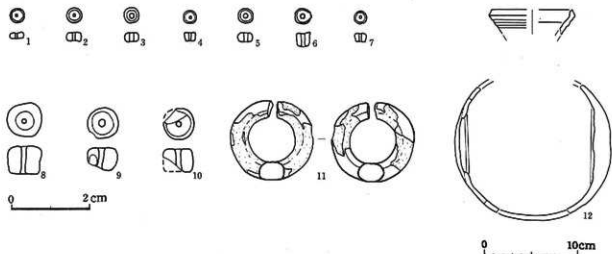
閉塞は墓道の北端より羨道にかけて施設されていた。範囲は東西長約70cm、南北長約160cm、厚さ約30cmである。尚、閉塞の上位には攪乱を受けたと思われる面を挟んで、乱雑ではあるが35cm程の厚さでこれも閉塞かと思える土層が乗っていたが、追葬時の閉塞か盗掘等の攪乱かの判断はし難い。閉塞部の堆積土は下位が黒色土・暗黄褐色土・にぶい黄褐色土・明黄褐色土・明褐色土で堅く締まっていたのに対して、上位は黒褐色土・にぶい黄褐色土・明黄褐色土・褐色土・暗褐色土・黄褐色土・黒色土とのロームの混合土で下位に比べて若干



第36図 20号墳石室(2)

締まりは弱く、壁材か或いは敷石かと思われる川原石が少量混入していた。

遺物(第37図, 第8表, 図版15) 遺物は敷石層中より金銅製耳環(11)1点, 玄室埋積土の篩掛けおよび水洗いで, ガラス小玉23顆(1~7), 土玉3顆(8~10)が出土。また, 南側周濠の埋積土中に廃棄されていた天井石等の石材に混じって, 須恵器のフラスコ形横瓶(12)が出土した。玉類は第9表, 土器類は第8表参照。11は銅地金貼で, 金貼りの剥落が目立つ。外径21×22mm, 芯の径4.5×6.5mm。



第37図 20号墳出土遺物

(4)21号墳

現況 調査時は荒地であったが以前は畑地であり, 近代の開墾による削平やごほう耕作による攪乱を受けており, 本墳の存在は予想されていなかった。また, 調査区の南端であったために試掘調査でも発見には至らず, 本調査による表土除去でようやく存在が確認された。

位置 調査区南端のやや西寄りに位置し, 北側周濠の一部を除いて調査区外へと延びているため, 規模や形状は明確にし難い。本墳の北西約9mに20号墳, 北東約14mには14号墳が所在する。

墳丘及び外傾施設(第38図, 図版10E.~H.) 平面形は現状では円形の北端部と思われるが, 未調査部分が多く, 円墳なのか前方後円墳の後円部なのか定かではない。規模も不明だが周濠北端部のみの現状でも東西長が17mと, 比較的大きな径を持つと推察される。

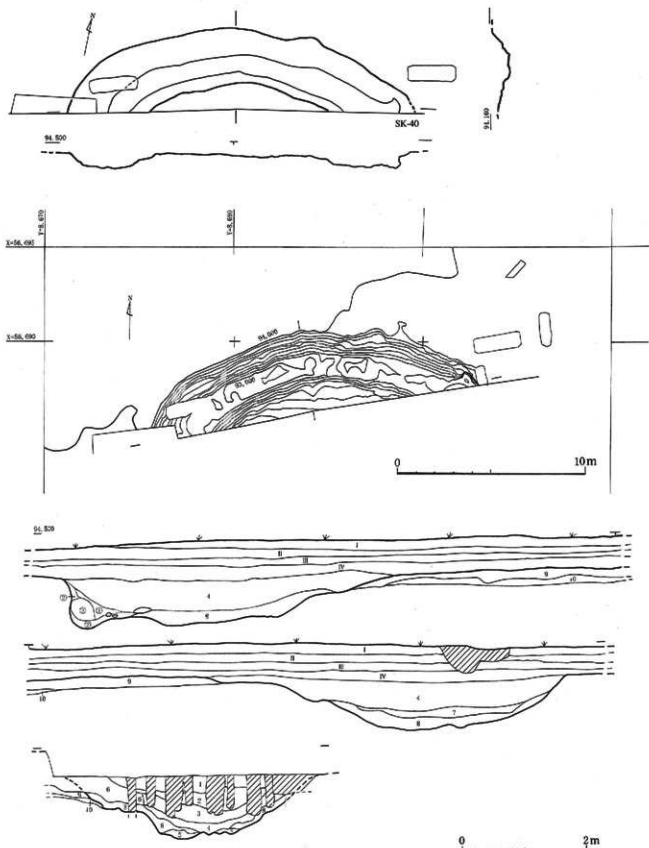
周濠は北側の一部のみ確認であるが, 幅約350~450cm, 深さ約70~100cmと今調査区でもっとも規模が大きい。底面は, 現状では北端が最も深くなっているが, 確認範囲が狭いのでこれも定かではない。壁は弧状に立ち上がり, 断面形は皿形である。埋積土は上層より黒色土・暗褐色土・黄褐色土の3層に大別されよく締まった自然埋没である。尚, 周濠の北東部には, 外壁に沿うようにして挟り込み土坑(SK-40, 64頁)が施設されており, 本墳との関係をもつ土坑墓と考えられる。

本墳に甕石の施設や埴輪の樹立の痕跡は確認されなかったが, 調査範囲が北側周濠部のみである為, 正確な判断は難しい。

埋葬主体部は, 調査区外の為に未調査となっている。

遺物は周濠の埋積土中より土器の細片が出土している。尚, 僅かに凝灰岩細片も出土しており, 主体部に凝灰岩が使用されていた可能性もあるが, 北側の周濠であることから北に所在する15号墳, 北西の20号墳か

ら流入の可能性が高い。SK-40の西側で21号墳の周濠底部からは、径約7~20cm、長さ約9~30cmの川原石が8個出土しており、当初は21号墳の墳丘に施された葺石の崩落かと思われたが、他にこのような川原石の出土が確認できなかったことから、SK-40に付随していたものと推察される。



第38図 21号墳墳丘，周濠土層

古墳土層説明(1)

14号墳遺構

- 1 黒褐色土 (10YR2/2) 締まりあり、ローム状 (径1-3cm) 10%混入。
- 2 暗褐色土 (10YR3/3) 締まりは弱い。ローム状 (径1-3cm) 10%、小石 (径1-2cm) 1%混入。東斜面のみ赤色スクリア0.5%混入。
- 3 黒褐色土 (10YR2/2) 締まりあり。ローム状 (径1-3cm) 5%混入。東斜面のみ赤色スクリア0.5%混入。
- 4 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 締まりは強い。ローム状 (径1-3cm) 20%、ローム塊 (径10-50cm) 10%混入。

14号墳墓道

- 1 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 締まりは弱い。ローム状・塊 (1-20cm) 10%混入。
- 2 黒褐色土 (10YR2/2) 締まりあり。ローム状 (径1-3cm) 20%、ローム塊 (径10-20cm) 5%混入。上部に石瓦用材が散在する。
- 3 黒褐色土 (10YR2/2) 締まりあり。ローム状 (径1-3cm) 15%、ローム塊 (径5-20cm) 5%混入。
- 4 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 締まりは弱い。ローム塊 (径5-10cm) 10%混入。
- 5 にぶい黄褐色土 (10YR5/3) 締まりは強い。ローム状 (径1-3cm) 1%、ローム塊 (径4-10cm) 10%混入。
- 6 ロームブロック主体。黄褐色土 (10YR5/6) 20%混入。
- 7 黒色土 (10YR2/1) 締まりあり。ローム塊 (径10-20cm) 10%混入。
- 8 灰黄色土 (10YR5/2) 締まりあり。
- 9 黄褐色土 (10YR5/6) 締まりは強く、上部に黒く色した部分が付いている。
- 10 暗褐色土 (10YR3/4) 締まりは強い。黒色土 (10YR2/1) と 5 : 3 の混合土。赤色スクリア1%混入。

14号墳副室

- ① にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 締まりは強い。ロームとの混合土。比率は8 : 2。上部に石瓦用材が散在している。
- ② にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 締まりは強い。①と同様だが黒色土 (10YR2/1) 10%混入。
- ③ 黒褐色土 (10YR2/2) 締まりは強い。ローム状 (径1-3cm) 10%、ローム塊 (径4-10cm) 1%混入。
- ④ にぶい黄褐色土 (10YR4/3) ロームとの混合土。比率は3 : 7。締まりは強い。石瓦用材が混入している。
- ⑤ 黄褐色土 (10YR4/3) ④に黒色土 (10YR2/1) が10%混入。

14号墳主体部

- 1 黄褐色土 (10YR5/6) 強く締まっている。黒褐色土 (10YR2/2) 1%、にぶい黄褐色土 (10YR4/4) 1%混入。
- 2 黒褐色土 (10YR2/2) 締まりは強い。にぶい黄褐色土 (10YR4/3) との混合土で比率は2 : 8。ローム状 (径1-3cm) 5%、明黄褐色土 (10YR6/6) 塊 (径4-10cm) 5%混入。
- 3 にぶい黄褐色土 (10YR4/4) 締まりは強い。阿賀のブロックを含む。
- 4 にぶい黄褐色土 (10YR4/4) 締まりあり。ロームブロック (径5-30cm) 30%混入。

15号墳墓道

- 1 暗褐色土 (10YR3/4) 締まりは強い。ローム状 (径1-3cm) 10%、石瓦用材と思われる磁瓦破片が散入している。
- 2 暗褐色土 (10YR3/3) 締まりは強い。ローム状 (径1-3cm) 15%、磁瓦破片が10%混入。
- 3 暗褐色土 (10YR3/3) 締まりは強い。ローム状・小石 (径1-5cm) 20%、磁瓦破片1%混入。
- 4 黒褐色土 (10YR2/2) 締まりは強い。ローム状 (径1-3cm) 15%、ローム塊 (径4-10cm) 10%、磁瓦破片1%混入。
- 5 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 締まりあり。ローム状 (径1-3cm) 10%混入。
- 6 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 締まりは強い。黒褐色土 (10YR2/2) と 5 : 5 の混合土。ローム状 (径1-3cm) 20%、ローム塊・ブロックが混入。
- 7 黄褐色土 (10YR5/6) 締まりは強い。ローム状・細石 (径1-9cm) 1%混入。
- 8 褐色土 (10YR4/4) 締まりあり。ローム状 (径1-3cm) 1%混入。
- 9 褐色土 (10YR4/6) 締まりあり。ローム状 (径1-3cm) 3%、赤色スクリア (径1-3cm) 1%混入。V字 (ローム層部) と傾斜している。

15号墳副室

- 1 黒褐色土 (10YR2/2) 締まりは強い。明黄褐色土 (10YR6/8) 5%混入。
- 2 黄褐色土 (10YR7/6) 締まりは強い。上部に黒く黒褐色土の層がある。
- 3 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 締まりは強い。黒褐色土 (10YR2/2) 状 (径1-3cm) 15%、灰黄色粘質土 (10YR5/2) 状 (径1-3cm) 15%混入。
- 4 黒褐色土 (10YR2/2) とにぶい黄褐色土 (10YR4/3) の混合土。締まりあり。
- 5 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 締まりあり。
- 6 褐色土 (10YR4/4) 締まりあり。黒褐色土 (10YR2/2) 30%、ローム30%との混合土。
- 7 褐色土 (10YR4/6) 締まりは強い。ローム塊 (径20-30cm) 10%混入。
- 8 黄褐色土 (10YR7/6) 締まりは強い。黒褐色土 (10YR2/2) 7%混入。
- 9 黒褐色土 (10YR2/2) 締まりあり。にぶい黄褐色土 (10YR4/3) との混合土。

15号墳主体部

- 1 黒褐色土 (10YR2/2) とにぶい黄褐色土 (10YR4/3) の混合土。比率は4 : 6。締まりは強い。
- 2 黒褐色土 (10YR2/2) 締まりあり。ローム状 (径1-3cm) 混入。
- 3 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 締まりは強い。黒褐色土 (10YR2/2) 5%、ローム状 (径1-3cm) 5%混入。
- 4 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 締まりは強い。黒褐色土 (10YR2/2) 5%、ローム状 (径1-3cm) 10%混入。

- 5 明黄褐色土 (10YR6/6) 締まりは強い。黒褐色土 (10YR2/2) 20%、にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 20%混入。
- 6 にぶい黄褐色土 (10YR5/3) 締まりは強い。黒褐色土 (10YR2/2) 10%混入。
- 7 3cmと同径だが暗く色調が異なる。締まりは強い。
- 8 黄褐色土 (10YR5/6) 締まりは強い。
- 9 灰黄色粘質土 (10YR5/2) 締まりは強い。ロームが薄く散在している。

16号墳遺構及び墓道

- 1 黒褐色土 (10YR2/2) 締まりあり。ローム状 (径1-3cm) の混入は1%ほどだが寄集り20%含まれる。
- 2 暗褐色土 (10YR3/4) 締まりあり。ローム状 (径1-3cm) 30%混入。
- 3 黄褐色土 (10YR5/6) 締まりあり。ローム状 (径1-3cm) 40%混入。
- 4 黒褐色土 (10YR2/1) 締まりあり。ローム状 (径1-3cm) 20%、ローム塊 (径20-30cm) 1%混入。
- 5 灰黄色土 (10YR4/2) 締まりあり。ローム状 (径1-3cm) 40%混入。
- 6 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 締まりあり。ローム状 (径1-3cm) 40%、ローム塊 (径4-50cm) 10%混入。
- 7 黒褐色土 (10YR2/2) 締まりあり。ローム状 (径1-3cm) 40%混入。

16号墳副室

- ① 灰黄色粘質土 (10YR5/2) 締まりあり。ローム状 (径1-3cm) 1%混入。
- ② 灰黄色土 (10YR4/2) 締まりあり。ローム状 (径1-3cm) 1%混入。
- ③ にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 締まりは強い。ローム状 (径1-3cm) 10%混入。
- ④ 黒色土 (10YR2/1) 締まりあり。ローム状 (径1-3cm) 10%混入。
- ⑤ 明黄褐色土 (10YR6/6) 締まりは強い。

16号墳主体部

- 1 灰黄色粘質土 (10YR4/2) と小砂礫9 : 1の混合土。締まりは強い。
- 2 黒色土 (10YR2/1) とローム7 : 3の混合土。締まりは強い。
- 3 灰黄色粘質土 (10YR5/2) 締まりは強い。
- 4 ローム (10YR4/6) 締まりは強い。

17号墳遺構

- 1 黒褐色土 (10YR3/2) 締まりあり。ローム状・塊 (径1-50cm) 5%混入。
- 2 褐色土 (10YR4/4) 締まりあり。ローム状 (径1-3cm) 30%、ローム塊 (径4-30cm) 5%混入。
- 3 にぶい褐色土 (10YR4/3) 締まりあり。ローム状 (径1-3cm) 20%混入。
- 4 褐色土 (10YR4/6) 締まりあり。ローム状 (径1-3cm) 30%、ローム塊 (径10-50cm) 5%混入。
- 5 黒褐色土 (10YR3/2) とローム状・塊 (径1-30cm) 5 : 5の混合土。締まりあり。

17号墳墓道

- 1 黒色土 (10YR2/1) 締まりあり。
- 2 黒色土 (10YR2/1) 強く締まっている。ローム状 (径1-3cm) 10%混入。
- 3 黒色土 (10YR2/1) 締まりは弱い。ローム状 (径1-3cm) 20%、所々にローム塊 (径10-30cm) 混入。
- 4 暗褐色土 (10YR3/2) 締まりは強い。ローム状 (径1-3cm) 40%、ローム塊 (径10-50cm) 5%混入。
- 5 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 締まりは強い。ローム状 (径1-3cm) 30%混入。
- 6 黒褐色土 (10YR3/1) 強く締まっている。ローム状 (径1-3cm) 20%混入。
- 7 黒褐色土 (10YR3/1) 締まりは強い。ローム状 (径1-3cm) 10%、ローム塊 (径10-30cm) 1%混入。
- 8 暗褐色土 (10YR3/3) 締まりあり。ローム状 (径1-3cm) 20%混入。
- 9 ローム状 (径1-3cm) と黒褐色土 (10YR3/1) の6 : 4の混合土。締まりあり。
- 10 暗褐色土 (10YR3/3) 締まりは強い。ローム状 (径1-3cm) 20%混入。
- 11 ローム状 (径1-3cm) と黒褐色土 (10YR3/1) の6 : 4の混合土。締まりは強い。
- 12 ローム状 (径1-3cm) と黒褐色土 (10YR3/1) の7 : 3の混合土。締まりあり。

17号墳主体部

- 1 にぶい黄褐色土 (10YR5/4) 締まりは強い。
- 2 黒褐色土 (10YR2/2) 締まりは強い。ローム状 (径1-3cm) 5%混入。
- 3 灰黄色粘質土 (10YR4/2) と黒褐色土 (10YR2/2) の5 : 5の混合土。締まりは強い。ローム状 (径1-3cm) 1%混入。
- 4 黒褐色土 (10YR2/2) 締まりあり。ローム状 (径1-3cm) 20%混入。
- 5 灰黄色土 (10YR5/2) 締まりあり。ローム状 (径1-3cm) 1%混入。
- 6 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 締まりは強い。ローム状 (径1-3cm) 1%混入。
- 7 ローム (密着層)

17号墳副室

- ① 黄褐色土 (10YR5/6) 締まりは強い。
- ② 灰黄色粘質土 (10YR4/2) 締まりは強い。
- ③ 黄褐色土 (10YR5/6)
- ④ 黒褐色土 (10YR2/2) 締まりは強い。

18号墳遺構

- 1 黒褐色土 (10YR2/3) 締まりは弱い。ローム状 (径1-3cm) 5%混入。
- 2 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 締まりは弱い。ローム状・塊 (径1-20cm) 20%混入。
- 3 黄褐色土 (10YR5/6) 塊に締まっている。ローム状 (径1-3cm) 80%混入。
- 4 黒褐色土 (10YR2/2) とローム状 (径1-3cm) の3 : 5の混合土。締まりあり。

18号墳墓道

- 1 黒褐色土 (10YR2/3) 締まりは強い。ローム状 (径1-3cm) 20%混入。

古墳土層説明(2)

- 黒褐色土 (10YR2/3) 締まりは弱い。ローム殻 (径1~3mm) 30%、黒灰色粘質土 (10YR2/3) 殻 (径1~3mm) 10%混入。
- 黒褐色土 (10YR2/2) とローム殻 (径1~3mm) の5:5の混合土。締まりは弱い。
- 暗褐色土 (10YR3/4) 締まりは弱い。ローム殻 (径1~3mm) 30%、ローム殻 (径30~100mm) 10%混入。
- 黄褐色土 (10YR5/6) 締まりあり。ローム殻 (径1~3mm) 20%混入。
- ローム殻 (径1~3mm) と黒褐色土 (10YR2/2) の6:4の混合土。締まりは弱い。
- 黒褐色土 (10YR2/2) 締まりあり。ローム殻 (径1~3mm) 5%混入。
- 黒褐色土 (10YR2/3) 締まりあり。ローム殻 (径1~3mm) 1%混入。
- 黒褐色土 (10YR2/2) とローム殻 (径1~3mm) の5:5の混合土。締まりあり。
- 黒褐色土 (10YR2/3) とローム殻 (径1~3mm) の5:5の混合土。締まりあり。
- 11と同様だがローム殻 (径50mm) が混入している。

18号墳周濠

- 黄褐色粘質土 (10YR6/1)
- 黒褐色土 (10YR3/1) とローム殻・塊 (径1~30mm) の5:5の混合土。
- ロームの厚弱による経路の直し。

18号墳土体部

- 灰黄色土 (10YR5/2) 締まりは強い。小礫1%混入。
- 黒色土 (10YR2/1) 締まりは強い。ローム殻 (径1~3mm) 5%混入。
- 黒色土 (10YR2/1) とローム殻・塊 (径1~20mm) の5:5の混合土。締まりは強い。
- にぶい黄褐色土 (10YR4/3) の砂質土に小礫 (1~50mm) が多数に混入。
- ローム (地盤別)

19号墳周濠

- 黒褐色土 (10YR3/1) 強く締まっている。ローム殻 (径1~3mm) 5%混入。
- 黒褐色土 (10YR2/3) 強く締まっている。ローム殻 (径1~3mm) 5%混入。
- 黒褐色土 (10YR3/3) とローム殻の5:5の混合土。締まりあり。
- 40%混入。
- 黄褐色土 (10YR5/6) 強く締まっている。ローム殻・塊 (径1~30mm) 30%混入。
- にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 3に類似するがローム殻・塊の混入が少ない。

19号墳土体部

- 黒褐色土 (10YR3/1) 強く締まっている。ローム殻 (径1~3mm) 5%混入。灰状土層1に相当する。(南側埋没部)
- 基底の硬底だが1と同様である。
- 黒褐色土 (10YR3/1) 締まりあり。ローム殻 (径1~3mm) 30%混入。
- 黒褐色土 (10YR3/1) とローム殻の5:5の混合土。締まりあり。
- ローム殻と黒褐色土 (10YR3/1) の6:4の混合土。
- 褐色土 (10YR4/6) 締まりあり。ローム殻 (径1~3mm) 20%混入。
- 黒色土 (10YR2/3) 締まりあり。ローム殻・塊 (径1~30mm) 20%混入。

19号墳周濠

- 黒褐色土 (10YR3/1) とローム殻・塊 (径1~30mm) の6:4の混合土。締まりあり。
- 褐灰色土 (10YR5/6) 締まりあり。ローム殻 (径4~30mm) 厚弱。
- ローム殻・塊 (1~30mm) が主体。黒褐色土 (10YR3/1) 30%混入。

19号墳土体部

- 黄褐色土 (10YR5/6) ローム主体。締まりあり。小礫 (径3~50mm) 5%混入。
- 黄褐色土 (10YR5/6) 1に類似する。小礫 (径3~50mm) 40%混入。
- 明黄褐色土 (10YR6/6) ローム土体で若干黒褐色土 (10YR2/1) が混入する。締まりあり。
- ロームと黒褐色土 (10YR3/1) の5:5の混合土。締まりあり。砂利と小礫 (径3~50mm) が混入する。
- 黄褐色土 (10YR5/6) ロームによる地盤別。締まりは強い。
- 灰黄色土 (10YR4/2) 締まりあり。ローム殻 (径1~3mm) 5%、黒色土 (10YR2/1) 5%混入。
- 灰黄色土 (10YR4/2) 6に類似する。締まりあり。所々にローム殻 (径4~30mm) 混入。
- にぶい黄褐色土 (10YR4/3) ローム殻 (径1~3mm) 10%混入。硬底の表込めとしては締まりが強く、隣接する墓穴の一部とも考えられる。

20号墳周濠

- 黒褐色土 (10YR2/3) 締まりは強い。ローム殻 (径1~3mm) 1%混入。
- 暗褐色土 (10YR3/3) 締まりは強い。ローム殻 (径1~3mm) 5%、赤色スコリア (今赤砂石) 殻 (径2~4mm) 1%混入。
- 暗褐色土 (10YR3/4) 締まりは弱い。ローム殻・塊 (径1~40mm) 7%混入。
- 褐色土 (10YR4/4) 締まりは強い。ローム殻 (径1~3mm) 30%、赤色スコリア (今赤砂石) 殻 (径2~4mm) 1%混入。
- 褐色土 (10YR4/6) 締まりは弱い。ローム殻・塊 (径1~50mm) 25%混入。
- にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 締まりは強い。ローム殻 (径1~3mm) 20%で黒色の混入が見られる。
- にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 締まりあり。ローム殻・塊 (径1~30mm) 3%混入。
- 黒色土 (10YR2/1) 締まりは強い。

20号墳墓室

- にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 締まりあり。ローム殻 (径1~3mm) 7%混入。(南

- 側埋没部)
- 黒褐色土 (10YR3/1) 締まりは強い。ローム殻 (径1~3mm) 3%、赤色スコリア (今赤砂石) 殻 (径2~4mm) 1%混入。(南側埋没部)
- 暗褐色土 (10YR3/3) 締まりは弱い。ローム殻 (径1~3mm) 10%混入。(南側埋没部)
- 黄褐色土 (10YR5/6) 締まりは強い。黒褐色土 (10YR2/1) と5:5の混合土。ローム殻・塊 (径1~50mm) 7%混入。(南側埋没部)
- 黒褐色土 (10YR2/3) 締まりは弱い。ローム殻・塊 (径1~10mm) 25%、灰片石を含む石室用材が混入している。
- 暗褐色土 (10YR3/3) 締まりあり。ローム殻・塊 (径1~10mm) 20%混入。
- にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 締まりは弱い。ローム殻 (径1~3mm) 15%、ローム小塊 (径3~5mm) 10%混入。
- 暗褐色土 (10YR3/4) 締まりは強い。ローム殻 (径1~3mm) 15%ローム小塊 (径3~5mm) 10%混入。
- 黒褐色土 (10YR2/3) 締まりあり。ローム殻 (径1~3mm) 10%。石室用材の川原石が混入している。
- ロームと黒褐色土 (10YR2/3) の5:5の混合土。締まりあり。石室用材の川原石が混入している。
- 黒褐色土 (10YR2/1) 締まりは強い。ローム殻 (径1~3mm) 1%。石室用材が混入している。
- 灰黄色土 (10YR4/2) 締まりは強い。ローム殻 (径1~3mm) 1%。石室用材が混入している。

20号墳周濠

- 黒褐色土 (10YR2/2) と黄褐色土 (10YR5/6) の5:5の混合土。締まりあり。
- 黄褐色土 (10YR5/6) 締まりあり。黒色土 (10YR2/1) 5%混入。
- 黒褐色土 (10YR2/2) 締まりは強い。ローム殻 (径1~3mm) 5%混入。
- にぶい黄褐色粘質土 (10YR5/3) 粘性があり締まりは強い。ローム殻 (径1~3mm) 5%混入。
- 明黄褐色土 (10YR6/6) 締まりあり。
- ④と同様である。
- 明褐色土 (7.5YR5/6) 締まりは強い。黒褐色土 (10YR2/2) 5%混入。
- ④と同様とするが締まりが弱い。
- ④と同様とするが締まりが弱い。
- 褐色土 (10YR4/4) 締まりは強い。ローム殻 (径1~3mm) 30%混入。
- 暗褐色土 (10YR3/4) 締まりあり。ローム殻 (径1~3mm) 3%混入。
- 暗褐色土 (10YR3/4) 締まりあり。ローム殻 (径1~3mm) 20%、ローム殻 (径4~5mm) 5%混入。

20号墳土体部

- 明黄褐色土 (10YR6/6) 締まりは強い。黒褐色土 (10YR2/2) 殻 (径1~3mm) 1%、明褐色土 (7.5YR5/6) 1%混入。
- にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 締まりは強い。明黄褐色土 (10YR6/6) 50%混入。
- 明黄褐色土 (10YR6/6) と暗褐色土 (10YR3/3) の4:6の混合土。締まりは強い。
- 明黄褐色土 (10YR6/6) と暗褐色土 (10YR3/3) の4:6の混合土。締まりは強い。
- 明褐色土 (7.5YR5/6) 締まりは強い。
- 暗褐色土 (10YR2/3) 締まりあり。明黄褐色土 (10YR6/6) ブロック40%混入。
- にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 締まりあり。
- 黒褐色土 (10YR2/2) 締まりあり。ローム殻 (径1~3mm) 3%混入。
- にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 締まりあり。
- 明黄褐色土 (10YR6/6) 締まりあり。

21号墳周濠

- 黒色土 (10YR2/1) 締まりあり。ローム殻 (径1~3mm) 1%混入。
- 黒褐色土 (10YR2/2) 締まりは強い。ローム殻 (径1~3mm) 1%混入。
- 黒褐色土 (10YR2/2) 締まりは強い。ローム殻・塊 (径1~10mm) 5%混入。
- 黒褐色土 (10YR2/2) 締まりは強い。ローム殻・塊 (径1~20mm) 20%、小礫 (径1~2mm) 1%混入。
- ロームと黒褐色土 (10YR2/1) の5:5の混合土。締まりは強い。大粒のロームブロックが多数に混入する。
- 黒褐色土 (10YR2/2) 締まりあり。ローム殻 (径1~3mm) 10%混入。
- 暗褐色土 (10YR3/3) 締まりは強い。ローム殻 (径1~3mm) 20%、赤色スコリア殻 (径1~3mm) 1%、小礫 (径2~4mm) 1%混入。
- 黄褐色土 (10YR5/6) 締まりは強い。ローム殻 (径1~3mm) 30%、ローム殻 (径10~30mm) 10%、黒色土 (10YR2/1) 10%混入。
- 黒褐色土 (10YR2/3) 締まりは強い。ローム殻 (径1~3mm) 3%、小礫 (径2~4mm) 5%混入。
- 暗褐色土 (10YR3/3) 締まりは強い。ローム殻・塊 (径1~10mm) 5%、赤色スコリア殻 (径1~3mm) 1%混入。

第2表 14号墳出土土器観察表

番号	種類・器種	寸法 (mm)	胎土・焼成・色調	整形・器形の特徴	出土位置・備考
11	土師器・坏	口径 器高 (139) (32)	胎土：石英 焼成：良 色調：にぶい黄褐色 (5 YR 6/4)	ロクロ成形，内面磨き，後黒色処理	南西側礎石

第3表 15号墳出土土器観察表

番号	種類・器種	寸法 (mm)	胎土・焼成・色調	整形・器形の特徴	出土位置・備考
10	須恵器・瓶 口辺・頸部片	口径 器高 (88) (96)	胎土：黒色粒 焼成：良好 色調：灰白色 (2.5 Y 7/1)	ロクロ成形，口辺内外面と頸部外面自然釉， 頸部外面暗緑色	石室附礎石
11	灰釉陶器・壺 体部下半，底部片	口径 器高 (90) (54)	胎土：黒色粒 焼成：良好，硬質 色調：にぶい黄褐色 (2.5 Y 6/3)	ロクロ整形，体部下半縦割り，内底面に障 灰	首直部埋積土

第4表 16号墳出土土器観察表

番号	種類・器種	寸法 (mm)	胎土・焼成・色調	整形・器形の特徴	出土位置・備考
2	土師器・甕	口径 器高 (88) (36)	胎土：細砂 焼成：良 色調：橙褐色 (5 YR 6/6)	口辺部ナデ，内面ヘラナデ	南西側礎石断面 (SK-51)
3	土師器・甕	口径 器高 (75) (29)	胎土：石英，雲母，細砂，1～2mm 粒 焼成：良 色調：橙褐色 (7.5 YR 7/6)	口辺部ナデ	高壇 (SK-51)
4	土師器・甕	口径 器高 (103) (44)	胎土：細砂 焼成：良 色調：橙褐色 (5 YR 6/6)	口辺部ナデ	南西側壇 (SK-51)
5	土師器・甕	口径 器高 (98) (31)	胎土：細砂 焼成：良 色調：橙褐色 (5 YR 7/6)	口辺部ナデ	南西側壇上層 (SK-51)
6	土師器・甕	口径 器高 (108) (38)	胎土：石英，砂粒 焼成：良 色調：浅黄褐色 (10 YR 8/4)	口辺部ナデ	西側礎 (SK-51)
7	土師器・甕	口径 器高 (90) (18)	胎土：微砂粒 焼成：良 色調：橙褐色 (5 YR 6/6)	口辺部ナデ	西側礎 (SK-51)
8	土師器・甕	口径 器高 (97) (25)	胎土：細砂 焼成：良 色調：橙褐色 (5 YR 6/6)	口辺部ナデ	南西側壇上層 (SK-51)
9	土師器・坏	口径 器高 (123) (38)	胎土：細砂 焼成：良 色調：にぶい橙褐色 (7.5 YR 7/4)	体部外面に稜を持ち，口辺部は内磨する。	墓道積土
10	土師器・坏	口径 器高 (146) (16)	胎土：砂粒 焼成：良 色調：灰白色 (7.5 YR 8/1)	口辺部ナデ，体部外面ケズリ，内面磨後布	南西側壇上層 (SK-51)
11	土師器・甕	口径 器高 (155) (50)	胎土：細砂 焼成：良 色調：橙褐色 (5 YR 6/6)		西側礎 (SK-51)
12	土師器・甕	口径 器高 (49) (28)	胎土：細砂 焼成：良 色調：橙褐色 (5 YR 6/6)	口辺部ナデ，体部外面ケズリ	南西側礎石断面 (SK-51)
13	土師器・甕	口径 器高 (48) (22)	胎土：細砂，3mm 位の粒 焼成：良 色調：橙褐色 (7.5 YR 7/6)	底部に滑面正痕	南西側礎 (SK-51)
14	土師器・甕	口径 器高 (31) (23)	胎土：細砂 焼成：良 色調：橙褐色 (7.5 YR 6/6)	内面ヘラナデ	南西側礎 (SK-51)
15	土師器・甕	口径 器高 (62) (27)	胎土：石英，雲母 焼成：良 色調：橙褐色 (5 YR 6/6)		南側礎

16	須恵器・壺	口径 器高	(184) (38)	胎土：細砂、1～2mm 漚 焼成：良 色調：灰色 (N 4/0)	ロクロ整形	西周周造 (SK-51)
17	土師器・壺	口径 器高	(216) (66)	胎土：砂粒 焼成：良 色調：橙色 (7.5 YR 7/6)	火熱を受け表面荒れる	西周造 (SK-51)
18	*			胎土：砂粒、1mm 漚 焼成：良 色調：橙色 (5 YR 7/6)	火熱を受け表面荒れる	西周造 (SK-51)
19	*			胎土：細砂、1mm 漚 焼成：良 色調：橙色 (7.5 YR 7/6)	火熱を受け表面荒れる	西周造 (SK-51)

第5表 17号墳出土土器観察表

番号	種類・器種	寸法 (mm)	胎土・焼成・色調	整形・器形の特徴	出土位置・備考	
17	土師器・壺	口径 器高	(88) (96)	胎土：0.2～0.3mm 白色粒 焼成：良 色調：灰色 (7.5 Y 4/1)	外面平行叩き、内面同心円当て具痕	西周造

第6表 18号墳出土土器観察表

番号	種類・器種	寸法 (mm)	胎土・焼成・色調	整形・器形の特徴	出土位置・備考	
7	土師器・坏		胎土：赤色粒、微砂 焼成：良 色調：にぶい褐色 (7.5 YR 5/4)	外面ナデ、内面ナデ黒色処理	主体部確認	
8	土師器・坏	口径 器高	130 44	胎土：石灰、細砂 焼成：良 色調：にぶい褐色 (7.5 YR 5/4)	体部に稜を持ち、口辺部は内傾する。口辺部内外面ナデ、体部外面ヘラ削り、内外面に漆遺存	
9	土師器・坏	口径 器高	123 40	胎土：赤色粒、微砂 焼成：良好 色調：にぶい橙色 (7.5 YR 7/4)	口辺部内外面ナデ、体部外面ヘラ削り、口辺部一部漆遺存	
10	土師器・坏	口径 器高	(122) (45)	胎土：石灰、細砂 焼成：良 色調：橙色 (7.5 YR 7・6)	口辺部はほぼ直立。口辺部内面ナデ、口辺部外面ヘラナデ、体部磨き	
11	土師器・瓶			胎土：細砂 焼成：良 色調：明赤褐色 (5 YR 5/6)	体部外面下端削り、内面ヘラナデ	北周造
12	土師器・坏	口径 器高	(144) (37)	胎土：赤・白色粒、細砂 焼成：良 色調：にぶい黄褐色 (10 YR 6/4)	体部に稜を持ち、口辺部はやや外傾する。	墳丘確認
13	須恵器・甗			胎土：0.2～0.5mm 白色砂 焼成：良 色調：暗灰色 (N 3/0)	口辺部外面磨き、体部外面ケズリ、内面磨き後黒色処理	主体部東側確認
14	須恵器・甗			胎土：0.2mm 白色粒、2～3mm の漚 焼成：良好、硬質 色調：黒色 (N 2/0)	ロクロ整形、外面に波状文	主体部東側確認
15	須恵器・長瓶			胎土：白色砂 焼成：良 色調：にぶい黄褐色 (10 YR 7/2)	ロクロ整形、外面に波状文	
16	須恵器・甗			胎土：3mm 小漚、細砂 焼成：良 色調：オリーブ黒色 (7.5 Y 3/1)	ロクロ整形	西周造
17	須恵器・甗			胎土：白色砂粒 焼成：良好 色調：灰色 (N 4/0)	口辺部波状文、緑灰色の降灰	

第7表 19号墳出土土器観察表

番号	種別・器種	寸法 (mm)	胎土・焼成・色調	整形・器形の特徴	出土位置・備考
4	須恵器・甗		胎土：0.3～1mm 白色粒。細砂 焼成：良好、硬質 色調：暗灰色 (N 3/0)	ロクロ整形	主体部、東側周辺
5	灰胎陶器・甗		胎土：黒色粒 焼成：良好 色調：灰色 (10 Y 4/1)	ロクロ整形	主体部上面
6	須恵器・甗	口径 (500) 器高 [64]	胎土：細砂 焼成：良 色調：暗灰色 (N 3/0)	口辺部波状文、内面に降灰	
7	須恵器・甗		胎土：2～3mm 小礫。細砂 焼成：良好 色調：灰色 (N 4/0)	外面に波状文 輪塗帯の剝離痕	南周辺
8	須恵器・甗		胎土：2～3mm 小礫。細砂 焼成：良 色調：灰色 (N 4/0)	外面平行引き、内面同心円当て具痕 緑灰色の降灰 輪塗帯の剝離痕	南周辺埋土上層
9	須恵器・甗		胎土：0.2～0.3mm、白色粒 焼成：良 色調：	外面平行引き、内面同心円当て具痕、外面降灰	高道埋土上層
10	須恵器・甗		胎土：0.2～0.3mm 白色粒 焼成：良 色調：	外面平行引き、内面同心円当て具痕	主体部上面
11	須恵器・甗		胎土：白色粒 焼成：良、硬質 色調：	外面平行引き、内面同心円当て具痕	主体部上面

第8表 20号墳出土土器観察表

番号	種別・器種	寸法 (mm)	胎土・焼成・色調	整形・器形の特徴	出土位置・備考
12	須恵器・横甗	口径 (86)	胎土：黒色粒微量 焼成：良好 色調：灰白色 (5 Y 7/1)	ロクロ整形、下縁削り 緑灰色の降灰	高道集石

第9表 各古墳出土の玉類計測表

a = 最大径, b = 最小径 (単位mm)

14号墳○は第8図参照						No	種別	a	b	色調	材質	備考	
No	種別	a	b	色調	材質	備考							
①	小玉	3.9	2.7	褐色	ガラス	墳土8-1	72	小玉	3.5	2.8	褐色	ガラス	
②	*	4.1	2.0	*	*	* 8-2	73	*	3.5	3.0	青色	*	
3	*	3.7	2.9	*	*	*	74	*	4.1	2.8	*	*	
4	*	4.1	2.8	*	*	*	75	*	3.9	2.8	褐色	*	
5	*	4.1	2.1	*	*	*	76	*	4.0	1.7	*	*	
6	*	3.7	3.0	*	*	*	77	*	4.2	2.3	*	*	
7	*	4.0	1.8	*	*	*	78	*	3.2	1.9	褐色	*	
8	*	3.9	1.8	*	*	*	79	*	3.9	1.9	青色	*	
③	*	3.5	2.0	*	*	* 8-3	80	*	3.9	2.5	*	*	
10	*	3.5	2.0	褐色	*	*	81	*	3.9	2.6	*	*	
11	*	3.7	2.2	青色	*	*	82	*	3.7	2.8	*	*	
④	*	4.1	2.4	*	*	* 8-4	83	*	4.0	2.2	褐色	*	
13	*	4.1	2.9	褐色	*	*	84	*	3.9	2.4	*	*	
14	*	3.9	2.3	*	*	*	85	*	3.9	2.4	青色	*	
15	*	3.9	3.1	褐色	*	*	86	*	3.5	2.5	褐色	*	
16	*	3.6	2.4	*	*	*	87	*	3.9	2.0	青色	*	
17	*	3.8	2.1	*	*	*	88	*	3.9	2.0	褐色	*	
18	*	3.8	1.9	*	*	*	89	*	4.0	2.7	青色	*	
19	*	3.8	1.9	*	*	*	90	*	3.9	2.4	*	北西床面	
20	*	3.7	1.9	*	*	*	91	*	3.7	2.5	*	*	
21	*	3.9	2.0	青色	*	*	92	*	3.5	2.1	*	*	
22	*	4.0	2.0	褐色	*	*	93	*	3.7	2.4	褐色	竈穴床面	
23	*	3.9	2.0	*	*	*	94	*	3.7	2.2	*	*	
24	*	3.6	2.8	*	*	*	95	*	3.0	1.7	青色	*	
25	*	3.8	2.3	*	*	*	96	*	4.1	2.2	*	* 中央	
26	*	4.0	2.5	*	*	*	97	*	4.2	2.4	褐色	* 中央	
27	*	4.0	2.3	*	*	*	98	*	3.8	2.5	青色	竈床	
⑤	*	3.1	1.9	褐色	*	* 8-5	99	*	3.8	2.5	*	竈穴床面	
29	*	3.7	2.7	褐色	*	*	100	*	1.6	1.6	褐色	*	
30	*	3.8	2.5	*	*	*	101	*	4.1	2.3	*	埴土	
31	*	4.2	2.3	*	*	*	102	*	4.1	2.6	青色	*	
32	*	3.9	1.9	青色	*	*	103	*	3.5	2.8	*	*	
33	*	3.8	2.0	*	*	*	104	*	-	2.8	*	*	
34	*	3.7	2.5	*	*	*	105	*	4.0	2.5	*	*	
⑥	*	3.9	3.0	*	*	* 8-6	106	*	3.9	2.9	褐色	*	
36	*	3.9	1.9	褐色	*	*	107	*	4.0	2.3	青色	*	
37	*	3.5	2.1	*	*	*	⑦	丸玉	8.7	6.3	暗褐色	土製	* 8-9
⑧	*	4.0	1.8	*	*	* 8-7	⑧		9.2	7.9	*	*	* 8-10
15号墳○は第11図参照						No	種別	a	b	色調	材質	備考	
39	*	4.0	1.9	*	*	*	①	小玉	3.6	2.1	青色	ガラス	埴土11-1
40	*	4.1	2.1	*	*	*	2	*	3.8	2.1	*	*	*
41	*	3.8	2.6	*	*	*	3	*	3.8	2.7	褐色	*	*
42	*	4.2	2.5	褐色	*	*	4	*	4.2	2.3	青色	*	*
43	*	3.8	2.4	褐色	*	*	②	*	3.7	2.6	*	*	* 11-2
44	*	3.8	1.8	*	*	*	6	*	3.4	1.6	褐色	*	*
45	*	4.0	2.0	*	*	*	7	*	3.7	2.5	褐色	*	*
46	*	4.2	2.5	青色	*	*	③	*	4.1	2.0	褐色	*	* 11-3
47	*	3.7	1.8	*	*	*	9	*	3.9	2.0	青色	*	*
48	*	3.6	2.5	褐色	*	*	10	*	3.9	1.9	*	*	*
49	*	4.1	2.5	褐色	*	*	④	*	3.8	2.8	*	*	* 11-4
50	*	3.9	2.7	青色	*	*	12	*	3.7	1.8	*	*	*
51	*	4.2	2.5	褐色	*	*	13	*	3.8	2.1	褐色	*	*
52	*	3.7	2.4	青色	*	*	14	*	3.4	2.0	青色	*	*
53	*	4.0	1.9	*	*	*	15	*	3.5	1.8	*	*	*
54	*	4.0	2.0	*	*	*	16	*	3.8	2.3	*	*	*
55	*	4.0	2.0	*	*	*	17	*	3.9	2.0	*	*	*
56	*	3.6	2.1	褐色	*	*	18	*	3.9	2.0	*	*	*
57	*	4.0	2.3	青色	*	*	19	*	3.6	1.7	*	*	*
58	*	3.8	2.4	褐色	*	*	⑤	*	3.4	1.8	*	*	* 11-5
59	*	3.5	2.5	青色	*	*	21	*	3.7	2.1	*	*	*
60	*	4.0	2.5	*	*	*	22	*	3.2	2.0	褐色	*	*
61	*	3.6	2.3	*	*	*	23	*	3.8	1.8	青色	*	*
62	*	3.7	2.2	*	*	*	24	*	3.9	2.5	褐色	*	*
63	*	4.1	2.1	*	*	*	25	*	3.5	1.9	青色	*	*
64	*	4.0	2.1	*	*	*	26	*	3.4	1.8	褐色	*	*
65	*	3.8	1.6	*	*	*	27	*	3.3	1.8	*	*	*
66	*	4.0	2.8	*	*	*	28	*	3.8	2.6	青色	*	*
⑧	*	3.0	1.9	褐色	*	* 8-8	29	*	3.4	1.7	褐色	*	*
68	*	3.7	2.3	褐色	*	*	30	*	3.5	1.8	*	*	*
69	*	4.1	2.8	青色	*	*	31	*	3.6	1.7	*	*	*
70	*	4.1	2.0	褐色	*	*	32	*	3.3	2.0	青色	*	*
71	*	3.7	2.8	青色	*	*							

a = 最大径, b = 最大厚 (単位mm)

No	種別	a	b	色調	材質	備考	No	種別	a	b	色調	材質	備考
33	小玉	4.1	2.9	青色	ガラス	粗土	2	丸玉	10.3	7.2	白色	ガラス	* しろい
34	*	3.6	2.3	淡青色	*	*	①	*	9.4	5.9	淡緑色	磁磁管	* 21-8
35	*	4.0	2.6	青色	*	*	4	*	7.4	3.0	碧白色	ガラス	* しろい
36	*	3.9	2.4	*	*	*	5	小玉	3.4	2.2	淡青色	*	粗土
37	*	3.8	1.8	淡青色	*	*	6	*	3.7	2.1	褐色	*	*
38	*	3.3	2.0	*	*	*	7	*	3.4	1.9	淡青色	*	*
39	*	3.5	2.9	青色	*	*	8	*	3.4	1.9	*	*	*
40	*	3.9	2.0	*	*	*	9	*	3.4	1.8	*	*	*
41	*	3.5	1.8	淡青色	*	*	10	*	3.3	2.0	*	*	*
42	*	3.3	1.8	淡青色	*	*	11	*	3.3	2.1	*	*	*
43	*	3.7	1.9	青色	*	*	②	*	3.6	1.8	褐色	*	* 21-1
44	*	3.5	1.9	淡青色	*	*	13	*	3.4	2.0	淡青色	*	*
45	*	3.5	1.8	*	*	*	14	*	3.4	2.6	青色	*	*
46	*	4.2	2.7	紺色	*	*	15	*	3.5	3.3	*	*	*
47	*	3.8	2.3	淡青色	*	*	③	*	3.8	2.3	紺色	*	粗土 21-2
48	*	3.9	2.0	*	*	*	17	*	3.9	2.5	青色	*	*
49	*	3.9	1.9	*	*	*	18	*	3.9	2.2	*	*	*
50	*	3.9	1.9	*	*	*	19	*	4.0	2.3	淡青色	*	*
51	*	3.8	2.1	*	*	*	④	*	4.3	2.9	紺色	*	* 21-3
52	*	3.5	1.8	*	*	*	21	*	4.1	3.1	淡青色	*	*
53	*	3.8	1.7	*	*	*	22	*	4.3	2.3	紺色	*	*
54	*	3.5	1.8	*	*	*	⑤	*	4.5	2.8	*	*	* 21-4
55	*	3.9	2.0	*	*	*	24	*	3.3	2.0	淡青色	*	*
56	*	3.6	1.9	*	*	*	⑥	*	3.9	2.6	紺色	*	* 21-5
57	*	3.8	2.2	*	*	*	26	*	4.0	2.5	青色	*	*
⑦	*	4.6	2.2	*	*	* 11-6	27	*	3.8	2.4	*	*	*
59	*	3.6	2.0	*	*	*	⑧	*	5.4	3.3	淡青色	*	* 21-6
60	*	3.5	1.8	青色	*	*	29	*	3.9	2.2	青色	*	*
61	*	3.8	2.1	紺色	*	*	⑨	*	3.8	2.2	濃水色	*	* 21-7
62	*	3.4	2.4	青色	*	*	31	*	2.7	淡緑色	*	*	*
63	*	3.4	1.8	*	*	*	32	*	2.8	青色	*	*	*
64	*	3.5	1.8	淡青色	*	*	20分組○は第37種参照						
65	*	3.4	1.9	青色	*	*	No	種別	a	b	色調	材質	備考
66	*	3.5	1.9	淡青色	*	*	①	丸玉	8.7	7.3	研褐色	土質	粗土
67	*	3.4	1.9	青色	*	*	②	*	7.9	6.1	肌褐色	*	* 37-8
⑧	*	3.5	3.1	*	*	* 11-7	③	*	7.9	6.1	研褐色	*	* 37-9
69	*	3.2	1.8	*	*	*	4	小玉	3.7	2.1	紺色	ガラス	* 37-10
70	*	3.4	1.9	淡青色	*	*	5	*	3.9	1.9	淡青色	*	*
71	*	3.4	1.7	*	*	*	④	*	3.8	1.6	青色	*	* 37-1
72	*	4.0	2.3	青色	*	*	⑤	*	4.1	2.7	*	*	* 37-2
73	*	3.2	1.6	淡青色	*	*	8	*	3.9	2.1	青色	*	*
74	*	4.0	2.4	紺色	*	* 中央	9	*	4.0	2.2	*	*	*
75	*	3.9	2.1	青色	*	* 北灰	10	*	3.9	2.4	淡青色	*	*
76	*	3.5	2.0	*	*	*	⑥	*	4.1	2.4	青色	*	* 37-3
77	*	3.7	1.6	淡青色	*	*	12	*	3.7	2.5	*	*	*
78	*	3.4	1.7	*	*	* 中央	13	*	3.9	2.1	*	*	*
79	*	4.0	2.8	紺色	*	*	14	*	3.8	2.6	*	*	*
80	*	3.7	2.6	濃青色	*	*	⑦	*	3.3	2.2	*	*	* 37-4
81	*	3.5	1.7	淡青色	*	* 北灰	16	*	3.7	2.0	*	*	*
82	*	3.4	1.7	*	*	* 中央南寄	17	*	3.7	2.2	*	*	*
83	*	3.9	2.6	青色	*	*	⑧	*	4.1	2.2	*	*	* 37-5
84	*	3.3	1.8	*	*	*	⑨	*	3.8	3.6	*	*	* 37-6
85	*	*	*	*	*	*	20	*	4.1	2.1	*	*	*
16分組○は第16種参照													
No	種別	a	b	色調	材質	備考	21	*	3.5	2.5	*	*	*
①	小玉	3.7	2.1	青色	ガラス	古室床16-1	22	*	3.8	2.6	*	*	*
17分組○は第21種参照													
No	種別	a	b	色調	材質	備考	23	*	3.9	2.1	*	*	*
1	濃玉	*	*	褐色	琥珀	石室床面, 自然崩壊	⑩	*	3.2	2.3	紺色	*	* 37-7
							25	*	3.5	2.3	*	*	*
							26	*	3.9	2.2	淡青色	*	*

17分組留子玉○は第21種参照									
No	計測値 (mm)							備考	
	a1	a2	b1	b2	c	d1	d2		
①	24.0	24.5	7.5	7.0	15.5	4.0	2.0	石室床面, 一方向穿孔穴中心調整	
②	20.0	19.5	9.0	7.5	14.0	4.0	2.0	*	*
③	24.2	24.0	7.5	7.5	15.0	3.4	2.0	*	*
④	20.5	20.5	9.5	9.0	15.5	3.8	2.0	*	*
⑤	22.0	23.2	9.0	11.0	18.1	4.2	2.0	*	* 面取り無し

(4) 古代の土坑

今次調査では古墳の周濠及びその周辺より計9基の土坑を確認した。16号墳の周濠内のSK-51を除き、いずれも平面が楕円形もしくは隅丸の長方形で、長辺側に挟り込みが設けられた、所謂挟り込み土坑である。分布状況は、14号墳の北東に1基、16号墳の周濠南西に1基、17号墳の周濠西に1基、17号墳と18号墳の間に3基、18号墳の周濠東に接して1基、19号墳の西方に1基、21号墳の周濠北東に1基である。

SK-51号を除き、遺物の出土はなく時期を明確にし難いが、周濠の埋没途中に掘り込まれたものがあり、埴積土の類似から古墳時代終末期より古代(奈良・平安時代)にかけての所産と推定される。

SK-1 (第39図, 図版11A.)

調査区北東部, 18号墳の南西約8m, 17号墳の北東約11mに位置する。本跡の西方約6mにSK-6, 南西約15mにはSK-7が所在する。

遺構 確認面はローム漸移層(Ⅲ層)である。開口部は平面形がN-4°-Eを長軸とする長方形で規模は150×75cm, 深さ57cm。底面はローム層中にあり, 南北の中軸線に向かって緩やかに下っている。壁はやや外傾しつつ立ち上がっているが, 西壁には長さ117cm, 奥行14cm, 高さ11cmの横穴が竪坑底面よりも一段低く掘り込まれている。西側に横穴を持つ古代の挟り込み土坑である。

埴積土は2層に大別され, 竪坑が上層より暗褐色土・黄褐色土で, 締まりは強い。

遺物は出土しなかった

SK-2 (第39図, 図版11B.)

調査区北東部, 18号墳東側の周濠外壁に隣接する。本跡の南西約24mにはSK-1が所在する。

遺構 確認面は暗褐色土層(Ⅱ層)である。開口部は平面形がN-7°-Wを長軸とする不整長方形であるが, 東壁面の変形は張り出し天井の崩落によると思われる。規模は206×95cm, 深さ116cmである。底面はローム層中にあり, 多少の凹凸はあるもののほぼ平坦。壁は垂直に近く, 上位でやや外傾している。東壁には長さ200cm, 奥行67cm, 高さ33cmの横穴が竪坑底面より緩く下る状態で掘り込まれている。東側に横穴を持つ古代の挟り込み土坑である。

埴積土は5層に大別され, 竪坑が上層より黒褐色土・暗褐色土・明黄褐色土・褐色土で締まりも強いが, 横穴内には黄褐色土が詰まっています埋葬部の閉塞であると思われる。また, 下層には張り出し天井の崩落で, 大きめのブロックが埋没していた。

遺物は出土しなかった。

SK-5 (第39図, 図版11C・D.)

調査区北西部, 19号墳の南西約11mに位置する。本跡の南東約54mにSK-20があり, 挟り込み土坑ではこれが最も近い。

遺構 確認面はローム漸移層(Ⅲ層)である。開口部は平面形がN-9°-Wを長軸とする長方形で, 今次調査区の挟り込み土坑としては最も大型である。規模は250×146cm, 深さ98cm。底面はローム層中で, 北から南に向かって緩やかに下降する。壁は垂直で上位は緩く外傾している。西壁には長さ231cm, 奥行35cm, 高さ20cmの横穴が竪坑底面よりも僅かに低く掘り込まれている。西側に横穴を持つ古代の挟り込み土坑である。

埴積土は3層に大別でき, 竪坑が黒褐色土, 張り出し部直下は黒褐色土とロームの混合土で両層ともに締まりが強いが, 横穴内には黒褐色土とロームの混合土が詰まっております埋葬部の閉塞と考えられる。また, 最下層には約10cmの厚さで少量の黒褐色土が混じるソフトロームが堆積しており, 本跡構築時の整地層と考えられる。

遺物は出土しなかった。

SK-6 (第39図, 図版11E・F.)

調査区北東部, 17号墳と18号墳のほぼ中間に位置する。本跡の東方約6mにSK-1, 南東約3mにはSK-7がある。

遺構 確認面はローム漸移層(Ⅲ層)。開口部は平面形がN-12°-Wを長軸とする不整楕円形で, 規模は212×110cm, 深さ108cmである。底面はローム層中にあり平面は楕円形で, 中央に向かってやや低くなっている。壁はやや外傾し立ち上がるが, 南と北の両小口部分では下位の傾斜が緩やかなことから, 開口部に比べて著しく長軸が短くなっている。西壁には長さ200cm, 奥行54cm, 高さ35cmの横穴が堅坑底面と水平に掘られている。西側に横穴を持つ古代の挟り込み土坑である。

埋積土は6層で構成されているが4層に大別でき, 上層より暗褐色土・褐色土・黒褐色土・黄褐色土で締まりがある。また, 埋葬部閉塞の痕跡は確認できなかった。

遺物の出土はなかった。

SK-7 (第39図, 図版11G・H.)

調査区北東部で, 17号墳より北東約4mに位置する。本跡の北西約3mにSK-6, 北東約5mにはSK-1がある。

遺構 確認面はローム漸移層(Ⅲ層)。開口部は平面形がN-1°-Wを長軸とする長方形で, 規模は165×116cm, 深さ60cmである。底面はローム層中でほぼ平坦。壁は外傾しつつ立ち上がっているが, 東壁には長さ110cm, 奥行23cm, 高さ25cmの横穴が堅坑底面より一段低く掘り込まれている。東側に横穴を持つ古代の挟り込み土坑である。

埋積土は3層に大別され, 堅坑が暗褐色土で締まりが強いが, 横穴内には暗茶褐色土が詰まっており, 埋葬部の閉塞と考えられる。

遺物は出土しなかった。

SK-20 (第39図, 図版12A・B.)

調査区ほぼ中央に位置し, 17号墳西側の周濠外壁と重複する。本跡の北東約26mにSK-6, 南東約18mにはSK-39が所在する。

遺構 確認面はローム漸移層(Ⅲ層)。開口部は平面形がN-41°-Wを長軸とする楕円形で, 規模は105×77cm, 深さ50cmである。底面はローム層中で緩やかに南下する。壁はやや外傾しつつ立ち上がるが, 南西に長さ77cm, 奥行45cm, 高さ25cmの横穴が堅坑底面よりも一段低く掘り込まれている。南西に横穴を持つ古代の挟り込み土坑で, 17号墳と何らかの関連を持つと推察される。

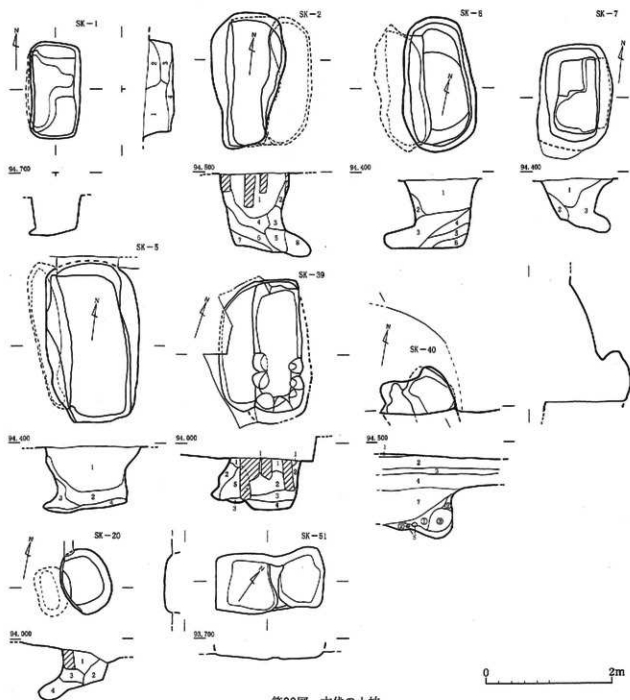
埋積土は3層に大別でき, 堅坑が上層より黒褐色土・暗褐色土で締まりも強いが, 横穴内には暗褐色土が詰まっており埋葬部の閉塞と考えられる。

遺物の出土はない。

SK-39 (第39図, 図版12C・D.)

調査区南東部の東端で, 14号墳の北東約12mに位置する。本跡の北東約37mにSK-46, 南西約45mにはSK-40が所在する。

遺構 確認面は暗褐色土層(Ⅱ層)。開口部は平面形がN-17°-Eを長軸とする長方形で, 現状の規模は225×143cmであるが, 横穴部の天井がほぼ全壊している状態であり, 遺存部分より本来の短軸は77~80cmと推定される。深さ80cmで, 底面はローム層中にあり, 南に向かって緩やかに下降し南側には掘削時の工具痕が多数確認できた。壁はほぼ垂直に掘り込まれているが, 西壁には長さ206cm, 奥行推定50cm, 高さ約20cmの



第39図 古代の土坑

横穴が堅坑底面より一段高く掘り込まれている。西側に横穴を持つ古代の挟り込み土坑である。

埋積土は3層の黒褐色土で構成されている。締まりの良い自然埋没で横穴内にも堆積していたと考えられるが、崩落した張り出し部の埋没により判然としない。最下層はSK-5と同様に堅く締まったソフトロームの単一層で、構築時の整地層と考察される。

遺物は出土しなかった。

SK-40 (第39図, 図版12D・E.)

調査区南端部の中央で、21号墳周濠北東部の外壁と重複し、南側の約2分の1が調査区外に延びる。本跡

の北東約45mにSK-39が所在する。

遺構 確認面は21号墳の周濠外壁で、ローム漸移層(Ⅲ層)である。開口部は平面形がN-40°-Wを長軸とする隅丸方形か或いは楕円形と推察される。規模は長軸が現状で75cm、短軸65cm、深さは周濠確認面から75cmである。底面はローム層中にあり、現状の中央を最深部とする碗形状を示す。壁は東側と北側で挟り込みによる奥行12cmほどの内傾を示し、西側は緩い傾斜のまま21号墳周濠の底面へと続いてゆく。墳丘と反対方向への横穴を持つ挟り込み土坑と思われるが、張り出し部の遺存状態が悪く南半分も未調査のため、正確な形状は不明である。径7~8cmの川原石が少量、埋積土内より出土している。また、本跡西側の周濠底面付近にも人頭大ほどの川原石7点が散在しており、21号墳の周濠では他には全く認められなかったことから本跡に伴うものと判断される。

埋積土は2層で構成されており、上層より暗褐色土・褐色土である。

遺物は出土しなかった。

SK-51(第39図, 図版12F.)

16号墳の南西周濠内に確認した。周濠調査時には土師器破片が纏まって出土したが、本跡の存在は掘り下げのまで確認できなかった。

遺構 平面は長軸170cm、短軸95cmの長方形で、長軸方位はN-52°-Wで、周濠の方向性とはほぼ合致する。周濠底面からの深さは東側で約20cmである。周濠の埋没途中に掘り込まれた埋葬施設と推察される。

出土遺物は調査着手時に出土した土師器杯、碗、甕(第16図)などがある。

(10) その他の遺構・遺物

a 縄文時代

該期の遺構は土坑2基(SK-17・52)のみであり、遺物は古墳の周濠や近代の土坑より少量の土器片、石器類が出土した。

SK-17(第40図, 図版12G・H.)

調査区中央やや北寄りの東端に位置する。本跡の北西約14mにSK-1があり、西方約20mには17号墳が存在する。

遺構 確認面はローム漸移層(Ⅲ層)。開口部は平面形が径約130cmの円形である。底面はローム層中にあり、径約95cmの円形でほぼ平坦。壁は現存高6.5cmで、僅かに外傾して立ち上がっている。

埋積土は3層に大別され、上層より黒褐色土・黄褐色土・暗褐色土で、全層とも他の土坑とは異なり非常に堅く締まっており、遺物の出土はないが縄文時代の遺構と推察される。

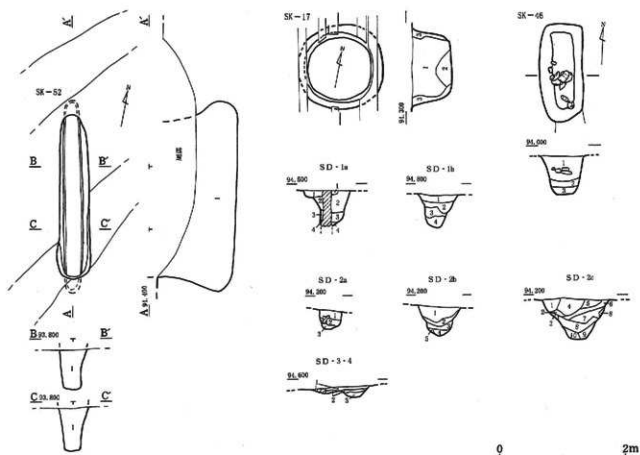
SK-52(第40図)

調査区中央やや東寄りに位置し、17号墳の北西周濠と重複している。東方約38mに前記のSK-17がある。

遺構 確認面はローム漸移層(Ⅲ層)。開口部は平面が南北に長い長楕円形で、17号の周濠に切られているが、現状の規模は約260×45cm。深さ125cmで、底面はローム層中にあり、幅25cmと細く、南北両端が21~35cm程挟り込まれており長さは275cmであった。壁は、東・西の下位は垂直に近く、上部は外傾していたと推定される。

埋積土は今市軽石を含む暗褐色土で、全体に非常に堅く締まっていた。

遺物の出土は無いが、埋積土及び形状から縄文時代の所謂「Tピット」と判断される。



第40図 その他の遺構

b 近代

散期の遺構としては80基以上の土坑と溝跡などがある。土坑は総数82基で、その分布状況を見ると、調査区中央では17号墳周辺、北東部の18号墳周辺、調査区西端の溝（SD-2）沿い、調査区南端部沿いに見られた。18号墳周辺のものには東西方向の規則的な配置が感じられるが、他はいずれもかつての農道や地境溝沿いに設けられていた感を受ける。平面形は、長軸が110~250cm、短軸が45~100cmの長方形が80基を占め、例外として楕円形と正方形のものが各1基認められた。また、長軸方位は東西が67基、南北が13基と東西が圧倒的に多く、南北のものは調査区西端のSD-2沿いと調査区南端沿いに集中する。深さは約20~125cmと均一性にかけるが、18号墳周辺のものはいずれも1mを越える傾向が見られた。壁は直立するものとやや内傾するものがあり、底面はほぼ平坦だが一部凹凸の認められるものもあった。これらの土坑の中には重複するものもあり、長期間に渡る土地の利用を示している。埋積土は、大部分が黒色土に多量のローム粒・塊が混入する人為的埋設であり締まりも弱い。尚、調査区西側のSD-2と重複する一群のみは最下層に締まりの強い黒色土層が認められたが、SD-2との重複によるものと判断される。

遺物はほとんど出土せず、稀に埋積土に混入した状態で土器片が出土したものの図示し得るものは無い。尚、SK-43（第40図）からは埋積土の中心より多数の礫とともに独鈞石（第41図-4）が出土した。耕作の障害物として不要となった穴に廃棄されたと推察される。

以上、これらの土坑は、農作物の貯蔵等の施設と判断される。尚、18号墳周辺の一群については、深さ1.2~1.4mを非常に深く配置が他と異なることなどから、戦時中の物資の保管場所との推論も出たが、物証や近隣住民等の証言は得られなかった。溝は現在の耕作地の区画と合致しないものもあるが、いずれも地境溝と考えられる。

古代の土坑土層説明

SK-1

- 1 褐色土 (10YR3/3) 締まり有り、ローム殻 (径1~3mm) 10%混入。
- 2 黄褐色土 (10YR5/6) 締まり有り、ローム殻・塊 (径1~20mm) 40%混入。
- 3 暗褐色土 (10YR3/4) 締まり有り、ローム殻・塊 (径1~20mm) 30%混入。
- 4 黄褐色土 (10YR5/6) 締まり有り、ローム殻・塊 (径1~20mm) 60%混入。

SK-2

- 1 黒褐色土 (10YR2/2) 締まりは強い、ローム殻 (径1~3mm) 10%混入。
- 2 暗褐色土 (10YR3/4) 締まり有り、ローム殻 (径1~3mm) 30%混入。
- 3 ローム殻・塊 (径1~20mm) と黒褐色土 (10YR2/2) の混合土。比率は5:5。締まり有り。
- 4 黒褐色土 (10YR2/2) ローム殻 (径1~3mm) 30%混入。1に類似する。
- 5 明黄褐色土 (10YR6/6) 産腐ローム。
- 6 黄褐色土 (10YR5/6) ローム殻 (径1~3mm) が主体。黒褐色土 (10YR2/2) 40%混入。
- 7 黄褐色土 (10YR5/6) ローム殻 (径1~3mm) が主体。黒褐色土 (10YR2/2) 20%混入。
- 8 黄褐色土 (10YR5/6) ローム殻 (径1~3mm) が主体。黒褐色土 (10YR2/2) 40%混入。

SK-5

- 1 黒褐色土 (10YR2/2) 締まりは強い、ローム殻 (径1~3mm) 5%混入。
- 2 黒褐色土 (10YR2/2) 締まりは強い、ローム殻 (径1~3mm) 30%混入。
- 3 黒褐色土 (10YR2/2) とロームの混合土。比率は5:5。締まりは強い。
- 4 黄褐色土 (10YR5/6) 産腐層。掘み戻しのロームに所々黒褐色土 (10YR2/2) が混じる。締まりは強い。

SK-6

- 1 暗褐色土 (10YR3/3) 強く締まっている。ローム殻 (径1~3mm) 20%混入。
- 2 褐色土 (10YR4/4) ローム殻・塊 (1~20mm) 5%混入。
- 3 暗褐色土 (10YR3/3) 強く締まっている。ローム殻 (径1~3mm) 20%、ローム塊 (径50~100mm) が所々に混入。
- 4 褐色土 (10YR4/4) 強く締まっている。ローム殻・塊 (径1~100mm) 20%混入。
- 5 黒褐色土 (10YR2/2) 締まりは強い。ローム殻・塊 (径1~30mm) 10%混入。
- 6 黄褐色土 (10YR5/6) ローム殻・塊 (径1~20mm) が主体。黒褐色土 (10YR2/2) 30%混入。

SK-7

- 1 褐色土 (10YR3/3) 強く締まっている。ローム殻 (径1~3mm) 20%混入。
- 2 暗褐色土 (10YR3/4) 締まりは強い。ローム殻・塊 (径1~100mm) 5%混入。
- 3 暗褐色土 (10YR3/3) 強く締まっている。ローム殻 (径1~3mm) 40%、ローム塊 (径10~30mm) 5%混入。

SK-20

- 1 黒褐色土 (10YR2/2) 締まりあり。ローム殻 (径1~3mm) 10%混入。
- 2 暗褐色土 (10YR3/4) 締まりあり。ローム殻 (径1~3mm) 40%混入。
- 3 黒褐色土 (10YR2/2) 締まりあり。ローム殻 (径1~3mm) 20%、ローム塊 (径30mm) 5%混入。
- 4 褐色土 (10YR4/4) 締まりあり。ローム殻 (径1~3mm) 30%、ローム塊 (径4~50mm) 10%混入。

SK-39

- 1 黒褐色土 (10YR2/2) 締まりあり。ローム殻 (径1~3mm) 20%混入。
- 2 黒褐色土 (10YR2/2) 締まりは強い。ローム殻・塊 (径1~10mm) 30%混入。
- 3 黒褐色土 (10YR2/2) 締まりは強い。ロームブロックが多量に混入。
- 4 黄褐色土 (10YR5/6) 産腐層。ソフトローム。
- 5 産腐ローム

SK-40

- 1 暗褐色土 (10YR3/4) 締まりは強い。ローム殻 (径1~3mm) 15%混入。
- 2 褐色土 (10YR4/4) 締まりは強い。ローム殻 (径1~3mm) 3%混入。
- 3 産腐ローム

縄文時代の土坑土層説明

SK-17

- 1 黒褐色土 (10YR2/2) 非常に強く締まっている。ローム殻 (径1~3mm) 15%混入。
- 2 黄褐色土 (10YR5/6) 非常に強く締まっている。ロームと黒褐色土 (10YR2/2) との混合土。
- 3 暗褐色土 (10YR3/3) 非常に強く締まっている。ロームと黒褐色土 (10YR2/2) との混合土。

SK-52

- 1 暗褐色土 (10YR3/3) 非常に強く締まる。今布石粒15%混入。

近代の遺構土層説明

SD-1A

- 1 黒褐色土 (10YR2/2) 締まりあり。ローム殻 (径1~3mm) 15%混入。
- 2 黒褐色土 (10YR2/2) 締まりあり。ローム殻 (径1~3mm) 5%混入。
- 3 黒褐色土 (10YR2/2) 締まりは弱い。ローム殻・小塊 (径1~5mm) 10%混入。
- 4 黒褐色土 (10YR2/2) 締まりは弱い。ローム殻 (径1~3mm) 1%混入。

SD-1B

- 1 暗褐色土 (10YR3/3) 締まりは強い。ローム殻 (径1~3mm) 10%混入。
- 2 黒褐色土 (10YR2/2) 締まりは弱い。ローム殻・塊 (径1~10mm) 15%混入。
- 3 黒褐色土 (10YR2/2) とロームの5:5の混合土。締まりは弱い。
- 4 黒褐色土 (10YR2/2) とロームの6:4の混合土。締まりは弱い。

SD-2A

- 1 暗褐色土 (10YR3/3) 締まりは弱い。ローム殻・小塊 (径1~5mm) 5%、赤色スコリア殻 (径1~3mm) 1%混入。
- 2 暗褐色土 (10YR3/3) 締まりは弱い。ローム殻・塊 (径1~30mm) 15%混入。
- 3 黒褐色土 (10YR2/2) 締まりは弱い。ローム塊 (径20~70mm) 多量に混入。

SD-2B

- 1 褐色土 (10YR4/4) 締まりは弱い。ローム殻 (径1~3mm) 35%、ローム塊 (径10~80mm) 15%混入。
- 2 黒褐色土 (10YR2/2) 締まりは弱い。ローム殻 (径1~3mm) 5%混入。
- 3 暗褐色土 (10YR3/3) 締まりは弱い。ローム殻 (径1~3mm) 20%、ローム塊 (径10~20mm) 10%、赤色スコリア殻 (径1~3mm) 1%混入。
- 4 黒褐色土 (10YR2/2) 締まりは弱い。ローム殻 (径1~3mm) 5%混入。
- 5 暗褐色土 (10YR3/3) 締まりは弱い。ローム殻 (径1~3mm) 2.5%混入。

SD-2C

- 1 暗褐色土 (10YR3/3) 締まりは弱い。ローム殻・塊 (径1~5mm) 1%混入。
- 2 暗褐色土 (10YR3/3) 締まりは弱い。ローム殻・塊 (径1~60mm) 5%混入。
- 3 暗褐色土 (10YR3/3) 締まりあり。ローム殻 (径1~3mm) 1%混入。
- 4 暗褐色土 (10YR3/3) とロームの4:6の混合土。締まりは弱い。ローム塊 (径20~40mm) 多量に混入。
- 5 暗褐色土 (10YR3/3) 締まりあり。ローム殻 (径1~3mm) 15%混入。
- 6 ロームが主体。締まりあり。黒褐色土 (10YR2/2) 10%、ローム塊 (径20~40mm) 多量に混入。
- 7 黒褐色土 (10YR2/2) とロームの3:5の混合土。締まりあり。ローム塊 (径1~40mm) 10%混入。
- 8 黒褐色土 (10YR2/2) 締まりは弱い。ローム殻 (径1~3mm) 3%混入。
- 9 黒褐色土 (10YR2/2) 締まりあり。ローム殻・小塊 (径1~5mm) 1%混入。
- 10 黒褐色土 (10YR2/2) とロームの5:5の混合土。締まりは弱い。ローム殻・小塊 (径1~5mm) 10%混入。

SD-3・4

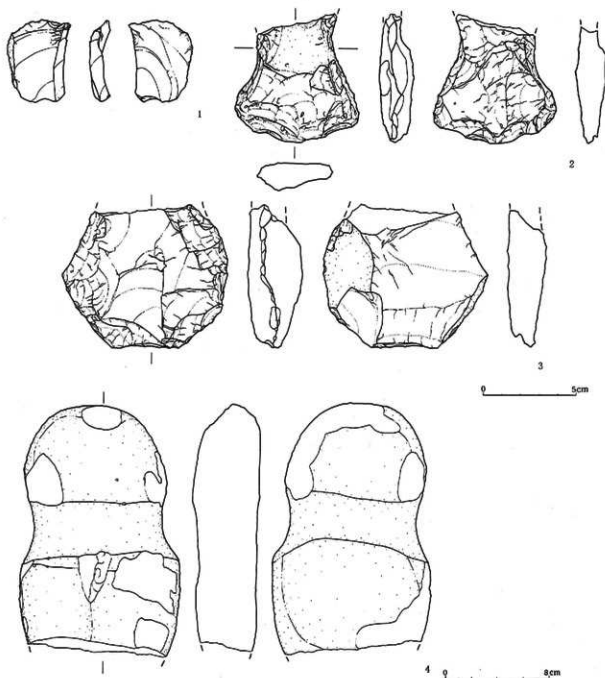
- 1 褐色土 (10YR4/4) 締まりは強い。ローム殻 (径1~3mm) 5%混入。
- 2 暗褐色土 (10YR3/3) 締まりは強い。ローム殻 (径1~3mm) 15%、赤色スコリア殻 (径1~3mm) 1%混入。
- 3 黒褐色土 (10YR2/2) 締まりあり。ローム殻 (径1~3mm) 3%混入。

SK-43

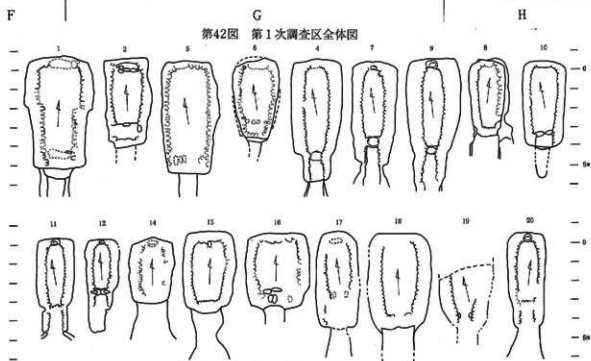
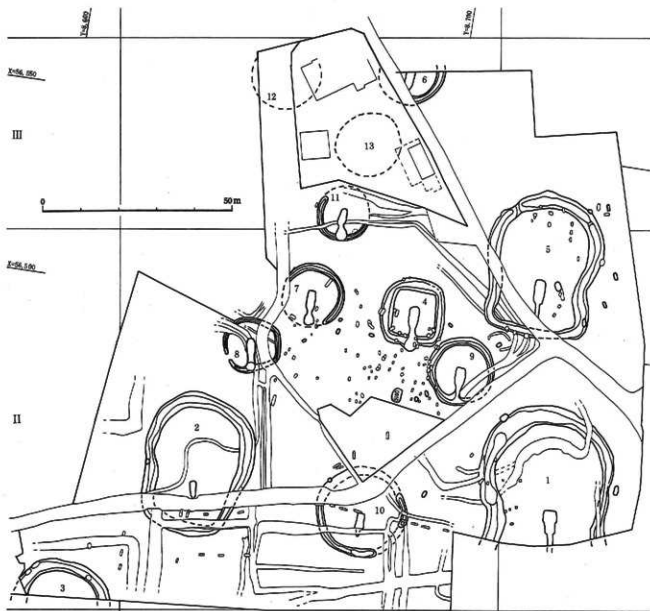
- 1 暗褐色土 (10YR3/4) 締まりは弱い。ローム殻 (径1~3mm) 5%混入。鉄鉱石を含む同級石が混入。
- 2 ロームと黒褐色土 (10YR3/4) の7:2の混合土。締まりは弱い。
- 3 黒褐色土 (10YR2/2) 締まりあり。ローム殻 (径1~3mm) 10%、ローム塊 (径4~10mm) 15%混入。

第10表 その他の出土遺物観察表

No	種類	遺存状況	大きさ (mm)			重量 (g)	石質	備考
			最大長	最大幅	最大厚			
1	フレーク		42	34	8	10	珪質頁岩	近代の土坑 S K-48 出土
2	打製石斧	60%	67以上	68	18	97	砂岩	分銅形 調査区
3	打製石斧	50%	79以上	87	29	[166]	安山岩	分銅形 18号積層遺
4	隕石	80%	200以上	126	53	[2.120]	石英正岩	先端部を欠失、現存の中程に浅い凹をもつ。晩期、近代の土坑 S K-43 出土



第41図 その他の出土遺物



第43图 第1次・2次调查石室比较图

3. まとめ

今次調査区は、第1次調査区(約2万㎡)の北方約110mに位置し、約1万㎡を調査した。両調査区の間にある地域にも前方後円墳1基を含む数基の古墳の存在が推定される。さらに、1次調査区では南へ、今次調査区では北への広がり確認されている。これらは一連の古墳群と考えられ、一括して根本西台古墳と名称された。したがって、各古墳の番号は1次・2次を合わせての通し番号とした。本古墳群は、東西150m、南北500m以上の範囲に30~40基程の古墳で構成されていたと推察される。また、東は台縁下方を流れる越戸川を境に鬼怒川低地となり、古墳の広がりはないが、西は第1次調査区の西約70mに桑島台古墳群(10数基)が所在する。本古墳群との間には南北に延びる幅20m程の埋没谷があり、これを境に両古墳群が区分されている。本来はこの古墳群も一連の古墳群である可能性も否めないが、未調査であり現段階では従来の区分を踏襲する。

今次調査区では前述の如く部分的なものも含め計8基の古墳を調査した。先の第1次調査では計13基の古墳を確認し、そのうち部分的なものも含め12基を調査した。ここでは、これら20基の古墳の墳丘(周濠のみ)、埋葬主体部等の特徴を要約しまとめとする。

墳形及び墳丘規模(第4・42図)

10基の古墳のうち、12・15号墳の2基は周濠が全く確認できず、墳形規模とも不明と言わざるを得ない。他の18基のうち、1・2・5号が前方後円墳、4号が方墳の他はすべて円墳と考えられる。なお、3・21は周濠の北端部のみ確認で、径が20m代と大きいことから前方後円墳の可能性も全くは否定できないが、周濠の状況から現段階では円墳と推定する。

当地の後期末~終末期古墳の墳丘は、いわゆる「下野型」と呼ばれる周濠の内側に広いテラスを設け、テラスの内側に封土を盛り上げたものである。したがって、他地域とは異なり、周濠=墳丘規模とはならず、埋葬主体部の石室も深い墳穴内に構築されていたため、墳丘の高さも著しく低い。

しかし、本古墳群では確認した古墳はすべて開壘により墳丘が削平されていて、本来の墳丘規模を明確にすることが出来ない。このため、当地では周濠で墳丘規模を示すことに異論もあるが、本書ではやむなく周濠の内側の立ち上がり部分での計測値で示している。

1・2・5号墳はいずれも帆立貝形の前方向後円墳で、南に前方部を向け、前方部に埋葬主体部の横穴式石室が設けられていた。1号は前方部の先端が調査区外に延び、2号墳は地境溝に切られるなどして推定値となる。1号墳は推定全長36~38m、2号墳は同32m、5号墳は33mで、1号墳がやや大振りであった。

4号墳は唯一の方墳で、13×13.5mのはほぼ方形であった。墳丘の中央より南に向けて横穴式石室が構築されていた。

円墳は14基あり、径12~23mと大・小の差が大きい。埋葬主体部が確認された12基はすべて墳丘の中央より南に向けて横穴式石室が構築されていた。前方後円墳の間隙に円・方墳が築かれていた第1次調査区と円墳のみで構成されていた今次調査区では、本地区に比較大型の円墳の存在が目立つ。規模的に見て、16・18・21号墳などが第1次調査区の前方向後円墳に相当する存在と思われる。

周濠は遺存状態にも左右されるが、幅0.5~6.2m、深さ0.2~1.2mと様々で、概ね大型のものが確りしていた。明確なブリッジを確認できたものは前方向後円墳の5号墳のみであるが、1号墳は北側周濠が全体的に浅かった。

これまでの調査で埴輪の樹立が確認されたのは2号墳のみである。2号墳も墳丘が失われていて、埴輪樹立の状態は不明であるが、周濠内よりの出土状況を見ると、墳丘全体に廻っていたのではなく、前底部付近と墳頂部に樹立されていたと推察される。

また、葺石の葺かれた古墳は存在しなかったと判断される。

埋葬主体部（第43図）

埋葬主体部は周道の無い2基を含め計18基で確認した。5号墳の第2主体部と名称した土坑以外はすべて旧地表面より掘り込まれた深い竈穴（深さ0.9～1.4m）内に構築された半地下式の横穴式石室である。石室は河原石小口積みと基調とするも、奥壁の鏡石や玄門部に加工した多孔質安山岩や凝灰岩が使用されていたものもある。

平面形・規模は第41図に模式図を示した通りである。なお、1・2・14号墳は墓道、19号墳は石室北側が調査区外にあって調査ができなかった。全体的に後世の破壊を受けていて遺存状態が悪いものが多く、壁の根石はおろか裏込めや敷石まで失われていたもの（2・6・14号）もある。したがってこれらは竈穴の底面に残されていた壁の根石の痕跡より推定した（図では点線で表示）。石室は羨道部が退化（省力化）して著しく短いものが多く、羨門部が確認できたものはない。

平面形は、複室を意識したもの（1号）や、方形を基調としたもの（16号）も見られたが、他は主軸に長辺をそろえた長方形で、その多くは玄室が胴張り形であった。また、竈穴内に玄室と羨道が設けられたと推定されるもの（1・2・5・6・10・14・16～19号）と、羨道部が竈穴外（浅い掘り込みは伴う）に設けられたもの（7～9・11・12・15・20号）とがある。前者のうち、玄門の構造を推定し得るのは、2・10・16号の3基程である。2号は川原石小口積みの側壁で、床面の状況から玄門と推定される位置の両側は小口積みが見られず、柱状の凝灰岩があった可能性が高い。16号墳は西側の袖部に玄門柱の基部と思われる方柱状の凝灰岩の下端が残存していた。その東に接して、細長の河原石が石室の主軸に直行するかたちで据えられており、框石の役を持つと推察される。これらは竈穴底面に玄門柱を立て、その間に框石を置いたと考えられる。10号は玄門にあたる部分の側壁材（小口積みの河原石）が両側から内側に突き出していた。また、その間には16号と同様に河原石が2石据えられていた。後者は、玄室と羨道部の床面の高低差が大きく、小さな玄門と加工した安山岩製の鏡石を持つことを特徴とする。これらの玄門部は部分加工した框（榎）石の上に方立石を立てて楣石を載せているが、玄門の内法が幅30cm、高さ50cmと追葬には不適当な規模であった。玄門の外（南）には羨道の壁に相当する低い石積みが見られるものの、その高さから天井は存在しなかったと推察される。したがって、厳密な意味での羨道は存在せず、閉塞部としての用途が主目的と考えられる。なお、前者の竈穴内に羨道を設けた一群も、羨道の床面には細長の河原石が長軸を石室の主軸にそろえて並べられており、これも閉塞を主目的とした施設と考えられる。

河原石を小口積みした側壁では、壁材を安定させるために竈穴の壁との間に裏込めが施されていた。1・2・16・17～19号などは、壁材の外側にこれよりやや小振りの同形の石材を積み上げて控え積みとし、これらを黒色土混じりのローム土で突き固めてあった。また、1・16・18号ではローム土主体の裏込め層の間を砂と小砂利の薄い層（サンドマット）が認められた。逆に4・7～12・14・15・20号などの裏込めは黒色土混じりのローム土が主体で、部分的に石材が混入している程度であり、裏込めに対しても明確な省力化が計られていた。なお、両者とも裏込めの土層観察から15～25cmの厚さで作業が行われたと推察され、石積み一段毎に突き固められたと判断される。

奥壁が遺存したのは、7・9～12・20号の6基である。10号は他の壁材の4倍ほどの大振りの石を主軸に直交するように据えて、その脇と上方を小口積みしていた。他の5基はいずれも内側を平らに加工した「おにぎり形」の石を2～3段積み上げその脇と上方を小口積みしていた。奥壁は遺存しなかったが、玄門の状況などから4・8・14号なども同様の奥壁であった可能性が高い。1・2・6・16・18も奥壁は遺存しなかったが、

こちらは推定位置やその周辺に多数の凝灰岩片が認められたことから、凝灰岩を使用していた可能性が高い。

天井部も遺存したものは無いが、10・11・20号墳などで長さ50～80cmと、壁材に比べ著しく大きな河原石が10数個石室内に落下した状態で出土しており、天井の部材と考えられる。なお、これらの石室のように玄室の床面野の幅が1m前後であれば側壁の持ち送りを考慮するとこの程度の石材で十分であろうが、幅が1.5～2mの1・5・6・15・16・18号などでは凝灰岩の切石が用いられていた可能性が高い。

玄室床面（埋葬面）は、径15～20cmの扁平な石、径1～5cmの小砂利、径5～15cmの礫を利用したものや、これらを組み合わせて、二重にしたものなどが見られた。1号のように、扁平な石を敷いた上に小砂利を敷き詰めるなど全く異なる場合は当初からの可能性もある。逆に類似の用材が二重に敷かれたものは追葬に伴うものと推察されるが、後世の擾乱により断定は難しい。

羨道部床面も遺存状態が不良で明確でないが、墳穴内に羨道が設けられている場合は側壁材に類する石材が主軸と長軸をそろえて並べられているものが多い。一段高い墳穴の外に羨道が設けられた場合は敷石が施されず、掘り込み底面に閉塞材と考えられる、墜用と類似の石材や粘質土が置かれているものが見られた。

石室が半地下式であることから、墓道と呼ぶのが適当であるのか否かはさておき、旧地表より石室に向かって下る掘り込み（10・12号）や、石室より南に向かって延び周濠に至る掘り込み（1・2・4～9・14～20号）が見られた。また、後者には溝状に周濠に向かうもの（5・16・18号）と、周濠に向かって「八」字状に広がるもの（4・7～9, 14・17・19・20号）がある。さらに、墓道の先端、周濠内等に大きな掘り込みを持つ一群（4・7・8・11）がある。17・20号もこれに近い状況を示し、周濠が認められなかった15号にも設けられていた。なお、これらの掘り込みを持つ石室は玄室の平面の胴張りが強く、加工した安山岩製の奥壁と玄門部を伴うという共通性が見られた。また、このような掘り込みも、周濠も見られなかった12号も奥壁・玄門部の構造はこれらと同一である。したがって、加工された安山岩製の奥壁と玄門部が施設された石室を持つ古墳は本古墳群における末期的特徴であり、この種の石室が採用された当初は周濠内に掘り込みが設けられ、周濠が省略された15号墳でも前面の掘り込みは設けられ、12号の段階では、石室に下る掘り込みだけになっていた。

遺物（副葬品）の多くは後世の擾乱によって失われたものか全般に少なく、ほとんど出土しなかった古墳もあるが、これまでの調査で次のものが出土している。

装身具としては金銅製耳環、切子玉、ガラス小玉、土製丸玉、勾玉、琥珀製棗玉など、武器としては直刀、刀飾具、鉄鏃、馬具は轡、什器として刀子が出土したほか、土師器杯、碗、甕、須恵器の甕、提瓶、甗、フラスコ形瓶などの土器類、埴輪（円筒・形象）などが出土した。

この他に、極少量の縄文土器、石器や奈良・平安時代の須恵器杯、高台杯、鉄鉢型土器、土師器杯、台付甕、中・近世のカワラケ、銭貨、常滑系甕、石塔類なども出土し、長い間の土地利用を示している。

Ⅲ 瑞穂野団地遺跡（東地区）

1. 遺跡の概要と調査の方法

(1) 遺跡の概要

今次調査区はⅠ章に記した如く、周知の遺跡である瑞穂野団地遺跡の推定範囲の外に位置し、工事中に発見されたものである。平成18年7月25日付で事業主より栃木県教育委員会宛に遺跡の新規発見の手続きが取られ、瑞穂野団地遺跡の範囲拡大と判断された。

工事中の発見であり、既に工事が進行している既存道路部分は小学校の通学路にあたるため夏休み中に終了する必要があり緊急を要するため、翌8月3日より発掘調査に着手した。尚、既存道路部分の工事を終了するには、調査対象地を利用しなければ不可能とのことであり、調査区西端より調査を実施し、部分的に市教委による終了立会いを受けて工事を行った。調査区全体については、同年9月12日に市教委の終了立会いを受け、同月15日に全ての野外調査を終了した。

前述のように、工事中の発見によるもので、調査対象地の南半部は既に工事に伴う掘削によりハードルーム層まで削平されていて、5軒ほどの住居跡が露出していた。調査の対象面積は放水路敷設部分とその上面に計画されている道路用地で、幅12m、長さ約130mの約1,800㎡であった。調査の結果、竪穴住居跡7軒、掘立柱建物跡3棟、土坑4基、小穴30口などを確認した。これらの分布状況を見ると東端のSⅠ-7を除きいずれも中央から西寄りに見られた。また、SⅠ-6のように住居跡の掘方のみが残存するものがあり、他にも類似の痕跡の一部が見られたことから、本来はさらに密度の高い集落跡であったと推察される。さらに、東半部においても、住居跡の見られなかった部分に多数の小穴等が認められたことから、今回の工事による削平に加え、開田に伴う削平によって遺構が失われた可能性も否めない。

尚、瑞穂野団地遺跡は調査区の西方約100mを南流する江川を跨ぐように立地し、南北約800m、東西が約400mの300,000㎡に及ぶ広大な範囲が想定されている。昭和48年8～10月には土地区画整理事業に伴い、江川の右（西）岸において2ヶ所で発掘調査が実施されており、それぞれ北地区、南地区と呼称されている。北地区では古墳時代後期～平安時代の住居跡が26軒、南地区では弥生時代後期～平安時代の住居9軒などが調査され、先土器時代や縄文時代の遺物も出土している。

今次調査区はこれまでの遺跡推定範囲の北東に位置することから東地区と呼称することとした。また、今次調査区の位置まで遺跡の広がりや判明したわけであるが、北東端にSⅠ-7が存在し、いずれの掘立柱建物跡も北に向かって延びると想定されることから、さらに北と東に向かって集落が広がることは明白である。

また、調査区の西端に接する市道は地元では奥州街道と呼ばれており、付近の他の道路がいずれも市街地に向かっているのに対し、北北東に向かって直線的に延びている。平成9年度版『宇都宮市遺跡地図』に示された古代東山道の推定ラインの西約300mのところにあつて、推定ラインと平行に延びており東山道の可能性も推定されていた。この為、集落跡の他、古道の存在も想定して調査した。調査区が東西約130mと細長いトレンチ状であったが、今次調査区には全くその痕跡は認められなかった。或いはいくぶん西側にずれているのかもしれない。

(2) 調査方法及び基本土層 (第44図)

調査区の南半部は既にローム層まで削平されていたが北半部は表土層が残存しており、重機により除去した。その後人力による遺構確認作業を行い平面形・規模等を確認した。確認した遺構はセクションベルトを設定して埋積土を除去した。土層を記録の後、セクションベルトを除去して遺構を完掘後、写真撮影・実測等の記録を行った。その後、遺物を取り上げてカマド及び住居跡の床下(掘方)の調査を行い、再び写真撮影、実測作業を行った。尚、SI-6は既に床面に削平され掘方みの遺存であったが、規模・形状を推定し得る状態であったため記録した。しかし、この住居跡とSI-3の間にも住居跡の隅の掘り込みの一部と思われるものが認められ追求したが、同様の成果は得られなかった。

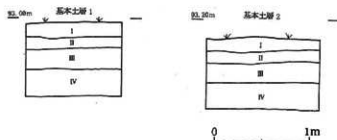
掘立柱建物跡はいずれも部分的な調査であり、柱掘方を平面確認の後半載して土層を記録し、柱列が想定できたものはグループ毎にそれぞれの全景写真を撮影した。

遺構の実測図作成は全て人手で行い、調査区が12×130mと非常に細長いことから、任意の基準点・区画を設定し、後に公共座標と合致させた。

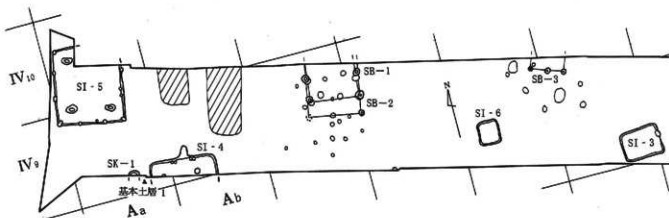
基本土層は次の通りである。

- 第Ⅰ層 黒褐色土 (10YR3/1) 締まり有り (耕作土)
- 第Ⅱ層 黒色土 (10YR2/1) 締まり有り。ローム粒(径1~8mm)を2%ほど含む。
- 第Ⅲ層 暗褐色土 (10YR3/4) 締まり有り。(ローム漸移層)
- 第Ⅳ層 黄褐色土 (10YR5/6) やや軟質で粘性がある。締まりは強い。(ローム上層)単一層である。

I層は耕作土でII層が水田の床土、III層が遺構確認面である。現状ではほぼ平坦であるが、地山は多少の起伏があり、調査区の中央やや東寄りの地山面がやや高く、東と西に向かって緩やかに下降している。



第44図 基本土層図



第45図 調査区全体図

2. 遺構と遺物

今次調査で確認した遺構は竪穴住居跡7軒，掘立柱建物跡3棟，土坑4基，小穴30口などである。調査区が道路用地で幅が12mであったことから全体を調査し得た遺構は少ない。

(1) 竪穴住居跡

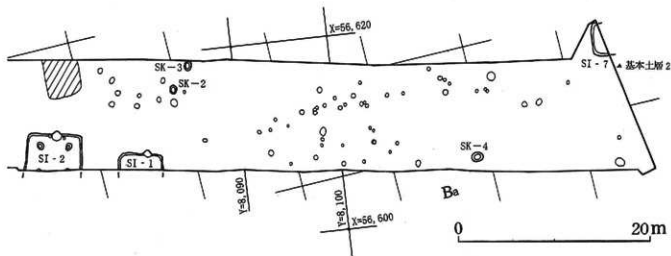
今次調査で確認した住居跡は計7軒（内1軒は掘方のみ）である。分布状態を見ると，調査区の西端にSI-4・5の2軒，中央にSI-1～3の3軒，両者の中間よりやや東寄りにSI-6があり，SI-6と3の間にも住居跡の掘方の痕跡らしきものが認められたが明確にし得なかった。さらに調査区の北東端にはSI-7が単独で見られ，東半部は区域外の市道の下に延びている。

SI-1（第46・47図，図版17A.～D.）

調査区中央の南端に位置する。南側60%ほどが調査区外の為に未掘である。本跡の西約4mにはSI-2がある。

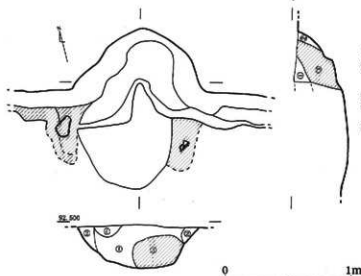
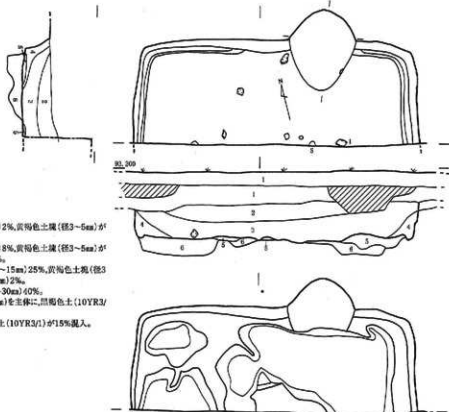
遺構 確認面はローム漸移層。平面形は東西長450cm，現状の南北長が165cmで本来は一辺450cm程の方形と推定される。主軸方位はN-20°-Eである。壁高は40～60cmで，ほぼ直立する。壁溝は壁下を囲繞し，北壁に施設されたカマドの袖の手前で止まっている。幅は10～13cm，床面からの深さは6～10cmで，断面形はU字形を示す。床面はローム層中で若干の起伏があり，一部に5cmほどの薄い貼床が確認できた。柱穴は認められなかった。担積土は黒褐色土で締まりも良く自然埋没である。カマドは北壁の中央やや東寄りに施設されている。両袖の痕跡はあるものの遺存状態は悪い。カマドは袖と天井が灰黄褐色粘土で，火床部直上に天井の崩落と思われる粘土塊が確認された。また，遺存する両袖部からは，土師器の破片が出土している。明確な焼面は確認されなかった。規模は最大長125cm，最大幅104cmである。

遺物は須恵器杯・高台杯・甕，土師器甕，女瓦片等が出土しているが，完形品はなかった。



S I - 1

- 1 黒褐色土(10YR3/1)耕作土
 1 黒褐色土(10YR2/2)ローム殻(径1~2mm)2%,黄褐色土塊(径3~5cm)が腐状に10%混入。
 2 黒褐色土(10YR2/2)ローム殻(径1~3mm)8%,黄褐色土塊(径3~5cm)が塊状に15%混入。焼土粒(径1~3mm)2%。
 3 黒褐色土(10YR2/2)ローム殻(径1~15mm)25%,黄褐色土塊(径3~5cm)が15%混入。焼土粒(径1~8mm)2%。
 4 黒褐色土(10YR3/1)ローム殻(径1~30cm)40%。
 5 ローム主体の腐炭,ローム殻(径1~50cm)を主体に,黒褐色土(10YR3/1)が30%混入。
 6 ローム殻(径1~80cm)を主体に,黒褐色土(10YR3/1)が15%混入。



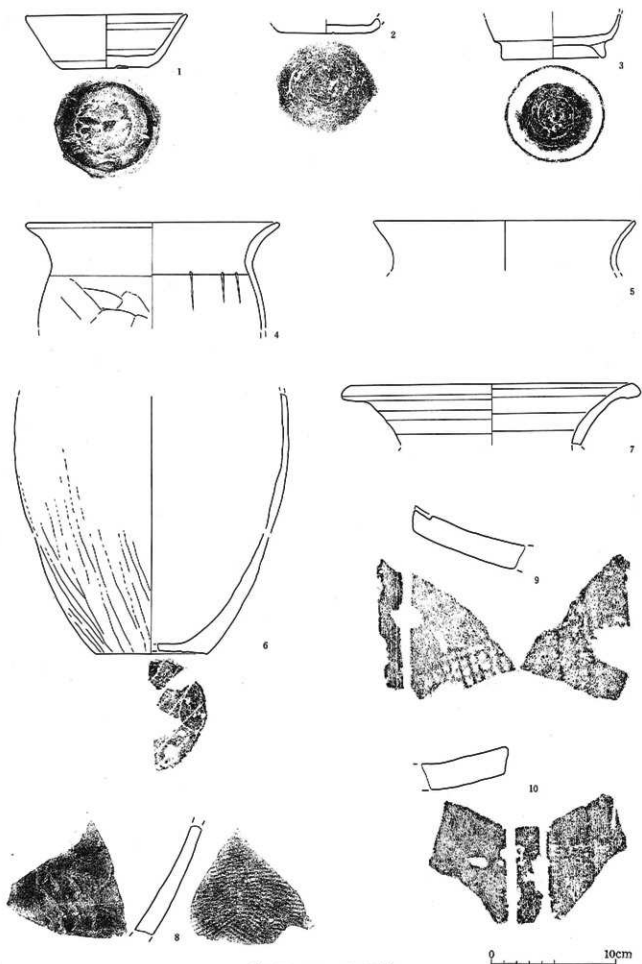
S I - 1 カマド

- ① 黒褐色土(10YR3/2)ローム殻(径1~12cm)10%,灰黄褐色粘質土(10YR5/2)粒・塊(径1~10cm)20%,焼土粒(径1~3cm)1%,炭化物粒(径2~6mm)1%混入。
 ② ローム60%,黒褐色土(10YR3/1)40%混入(硬粘土)。
 ③ 灰黄褐色粘質土(10YR5/2)粒・塊(径1~30cm)の混合(4:6)に,ローム殻(径1~6mm)5%,焼土粒(径1~5mm)3%混入。
 ④ 黒褐色土(10YR3/1)ローム殻(径1~2mm)3%混入。

第46図 S I - 1・掘方・カマド

第11表 S I - 1 出土遺物観察表

番号	種類・器種	寸法 (mm)	胎土・焼成・色調	形状・器形の特徴	出土位置・備考
1	須恵器・坏	口径 (128) 底径 68 器高 (43)	胎土: 白色粒, 2mm 程度を含む 焼成: 良好 色調: 灰色 (5 YR 5/1)	ロクロ整形, 底部へラ起し	底部に黒痕
2	*	底径 68 器高 [12]	胎土: 長石, 2~3mm 程度みらい 焼成: 良好 色調: 灰色 (N 4/0)	ロクロ整形, 底部回へラ削り	
3	須恵器・高台坏	底径 78 器高 [34]	胎土: 白色粒, 黒色稀石 焼成: 良好 色調: 灰色 (5 Y 5/1)	ロクロ整形, 底部へラ起し, 付け高台	
4	土師器・甕	口径 198 器高 68	胎土: 石英砂, 酸化鉄 焼成: 良好 色調: 灰褐色 (7.5 YR 4/2)	口辺部板ナテ, 体部外面削り, 内面横へラナテ	



第47图 SI-1 出土遺物

5	土師器・甕	口径 器高	(208) [41]	胎土：微砂粒 焼成：良好 色調：にぶい褐色 (7.5 YR 5/4)	口辺部横ナデ	
6	+	底径 器高	(88) [208]	胎土：石英・長石砂粒，酸化鉄 焼成：良好 色調：褐色 (7.5 YR 4/3)	体部外面縦の粗い磨き，内面ヘラナデ，底 部木葉痕	2区
7	須恵器・甕	口径 器高	(226) [48]	胎土：白色粒，金雲母 焼成：良好 色調：灰色 (N 4/0)	ロクロ整形，口縁部折り返し口縁	
8	+			胎土：長石，白色粒 焼成：良好 色調：N 3.5/0	外面平行印き，内面ヘラナデ	1区
9	瓦・女瓦			胎土：石英，長石，黒色粒 焼成：不良 色調：灰白色 (10 YR 8/2)	凸面格子目印き，凹面布目痕	
10	+			胎土：石英，長石，黒色粒 焼成：不良 色調：浅黄褐色 (10 YR 8/3)	凸面ナデ，凹面布目痕	

SI-2 (第48～50・65図，図版17E～H.)

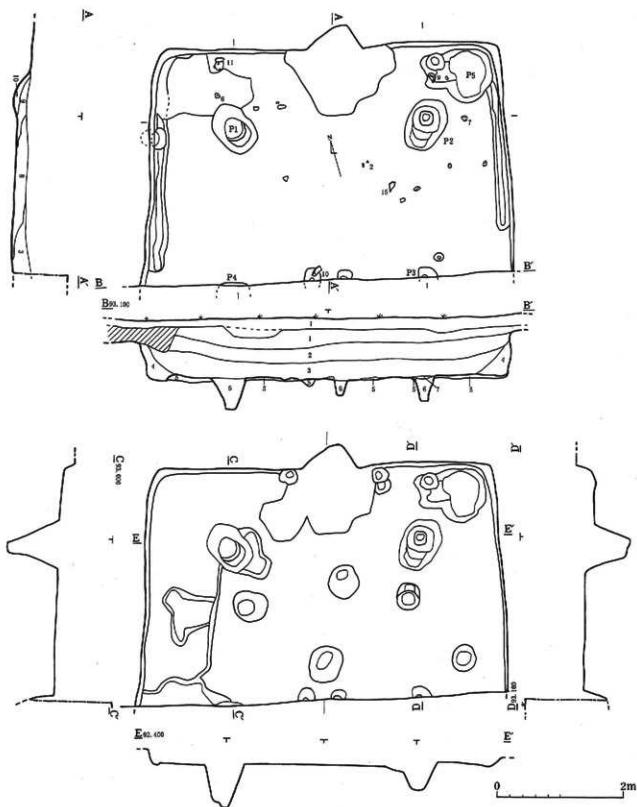
調査区中央の南端に位置し，南側30%ほどが調査区外に延びている。本跡は東約4mにSI-1，西約3mにSI-3がある。

遺構 確認面はローム漸移層。平面形は東西長575cm，現状の南北長365cmで柱穴の位置から本来は5m程の長方形と推定される。主軸方位はN-17°-Eである。壁高は65～70cmで，ほぼ直立する。壁溝は東と西の壁下に遺存するが，北東と北西の隅でそれぞれ止まっており圍繞はしていない。幅15～30cm，床面からの深さ3～10cmで，断面形は皿形を示す。床面はほぼ平坦で堅く締まっており，4～10cm程の貼床が施されていた。柱穴は4口確認し，対角線上に配置された主柱穴と思われる。平面形はそれぞれ堅穴の対角線を長軸とする楕円形でP1が80×55cm，床面よりの深さが85cm。P2は84×57cm，深さ74cmである。P3，P4は半分以上が調査区外の為に全体を確認することができなかった。これら柱穴の状態から，本跡は建替拡張が行われたと判断される。また，北東隅に位置するP5は南北84cm，東西75cmの楕円形で，深さは約20cmである。位置的に貯蔵穴と推定される。埋積土は黒褐色土・灰黄褐色粘質土で自然埋没である。カマドは北壁のほぼ中央に施設されている。遺存状態が悪く両袖も遺存していなかったが，火床部に暗灰黄色粘質土が堆積しており，天井もしくは袖部の部材と思われる。規模は最大長141cm，最大幅108cmである。本跡は建替拡張が行われたと判断され，カマドもそれに伴い造り替えが行われており，現在の壁より25cm程内側にその痕跡が認められた。また，カマド両脇の壁に接して径20～30cm，深さ30cm程の小穴が設けられており，付随の施設と考えられ，これらも造り替えが見られた。

遺物は坏，高台坏，甕，蓋などの須恵器片，坏，甕，台付甕等の土師器片が出土したが，完形品はなかった。

第12表 SI-2 出土遺物観察表

番号	類別・器種	寸法 (mm)	胎土・焼成・色調	整形・器形の特徴	出土位置・備考	
1	土師器・坏	口径 器高	(111) [32]	胎土：細砂粒 焼成：2次火焼を受ける 色調：棕色 (7.5 YR 6/5)	口辺部外面ナデ，体部外面縦ケズリ，内面 磨き	カマド
2	須恵器・坏	口径 底径 器高	(152) (92) 37	胎土：白色粒 焼成：良好 色調：灰白色 (5 Y 7/1)	ロクロ整形，底部凹へラ削り	3区
3	+	口径 底径 器高	(142) (85) 40	胎土：白色粒，2～3mm 塵 焼成：良好 色調：灰色 (5 Y 5/1)	ロクロ整形，底部へラ起し 内面一部灰被り	3区
4	+	口径 底径	(138) (35)	胎土：細砂粒，やや粗い 焼成：好 色調：灰色 (5 Y 6/1)	ロクロ整形	3区

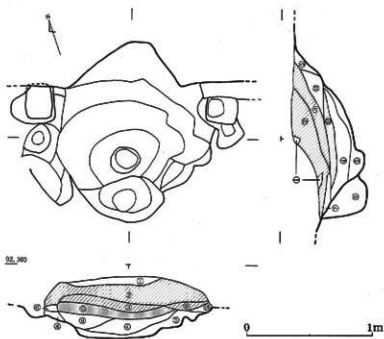


S I - 2

- 1 黒褐色土(10YR2/2)ローム状(径1~2cm)1%,焼土粒(径1~3cm)1%,灰黄褐色土(10YR5/2)(径10~40mm)が実質に20%混入。
- 2 黒褐色土(10YR2/3)ローム状(径1~2cm)5%,焼土粒(径1~3cm)1%,灰黄褐色土(径10~30cm)が実質に10%混入。
- 3 黒褐色土(10YR2/3)ローム状・塊(径1~80mm)15%,焼土粒(径1~3cm)1%,炭化骨粒(径1~12mm)1%,灰黄褐色土(径10~30mm)が実質に10%混入。
- 4 黒褐色土(10YR2/2)ローム状(径1~2cm)8%,焼土粒(径1~2cm)1%
- 5 黒褐色土(10YR2/3)ローム状・塊の集合。(乱床)

- 6 ローム状・塊土(径1~100mm)黒褐色土(10YR2/2)10%混入。(田畦穴埋め用)
- 7 黒褐色土(10YR2/3)ローム状・小塊(径1~12cm)15%。(田畦穴埋め用の乱床)
- 8 灰黄褐色粘質土(10YR4/2)ローム状(径1~8cm)3%,焼土粒(径1~3cm)8%,灰黄褐色粘質土・塊(径3~50mm)10%。
- 9 灰黄褐色粘質土(10YR4/2)と灰黄褐色粘質土・塊(径3~100mm)の混合物で比率45:5。焼土粒(径1~4cm)3%,炭化骨粒(径1~5cm)1%混入。
- 10 灰黄褐色粘質土(10YR4/2)焼土粒(径1~2cm)6%,灰白色粘質土(10YR7/1)粘質土(径1~20cm)15%混入。

第48図 S I - 2・掘方

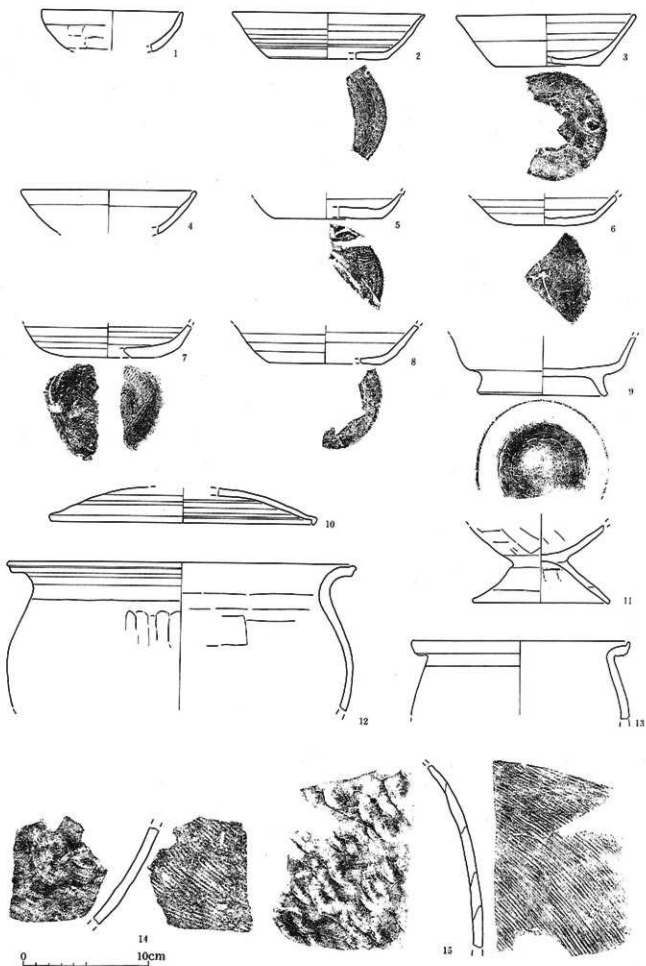


SI-2カマド

- ① 黒褐色土(10YR3/2)暗灰黄色(2.5Y5/2)粘質土、陶片色(10YR6/1)粘質土粒・塊(径2~20mm)40%、焼土粒(径1~3mm)1%混入。
- ② 灰白色土(10YR7/1)、灰黄色土(2.5Y6/2)粘質土の混合土、焼土粒(径2~25mm)3%、灰黄色粘質土(10YR4/2)10%混入。
- ③ 灰黄色粘質土(2.5Y6/2)焼土粒・塊(径1~30mm)20%、暗褐色土(10YR3/3)20%混入。
- ④ 灰黄色粘質土(2.5Y6/2)灰白色粘質土(2.5Y7/1)粒・塊(径2~25mm)15%、黄褐色粘質土(2.5Y3/3)塊(径3~20mm)15%、焼土粒(径1~15mm)25% (内割にやや多い)。
- ⑤ 暗灰黄色粘質土(2.5Y5/2)灰黄色粘質土・塊(径1~20mm)15%、焼土粒(径1~5mm)7%混入。
- ⑥ ローム粒・小塊(径1~20mm)が主体、硬さが低い。上部に炭化物粒(径1~20mm)20%、粘土粒・小塊(径1~15mm)8%混入。注カマド。
- ⑦ 黒褐色土(10YR2/3)ローム粒(径1~2mm)5%、焼土粒(径1~2mm)3%、炭化物粒(径1~2mm)2%混入。
- ⑧ 暗灰黄色粘質土(2.5Y5/2)ローム粒・塊(径1~30mm)30%混入。
- ⑨ 暗灰黄色粘質土(2.5Y5/2)ローム粒・塊(径1~30mm)30%混入。
- ⑩ 灰黄色粘質土(2.5Y6/2)焼土粒・小塊(径1~25mm)20%混入。
- ⑪ 暗褐色土(10YR3/4)焼土粒(径2~3mm)2%、ローム粒・塊(径1~25mm)20%混入。
- ⑫ 明赤褐色粘質土(5YR5/8)暗褐色粘質土(7.5YR5/2)15%、陶片色粘質土(10YR6/2)5%混入。良く層状になっている。
- ⑬ 灰褐色粘質土(7.5YR5/2)焼土粒・小塊(径1~20mm)10%、ローム粒(径1~6mm)1%、黒褐色土(10YR2/2)15%、硬さが少ない。

第49図 SI-2カマド

5	須恵器・坏	底径 器高	(85) (20)	胎土：白色粒 焼成：良好 色調：灰色 (7.5 Y 4/1)	ロクロ整形、底部へラ起し 内面一部滑れる	1・4区
6	*	底径 器高	(80) (25)	胎土：1~2mm 礫、微砂粒 焼成：不良 色調：橙色 (7.5 YR 6/6)	ロクロ整形、底部へラ起し 内外面半減 外底面「-」のヘラ記号	No 14
7	*	底径 器高	(85) (28)	胎土：白色粒、3~4mmの礫含み粗い 焼成：良 色調：灰色 (5 Y 6/1)	ロクロ整形、外底面に板状の圧痕、内底面に 板状工具によるナゲ	No 3
8	*	底径 器高	(91) (32)	胎土：細砂粒 焼成：良 色調：暗灰色 (N 3/0)	ロクロ整形、底部へラ起し	1区、カマド
9	須恵器・高台坏	底径 器高	101 (47)	胎土：白色粒 焼成：良好 色調：灰色 (N 4/0)	ロクロ整形、付け高台、外底面に爪の痕跡、 胎成、内底面が滑れる	No 1
10	須恵器・壺	口径 器高	(208) (28)	胎土：微砂粒 焼成：やや不良 色調：灰白色 (2.5 Y 8/1)	ロクロ整形	No 10
11	土師器・台付壺	底径 器高	(108) (63)	胎土：細砂粒 焼成：良 色調：にぶい赤褐色 (2.5 YR 4.5/4)	外部外面斜め削り、内面ナゲ、脚部外面ナゲ 内面へラナゲ	No 16
12	土師器・壺	口径 器高	(274) (116)	胎土：石英・長石砂粒 焼成：良 色調：褐色 (7.5 YR 4/4)	口辺部ナゲ、体部内面へラナゲ 口辺部に赤色の顔料を塗布したものが、部 分的に赤みを帯びている。	
13	*	口径 器高	(173) (60)	胎土：石英、雲母片 焼成：良 色調：にぶい褐色 (7.5 YR 5/4)	口辺部破ナゲ、体部内面へラナゲ	
14	須恵器・壺			胎土：石英、雲母片 焼成：不良 色調：灰色 (5 Y 4/1)	外面斜め平行叩き、内面同心円当て具痕	
15	*			胎土：白色粒 焼成：良好、硬質 色調：灰色 (N 4/0)	外面斜め平行叩き、内面ナゲ	No 8, 1・2区



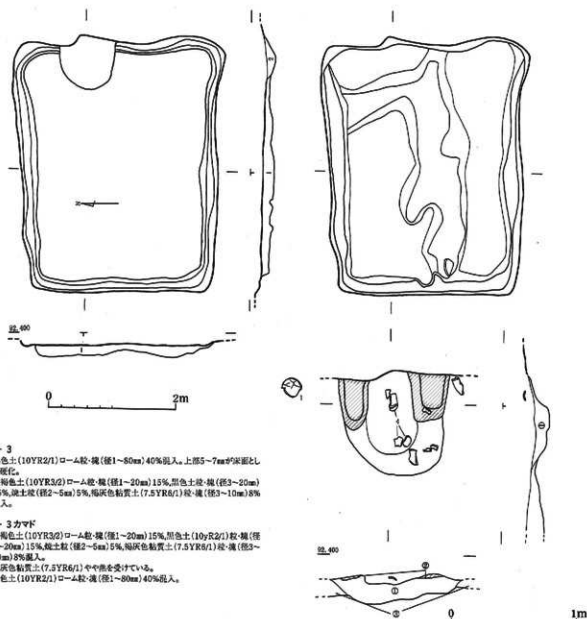
第50图 S I-2 出土遺物

SI-3 (第51・52図, 図版18A~D.)

調査区のほぼ中央に位置する。本跡の東約3mにSI-2, 西約12mにSI-6がある。本来はSI-6との間にも住居跡が存在した可能性が高い。

遺構 工事の削平により, 確認面はローム層である。平面形は東西長395cm, 南北長260~305cmの東西に長い長方形で, 東辺がやや広い。主軸方位はN-90°-Eである。壁は削平により消失している。壁溝は遺存状態が悪く痕跡のみであるが, 壁下を圍繞している。幅は14~25cm, 遺存する床面からの深さは1~3cm。断面形は逆台形であったと思われるが, 内側の立ち上がりはほぼ消失している。床面はローム層中にありほぼ平坦で, 8~20cm程整地して貼床が施され固く締まっていた。柱穴は認められなかった。埋積土は黒色土, 黒褐色土で自然埋没である。カマドは東壁の中央やや北寄りに施設されていた。遺存状態が悪く, 両袖も褐灰色粘質土の痕跡が僅かに残るのみであった。火床部に明瞭な焼土は認められず, 支脚も遺存していなかった。規模は最大長87cm, 最大幅83cmである。

遺物はカマド内より, 半分ほどが残存する土師器甕(4), カマド西脇より坏(1)が出土した。



SI-3

- 1 黒色土(10YR2/1)ローム状・塊(径1~80cm)40%混入。上部5~7cmが床面として硬化。
- 2 黒褐色土(10YR3/2)ローム状・塊(径1~20cm)15%,黒色土・塊(径3~20cm)15%,黄土状(径2~5cm)5%,褐灰色粘質土(7.5YR6/1)状・塊(径3~10cm)8%混入。

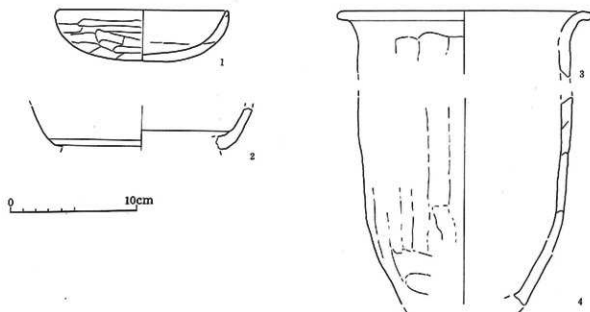
SI-3カマド

- ① 黒褐色土(10YR3/2)ローム状・塊(径1~20cm)15%,黒色土(10YR2/1)状・塊(径3~20cm)15%,黄土状(径2~5cm)5%,褐灰色粘質土(7.5YR6/1)状・塊(径3~10cm)8%混入。
- ② 褐灰色粘質土(7.5YR6/1)やや熱を受けている。
- ③ 黒色土(10YR2/1)ローム状・塊(径1~80cm)40%混入。

第51図 SI-3・掘方・カマド

第13表 SI-3出土遺物観察表

番号	種別・器種	寸法 (mm)	胎土・焼成・色調	形状・器形の特徴	出土位置・備考
1	土師器・坏	口径 134 器高 41	口胎土：酸化灰粒 焼成：良 色調：褐色 (5 YR 6/6)	口辺部横ナデ，体部外面横削り，内面ナデ 口辺部に漆遺存	カマド西脇
2	須恵器・高台碗		胎土：白色粒含みややらい 焼成：良好，硬質 色調：黒色 (N 2/0)	コケロ整形	
3	土師器・甕	口径 (195) 器高 (51)	胎土：雑砂粒 焼成：良 色調：黒褐色 (5 YR 2/1)	口辺部横ナデ，体部縦のへり削り	
4	*		胎土：石英砂，雑砂粒 焼成：良，二次火熱を受ける 色調：褐色 (7.5 YR 4/4)	体部外面縦の削り，下端横の削り，内面ナデ 灰白色粘土付着	カマド3・4・5



第52図 SI-3出土遺物

SI-4 (第53~57・65図，図版18E.~H., 19A.~F.)

調査区西方の南端に位置し，南側70%程が調査区外の為に未掘である。本跡の北西約6mにSI-5，北東約11mにSB-1・2がある。

遺構 確認面はローム漸移層である。平面形は東西長が685cm，現状の南北長は100~200cmで，本来は一辺7m弱の方形であったと思われる。主軸方位は北カマドではN-8°-Eであるが，住居の壁ではN-3°-Eを示しており，住居とカマドで若干のずれが見られる。壁は高さ74~78cmでほぼ直立するが，上位15cm程は一度10cm程外傾して再度立ち上がっていた可能性がある。壁溝は壁下を圍繞し，幅18~30cm，床面からの深さは14~18cmで，断面形はU字形を示す。床面はローム層中で，ほぼ平坦で堅く締まっており，厚さ2~5cmの薄い貼床が施された。床面直上から高さ30cmの間の埋積土中に上屋の構築材と思われる炭化物が多量に遺存しており，焼失家屋と考えられる。柱穴は北東と北西の主柱穴2口のみを確認で，北西のP1は半分以上が調査区外の為に未掘である。P2の平面形は不整楕円形である。規模はP1が径40cm，床面からの現状の深

さが8cm。P2は南北長43cm, 東西長31cm, 床面からの深さは55cmである。また, 貼床を除去したところP3~P10の8口が見つかった。P3は東西を長軸とする楕円形で96×77cm, 貼床下位からの深さ23cm。P4・P5は円形で径が55・65cm, 深さ43・49cm。P6は円形の穴で径27~35cm, 深さ17~28cmである。P7・P8はカマドの東脇, P9・P10は西脇で東西に並んでいる。カマドに付随する施設であり, カマドの改造に伴いこれらの穴も掘り替えられている。堆積土は黒褐色土と黒色土・暗褐色土・褐色土で, 中央部の中層に灰白色粘土の堆積が認められた。カマドは新・旧2ヶ所確認され, 旧カマドは北壁のほぼ中央に重複して施設されていた。遺存状態は悪いが, 両脇に灰白色粘土の袖が僅かに遺存していた。規模は小型の新しい方が最大長80cm, 最大幅78cmで火床部には焼土と炭化物の遺存が見られた。古い方は最大長168cm, 最大幅15cmで焼土が僅かに遺存するのみである。共に灰白色粘土及び赤化した粘土で埋められていた。尚, このカマドは袖部に灰白色粘土が認められたが, 壁に接する部分にも上層材の炭化物が遺存したことから, 或いは焼失時には袖部が切り取られていた可能性が高い。さらに東壁側で調査区南端部にはカマド袖芯として利用されたと判断される土師器甔(23)が倒れて確認されており, 北より東にカマドの造り替えがあった可能性を残す。

遺物は床面より完形品の須恵器蓋, 鉄製鋏先や, 須恵器坏, 高台坏, 高台碗の3点(6・12・13)が入り子状に重なったもの出土している。また, 床面上に皿状の炭化物が遺存し, ここからはほぼ完形の須恵器坏が出土した。

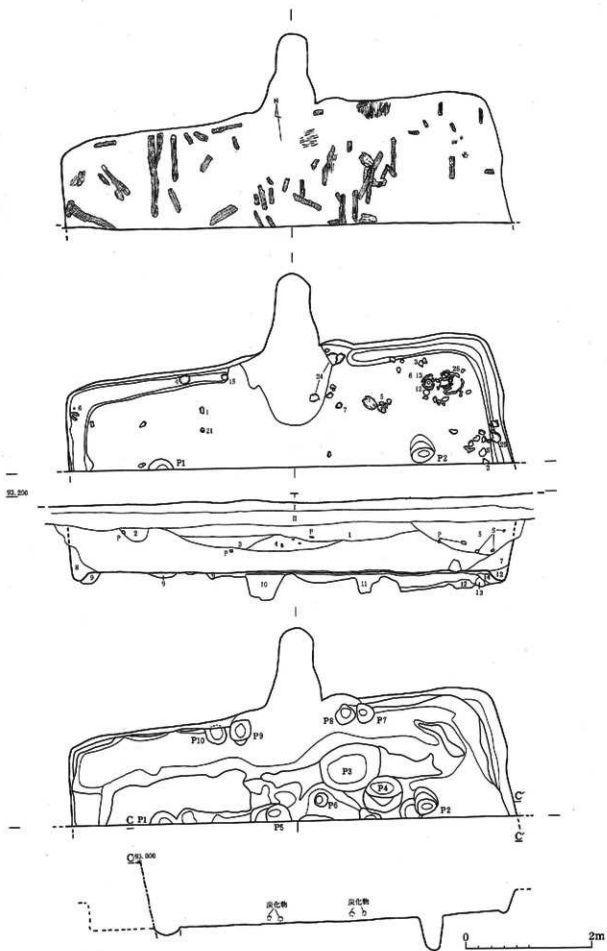
SI-4

- 1 黒褐色土(10YR2/2)ローム状(径1~3cm)3%, 焼土粒(径1~5mm)1%混入。
- 2 黒色土(10YR2/1)ローム状(径1~3cm)2%混入。
- 3 黒褐色土(10YR2/1)ローム状(径10YR3/1)ローム状(径1~30cm)10%混入。
- 4 灰白色粘質土(10YR7/1)黒褐色土(10YR3/1)40%混入, 焼土粒(径1~2mm)10%, 炭化物粒(径10~30mm)2%混入。
- 5 黒褐色土(10YR2/2)ローム状(径1~150mm)15%, 焼土粒(径1~3mm)1%, 硬質土器片を含む。
- 6 黒褐色土(10YR2/2)ローム状(径1~30cm)15%, 灰白色粘質土粒(径1~5mm)を含む。
- 7 黒褐色土(10YR2/2)ローム状(径1~3cm)5%混入。
- 8 黒褐色土(10YR2/2)ローム状(径1~30cm)8%, 炭化物粒を微量含む。
- 9 黒褐色土(10YR2/2)ローム状(径1~60mm)30%, 鉄くず混入。(図録お20参照)
- 10 灰褐色粘質土(10YR4/2)ローム状(径1~50mm)30%, 焼土粒(径1~10mm)5%混入。
- 11 灰白色粘質土(10YR7/1)ローム状(径1~30mm)15%, 焼土粒(径1~10mm)8%, 灰白色粘質土(10YR7/1)ローム状(径1~5mm)5%混入。
- 12 褐色土(10YR3/2)ローム状(径1~50mm)35%混入。
- 13 ローム状(径1~60mm)主体で黒褐色土(10YR2/2)20%混入。
- 14 黒色土(10YR2/1)ローム状(径1~30mm)20%混入。
- 15 暗褐色土(10YR2/2)ローム状(径1~5mm), 炭化物粒, 灰質褐色土粒の混合物, 鉄くず混入。

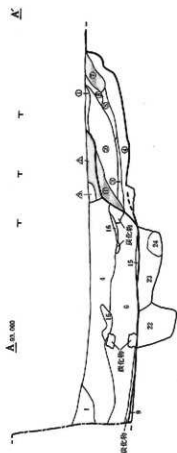
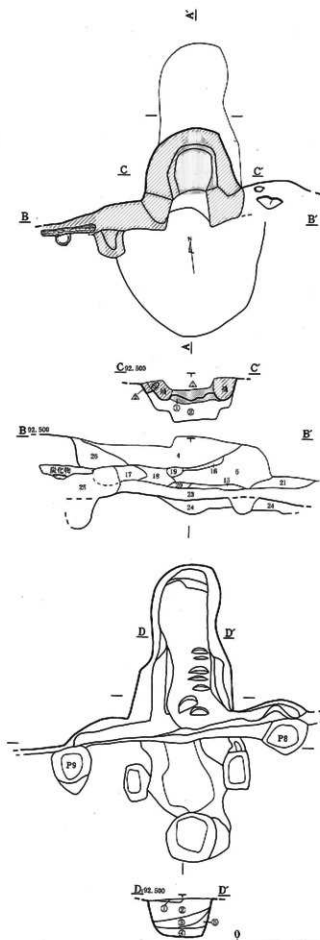
- 16 暗褐色土(10YR2/2)ローム状(径1~5mm)10%, 炭化物粒(径1~5mm)15%混入。
- 17 暗褐色土(10YR2/2)ローム状(径1~5mm)10%, 炭化物粒(径1~5mm)15%混入。
- 18 暗褐色土(10YR2/2)ローム状(径1~3mm), 炭化物粒(径1~3mm), 灰質褐色土粒(径1~3mm)が多少混入。
- 19 褐色土(10YR4/5)炭化物粒(径1~3mm)10%, 灰質褐色粘質土粒(径1~3mm)10%, 焼土粒(径1~3mm)5%混入。
- 20 灰質褐色粘質土(10YR6/2)ローム状(径1~5mm)10%, 炭化物粒(径1~3mm)30%混入。
- 21 暗褐色土(10YR2/2)ローム状(径1~3mm)5%, 焼土粒(径1~3mm)5%, 炭化物粒(径1~3mm)5%混入。
- 22 黒褐色土(10YR2/1)ローム状(径1~10mm)15%, 焼土粒(径1~5mm)2%, 灰質褐色粘質土(10YR6/2)10%混入。
- 23 灰質褐色粘質土(10YR6/2)30%, ローム状(径1~40mm)30%, 黒色土(10YR1/1)炭(径15~30mm)3%, 焼土粒(径1~20mm)5%混入。
- 24 ローム状(径50~60mm)主体で灰質褐色粘質土(10YR6/2), 黒色土(10YR1/1)混入。
- 25 黒色土(10YR2/1)ローム状(径1~20mm)30%, 褐色土(10YR6/1)粘質土粒(径1~5mm)10%混入。
- 26 暗褐色粘質土(10YR7/1)ローム状(径1~15mm)20%, 黒色土(10YR2/1)粒(径1~30mm)20%, 焼土粒(径1~5mm)3%, 炭化物粒(径10~25mm)1%混入。

第14表 SI-4 出土遺物観察表

番号	類別・器種	寸法 (cm)	粘土・焼成・色調	形状・器形の特徴	出土位置・番号
1	土師器坏	口径 138 器高 43	粘土: 微砂粒, 酸化鉄粒 焼成: 良 色調: 褐色 (5 YR 6/6)	口辺部ナデ, 体部外面上位磨り, 下位削り 内面磨き	No 5
2	*	口径 148 器高 46	粘土: 微砂粒, 酸化鉄 焼成: やや不良 色調: 褐色 (5 YR 6/6)	口辺部ナデ, 体部外面ケズリ 内外面磨成	No 22
3	*	口径 173 器高 24	粘土: 酸化鉄粒 焼成: 良 色調: 赤褐色 (2.5 YR 4/5)	口縁部ナデ, 外面ケズリ, 内面磨き 内外面磨成	No 18
4	須恵器・蓋	口径 154 器高 23	粘土: 微砂粒, 2~3mm 礫 焼成: 良好 色調: 灰色 (5 Y 5/1)	口クロ整形, 甲は回転へう崩り 内面に割れる	No 24 転用観
5	須恵器・坏	口径 138 底径 84 器高 40	粘土: 白色粒, 4~5mm 礫含む 焼成: 良好, 硬質 色調: 灰色 (N 4/0)	口クロ整形, 底部へう崩し 底部に「☆」のヘラ記号 体部内外面に一部焼付着	No 1



第53図 SI-4・掘方



北カマド 1 (断)

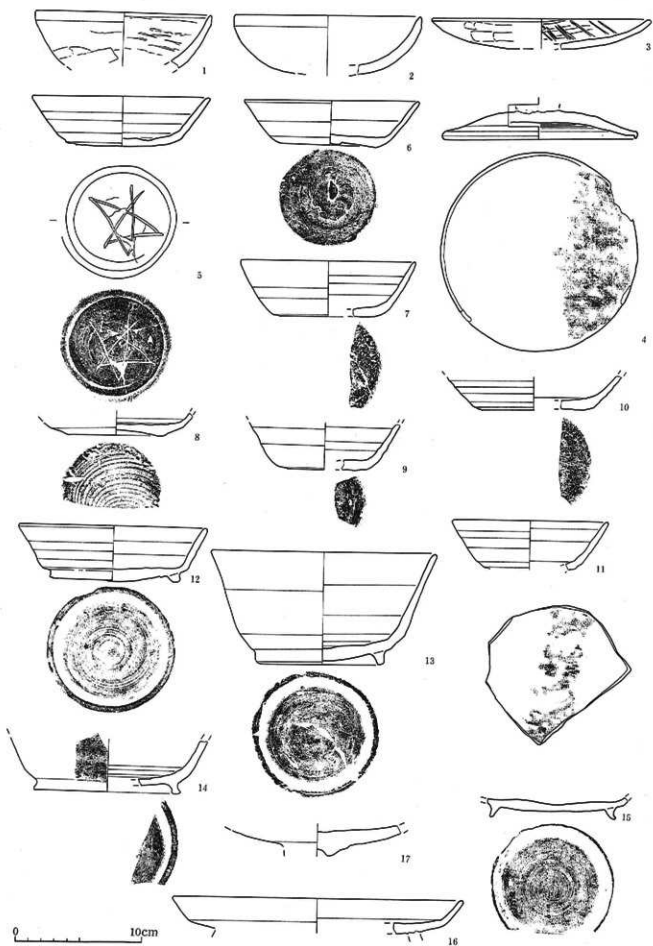
- △ 褐色土 (2.5YR6/6) 表面は熱を受けて酸化している。(火痕)
 - ▲ 灰褐色土 (10YR4/3) ローム粒 (径1~3mm) 3%, 焼土粒 (径1~3mm) 1%, 炭化物粒 (径1~3mm) 1% 混入。
 - △ 明黄色土 (10YR8/8) 焼土粒 (径1~3mm) 15%, 炭化物粒 (径1~3mm) 15%, ローム粒・塊 (径1~15mm) 15% 混入。
- 総じて各層とも層まりが強く、意識して埋められた可能性が高い。北カマドの軸材は灰褐色粘質土 (10YR6/2) である。

SI-4 北カマド 2 (旧)

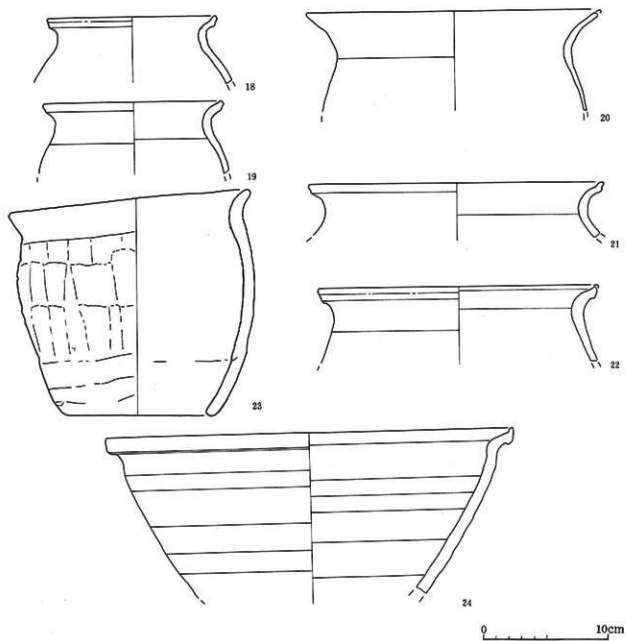
- ① 灰黄褐色粘質土 (10YR6/2) 焼土 (5YR6/6) 塊 (径2~30mm) 25%, 黒色土 (10YR1/1) 粒 (径1~8mm) 5% 混入。
- ② ローム粒・塊 (径1~100mm) が主体。灰褐色土 (10YR6/2) 粒・塊 (径1~30mm) 30%, 焼土粒 (径1~10mm) 3%, 黒色土 (10YR1/1) 粒・小塊 (径1~15mm) 3% 混入。
- ③ 黒褐色土 (10YR3/2) ローム粒・小塊 (径1~20mm) 30% 混入。
- ④ 黒色土 (10YR1/1) ローム粒・塊 (径1~30mm) 40% 混入。
- ⑤ 褐色土 (10YR6/1) 焼土粒 (径1~40mm) ローム粒 (径1~10mm) 15% 混入。
- ⑥ 灰褐色粘質土 (10YR6/2) ローム粒・小塊 (径1~10mm) 15% 混入。
- ⑦ 赤褐色土 (5YR4/6) 焼土。
- ⑧ 灰白色粘質土 (10YR7/1) ローム粒 (径1~3mm) 8% 混入。

第54図 SI-4 北カマド

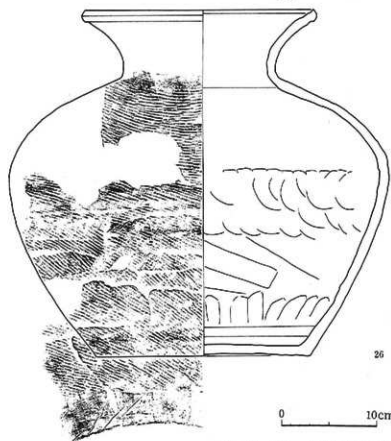
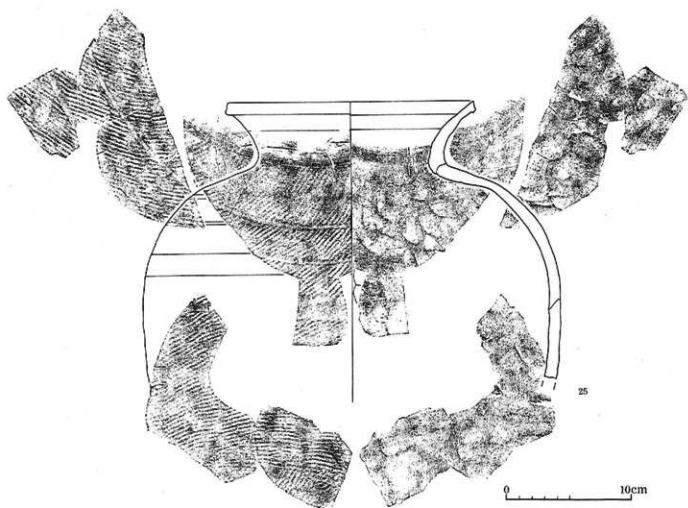
6	須恵器・坏	口径 底径 器高	137 78 38	胎土：白色粒，3～4mm 礫 焼成：良好，硬質 色調：暗青灰色 (5 B 3/L)	ロクロ整形，底部へラ返し， 内面摺れる	12と13の間
7	+	口径 底径 器高	(138) 85 45	胎土：長石粒 焼成：やや不良 色調：オリーブ灰色 (2.5 GY 5/L)	ロクロ整形	No 12
8	+	底径 器高	74 (19)	胎土：白色粒，石英砂 焼成：良 色調：灰色 (N 5/0)	ロクロ整形，底部余きり 内底面が摺れる	床直 2
9	+	底径 器高	(66) 38	胎土：白色粒，石英砂，酸化鉄，やや 粗い 焼成：やや不良 色調：灰色 (7.5 Y 4/L)	ロクロ整形	床直
10	+	底径 器高	(93) 27	胎土：白色粒10%，2～3mm 礫 焼成：良好 色調：暗灰色 (N 3/0)	ロクロ整形，底部へラ返し 外底面にへラ記号	
11	+	口径 器高	(123) 39	胎土：白色粒20%，2～3mm 礫 焼成：良好 色調：灰色 (N 4/0)	ロクロ整形	
12	須恵器・高台坏	口径 底径 器高	147 103 44	胎土：雜砂粒 焼成：良好，硬質 色調：黒色 (N 2/0)	ロクロ整形，底部回転へラ削り，付け高台	6の上
13	+	口径 底径 器高	178 95 92	胎土：雜砂粒，2～5mm 礫 焼成：良好 色調：灰白色 (10 YR 8/L)	ロクロ整形，底部へラ削り，高台貼り付け 外底面に「=」のへラ記号 外面部付着	No 20 6の下
14	+	底径 器高	(116) 43	胎土：白色粒 焼成：良 色調：灰色 (N 4.5/0)	ロクロ整形，付け高台 体部外面に「 」のへラ記号？	
15	+	底径 器高	98 18	胎土：白色粒 焼成：良好 色調：灰色 (N 5/0)	ロクロ整形，底部回転へラ削り 内外面に湯気，内面摺れる	No 6 転用硯
16	須恵器・盤	口径 器高	(228) 27	胎土：白色粒，雜砂粒3mmの礫 焼成：良好 色調：灰色 (N 6/0)	ロクロ整形，裏面を欠く（接合のための二 本の沈線が認められる）	
17	須恵器・高坏			胎土：雲母，1～2mmの黒色粒 焼成：やや不良 色調：灰白色 (10 YR 8/L)	ロクロ整形，臀部に透孔 内外面牽絨	
18	土師器・甕	口径 器高	(133) 53	胎土：金雲母 焼成：良 色調：黒褐色 (7.5 YR 3/2)	口辺部横ナデ	
19	+	口径 器高	(140) 57	胎土：金雲母，石英砂 焼成：良 色調：褐色 (7.5 YR 4/3)	口辺部横ナデ	
20	+	口径 器高	(234) 82	胎土：石英，細砂粒 焼成：良 色調：にぶい褐色 (7.5 YR 5/4)	口辺部横ナデ，体部外面横削り，内面へラ ナデ	
21	+	口径 器高	(234) 45	胎土：石英砂，粗い 焼成：良 色調：褐色 (7.5 YR 4/4)	口辺部横ナデ	No 4
22	+	口径 器高	(223) 60	胎土：金雲母，1～2mm 礫 焼成：良 色調：明赤褐色 (5 YR 5/6)	口辺部横ナデ，体部内面へラナデ	
23	土師器・甕	口径 底径 器高	187 115 180	胎土：雜砂粒，8mmの礫 焼成：良，二次火熱を受ける 色調：暗赤褐色 (2.5 YR 3/4)	口辺部ナデ，体部外面横削り，内面横の へラナデ 焼土付着	
24	須恵器・鉢	口径 器高	(323) 131	胎土：長石粒，8mm 礫 焼成：良好 色調：黄灰色 (2.5 Y 4.5/L)	ロクロ整形	No 8
25	須恵器・甕	口径 器高	(196) 223	胎土：白色粒，4～5mm 礫 焼成：良 色調：灰色 (7.5 Y 4/L)	体部外面斜め平行叩き 口辺部内面が摺れる	塩土
26	+	口径 底径 器高	(240) 224 364	胎土：金雲母，細砂粒 焼成：良，軟質 色調：黒色 (10 YR 1.7/1)	口辺部ロクロナデ，体部外面上端横，中位 斜めの平行叩き，下端削り，内面中位出で 具痕，下端ナデ 二次火熱を受ける	



第55圖 SI-4 出土遺物 (1)



第56图 SI-4 出土器物 (2)



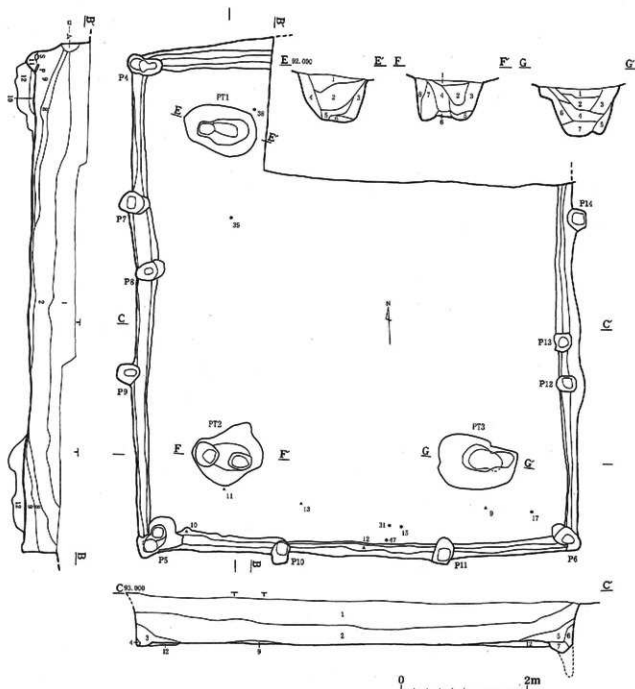
第57图 S I - 4 出土遗物 (3)

SI-5 (第58~62・65図, 図版19G・H., 20A~E.)

調査区北西隅に位置し, カマドを含む北東部の約20%が調査区外に延びる。

遺構 確認面はローム漸移層。平面形は南北にやや長い方形。規模は東西長708cm, 南北長812cmで今次調査区中最大の住居である。主軸方位は壁から類推するとN-10°-Eである。壁高は48~85cmで, ほぼ垂直に立ち上がり床面上35~53cmで一部やや外傾する。壁溝は壁下を圍繞し, 幅14~30cm, 床面からの深さ5~15cmで, 断面形は逆台形である。床面はローム層中にあり, 多少の凹凸はあるもののほぼ平坦で堅く締まっていた。貼床は厚さ2~6cmで壁際ほど厚く中央に向かって薄くなり, 中央部は地山で貼床が施されていないところもあった。柱穴は調査区外の北東を除く主柱穴3 (P1~P3) と, 壁或いは壁溝と重複する補助壁柱穴 (P4~P14) の計14口を確認した。P1~P3は上面形が楕円形であるが, 底面が東西に2つづつ並んで見られ, 建替え拡張の痕跡と判断される。3口とも東西を長軸として, P1が120×73cm, 床面からの深さ79cm。P2が112×100cm, 深さ75cm。P3が127×84cm, 深さ80cmで壁は緩く外傾している。P4~P6は住居の隅に配された補助壁柱穴で, この3口も主柱穴同様に建替えの痕跡が見られる。平面形は隅丸方形を2つ繋げたような不整長方形である。それぞれ壁穴の対角線上が長軸で, 放射状に移動したと考えられる。P4が55×25cm, 確認面からの深さ117cm。P5が77×60cm, 深さ117cm。P6は94×57cm, 深さ101cmであった。壁は緩く外傾しているが, P5の外側のみ内傾している。P7~P14も補助壁柱穴で, P7~P9は西壁, P10・P11は南壁, P12~P14は東壁にそれぞれ施設されている。平面形は隅丸方形で長軸28~49cm, 短軸26~34cm, 確認面からの深さ65~116cm。壁は緩く外傾しているが, P10の内側のみ内傾している。また, 貼床下よりP15~P19の5口が確認された。P15~P17は南壁際のほぼ中央に位置しており, P17は壁と接して, P15・P16はそれより70cm程内側に80cmの距離を置いて東西に並んでいる。P15・P16は出入り口の施設, P17はP8・P13などとともに古い壁柱穴と推察される。平面形は隅丸方形で規模は25×20cm, 深さはP15・P16が床面から7~13cm, P17が確認面から79cmで, 壁は緩く外傾している。P18は東西を長軸とする楕円形で, 225×144cm, 床面からの深さ48cm。P19は東西を長軸とする楕円形で80×54cm, 床面からの深さ13cmである。埋積土は黒褐色土と暗褐色土である。上層からは多数の土器片が出土し, 下層には焼土と炭化物が微量含まれていた。カマドは未確認だが, 北側より住居の中央付近まで床面にカマド材の流出と思われる, 焼けて赤化した粘土が薄く遺存していた。

遺物は埋積土中より多量に出土したが, 本跡に伴うと思われるものはカマド西脇の床面より略完形の須恵器高台坏(30)と坏(6)が出土しており, 他には鉄器が6点(第65図)出土した程度である。しかし, カマドの周辺が未調査であり, さらに多くの遺物が遺存すると推定される。



S I - 5

- 1 黒褐色土(10YR2/3)ローム粒・塊(径1~8cm)10%,焼土粒(径1~3mm)1%,炭化物粒(径1~3mm)1%混入。
- 2 黒褐色土(10YR2/3)ローム粒・塊(径1~8cm)25%,焼土粒(径1~3mm)1%,炭化物粒(径1~3mm)1%混入。
- 3 黒褐色土(10YR2/3)ローム粒・塊(径1~10cm)20%,焼土粒(径1~3mm)1%,炭化物粒(径1~3mm)1%混入。
- 4 暗褐色土(10YR3/4)ローム粒・塊(径1~9cm)5%混入。
- 5 暗褐色土(10YR3/4)と黒褐色土(10YR2/2)の混合土。比率は5:5,ローム粒(径1~3mm)5%混入。
- 6 黒褐色土(10YR2/3)ローム粒・塊(径1~20cm)10%混入。
- 7 5ヶ所程のロームブロックが多数に見えている。
- 8 黒褐色土(10YR2/3)ローム粒・塊(径1~10cm)20%,黒色土を伴うロームブロックが局状に含まれる。
- 9 黒褐色土(10YR2/3)ローム粒・塊(径1~10cm)7%,焼土粒(径1~3mm)1%混入。
- 10 暗褐色土(10YR3/4)ローム粒(径1~2cm)3%,焼土粒(径1~3mm)1%,炭化物粒(径1~3mm)1%,遺物や炭色粉質土が混入していた。
- 11 ローム粒・塊(径1~5cm)と黒褐色土(10YR2/3)の混合土。比率は6:4。
- 12 ローム粒・塊(径1~20cm)とロームブロックが主体,黒褐色土(10YR2/3)20%混入。

S I - 5

P T - 1

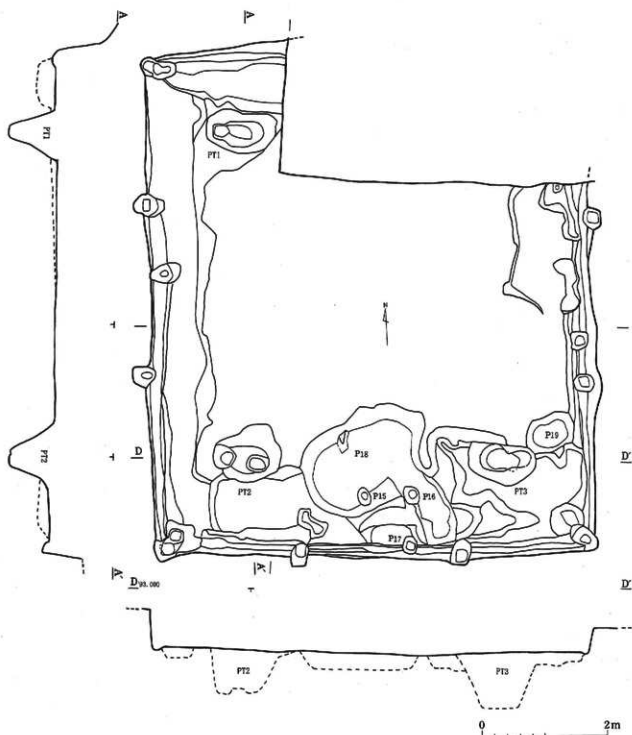
- 1 黒褐色土(10YR2/3)ローム粒・小塊(径1~30cm)20%混入。
- 2 黒褐色土(10YR2/3)ローム粒・小塊(径1~5cm)8%混入。
- 3 灰黄褐色土(10YR6/2)とローム粒・塊(径1~80cm)の混合土。
- 4 暗灰色土(10Y6/6(1))とローム粒・塊(径1~50cm)の混合土。
- 5 暗褐色土(10YR3/4)ローム粒・塊(径1~30cm)15%混入。
- 6 黄褐色土(10YR5/6)と陶質土の混合土,硬く締まっている。

S I - 5

P T - 2

- 1 黒褐色土(10YR2/3)ローム粒(径1~5cm)15%混入。
- 2 黒褐色土(10YR2/3)ローム粒(径1~5cm)8%混入。
- 3 黒褐色土(10YR2/3)とローム粒・塊(径1~30cm)の混合土。
- 4 黒褐色土(10YR2/3)ローム粒・小塊(径1~30cm)30%混入。
- 5 ローム粒・塊(径1~40cm)が主体,灰黄褐色土(10YR6/2)30%混入。
- 6 ローム粒・塊(径10~30cm)が主体,灰黄褐色土(10YR6/2)30%混入。
- 7 黒褐色土(10YR2/3)ローム粒(径1~6cm)25%混入。
- 8 黄褐色土(10YR5/6)ローム粒・塊(径1~30cm)と灰黄褐色土(10YR6/2)が30%混入。

第58図 S I - 5



SI-5

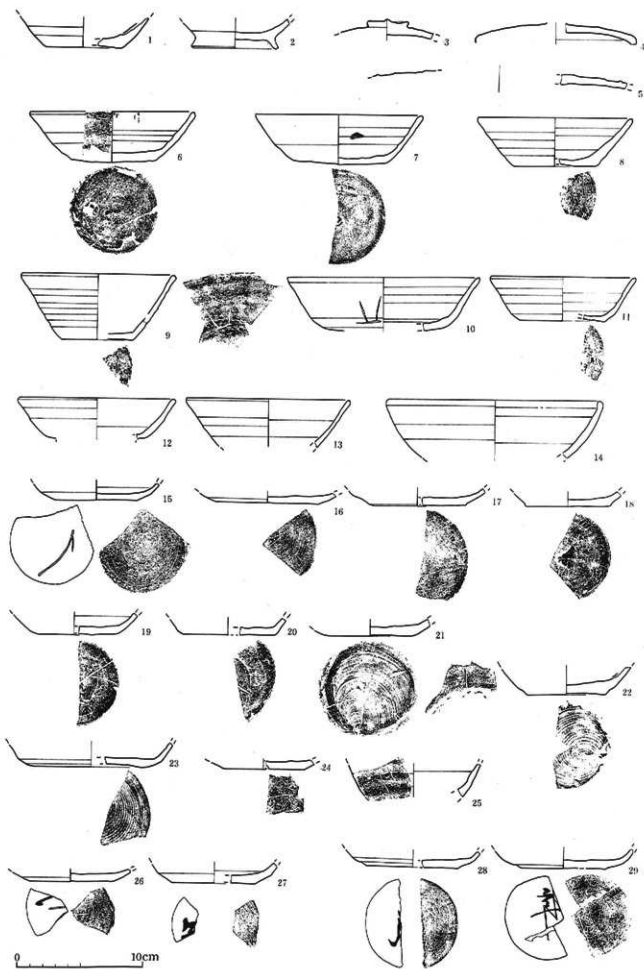
PT-3

- 1 黒褐色土(10YR2/3)ローム殻(径1-8cm)25%混入。
- 2 黒褐色土(10YR2/3)ローム殻(径1-3cm)8%混入。
- 3 黒褐色土(10YR2/3)ローム殻(径1-10cm)30%混入。
- 4 灰青褐色土(10YR5/2)ローム殻-小塊(径2-40cm)20%、ローム塊(径50cm)1個混入。
- 5 灰青褐色土(10YR5/2)ローム殻-塊(径5-30cm)35%混入。
- 6 黒褐色土(10YR2/3)とローム殻-小塊(径1-30cm)の混合土。
- 7 黒灰色(10YR6/1)泥くねくねしている。

第59図 SI-5掘方

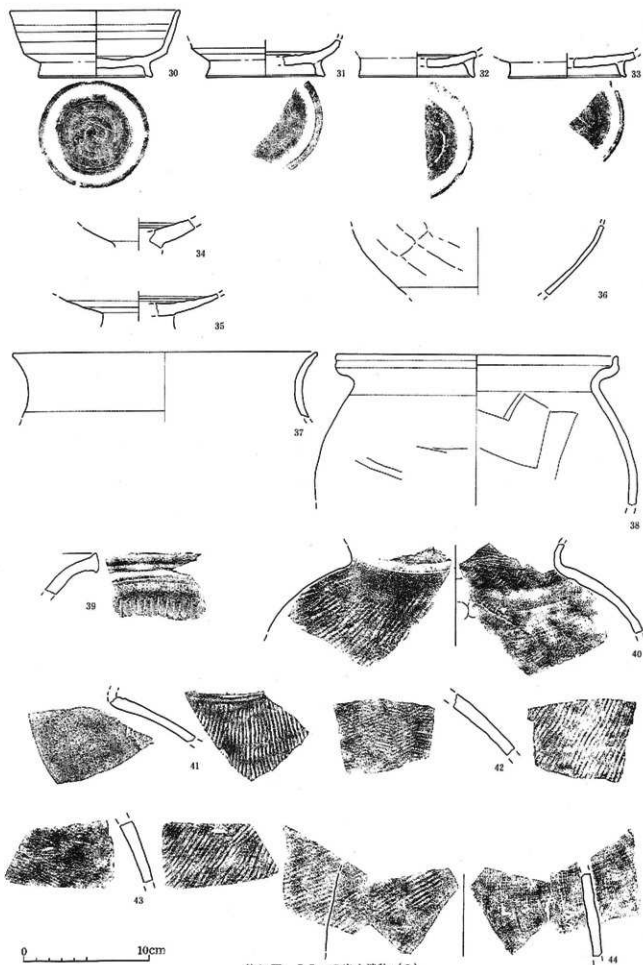
第15表 S I - 5 出土遺物観察表

番号	種別・器種	寸法 (mm)	胎土・焼成・色調	形状・器形の特徴	出土位置・備考
1	土師器・坏	口径 器高 (58) [24]	胎土：微砂粒，酸化鉄 焼成：良 色調：にぶい褐色 (7.5 YR 5/4)	ロクロ整形，底部糸切り，内面磨き後黒色 処理	1区
2	土師器・高台坏	底径 器高 68 [24]	胎土：酸化鉄 焼成：やや不良 色調：褐色 (7.5 YR 6/5)	底部糸切り，付け高台，内面磨き	西側
3	須恵器・蓋		胎土：白色粒 焼成：良好 色調：暗灰色 (N 3/0)	ロクロ整形	
4	*		胎土：細砂粒 焼成：良好 色調：灰色 (5 Y 6/1)	ロクロ整形	
5	*		胎土：細砂粒 焼成：良好 色調：灰色 (N 5/0)	ロクロ整形，甲中央回転ヘラ削り 甲一部除灰 内面に「一」ヘラ記号？	6区
6	須恵器・坏	口径 底径 器高 129 66 41	胎土：白色粒，5mm 礫 焼成：良 色調：灰色 (7.5 Y 4/1)	ロクロ整形，底部ヘラ起し 内面に漆付着 体部外面に「Z」のヘラ記号	1・4区
7	*	口径 底径 器高 132 75 40	胎土：白色粒，1-2mm 礫 焼成：良好 色調：灰色 (7.5 Y 5/1)	ロクロ整形，底部ヘラ起し 内面に油痕	北西
8	*	口径 底径 器高 (122) (65) 39	胎土：細砂粒 焼成：良 色調：灰色 (5 Y 5/1)	ロクロ整形，底部ヘラ起し	1区
9	*	口径 底径 器高 (119) (56) 53	胎土：金雲母 焼成：やや不良，軟質 色調：灰色 (N 4.5/0)	ロクロ整形，底部ヘラ削り，体部外面下端 ヘラ削り	1区
10	*	口径 器高 (152) (42)	胎土：白色粒 焼成：良 色調：暗オリーブ灰色 (2.5 GY 4/1)	ロクロ整形 体部外面に「八」ヘラ記号	南床面，5区
11	*	口径 底径 器高 (115) (69) 35	胎土：細砂粒 焼成：良 色調：灰色 (5 Y 5.5/1)	ロクロ整形，底部ヘラ起し	2区
12	*	口径 器高 (122) [30]	胎土：細砂粒 焼成：良好 色調：灰色 (5 Y 6/1)	ロクロ整形	5区
13	*	口径 器高 (129) [38]	胎土：細砂粒，2mm の礫 焼成：良 色調：灰色 (10 Y 4/1)	ロクロ整形	NW
14	*	口径 器高 (170) [46]	胎土：白色粒 焼成：良 色調：灰オリーブ色 (5 Y 6/2)	ロクロ整形	6区 鉄鉢形か
15	*	底径 器高 (66) [13]	胎土：細砂粒，3mm の長石 焼成：良 色調：灰色 (7.5 Y 5/1)	ロクロ整形，底部回転ヘラ削り 底部外面に「一」のヘラ記号	S-7
16	*	底径 器高 (81) [9]	胎土：微砂粒，黒色粒 焼成：良 色調：灰色 (5 Y 5/1)	ロクロ整形，底部回転ヘラ削り 底部外面に「Z」のヘラ記号	3区
17	*	底径 器高 (78) [14]	胎土：微砂粒，2-3mm 礫 焼成：良 色調：灰色 (N 4/0)	ロクロ整形，底部ヘラ起し 底部外面に「X」のヘラ記号	S-9，4区
18	*	底径 器高 (70) [13]	胎土：微砂粒，2-3mm 礫 焼成：良好 色調：暗オリーブ灰色 (2.5 GY 4/1)	ロクロ整形，底部ヘラ起し 底部外面に「一」のヘラ記号	SE
19	*	底径 器高 (63) [18]	胎土：細砂粒 焼成：良 色調：灰色 (10 Y 4/1)	ロクロ整形，底部ヘラ起し 底部外面に「X」のヘラ記号	
20	*	底径 器高 (72) [14]	胎土：微砂粒 焼成：良好 色調：灰色 (10 Y 6/1)	ロクロ整形，底部ヘラ起し 底部外面に「一」のヘラ記号	4区
21	*	底径 器高 67 [14]	胎土：微砂粒，5mm 礫 焼成：やや不良，軟質 色調：灰白色 (5 Y 7/1)	ロクロ整形，底部糸切り	3・5区

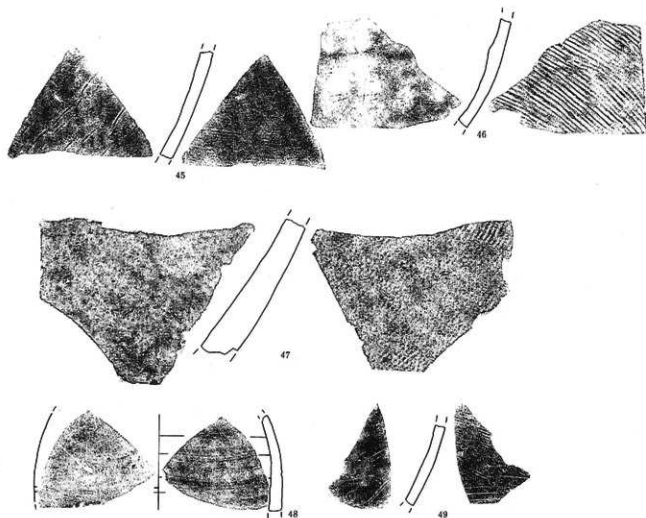


第60圖 SI-5出土遺物(1)

22	須恵器・坏	底部器高	62 [22]	胎土：細砂粒 焼成：良 色調：黒褐色 (2.5 Y 3/1)	ロクロ整形、底部糸切り	1・5区
23	*	底径器高	(94) [20]	胎土：白色粒 焼成：良 色調：オリーブ灰色 (2.5 GY 5/1)	ロクロ整形、底部糸切り	3区
24	*	底径器高	(64) [8]	胎土：微砂粒、3～4mmの糠 焼成：やや不良 色調：灰黄色 (2.5 Y 7/2)	ロクロ整形、底部ヘラ起し 底部外面に「=」のヘラ記号	5区
25	*			胎土：微砂粒 焼成：良 色調：灰色 (7.5 Y 5/1)	ロクロ整形 体部外面に「+」のヘラ記号	6区
26	*	底径器高	(65) [10]	胎土：微砂粒、黒色粒 焼成：良 色調：灰色 (5 Y 6/1)	ロクロ整形、底部回転ヘラ削り 外面面に「Z」のヘラ記号、「?」墨書	1区
27	*	底径器高	(66) [18]	胎土：白色粒、やや粗い 焼成：良好 色調：灰オリーブ色 (5 Y 6/2)	ロクロ整形、底部糸切り 外面面に「?」墨書	5区
28	*	底径器高	(72) [14]	胎土：石英砂 焼成：やや不良 色調：灰白色 (2.5 Y 8/2)	ロクロ整形、底部回転ヘラ削り 外面面に「?」墨書	3区
29	*	底径器高	(68) [17]	胎土：白色粒 焼成：良好 色調：灰色 (5 Y 6/1)	ロクロ整形、底部回転ヘラ削り 外面面に「Z」のヘラ記号、「?」墨書	5・6区
30	須恵器・高台坏	口径器高	(132) [29]	胎土：白色粒 焼成：良好 色調：灰色 (N 4/0)	ロクロ整形、底部回転ヘラ削り、付け高台 外面面に「-」ヘラ記号 内面漆付着	北西コマ西墓
31	*	底径器高	(94) [29]	胎土：白色粒、2mm 糠 焼成：良好 色調：暗オリーブ灰色 (2.5 GY 4/1)	ロクロ整形、付け高台 内面面が削れる	S-5
32	*	底径器高	(91) [21]	胎土：細砂粒、2～3mmの糠 焼成：良好 色調：暗灰色 (N 3/0)	ロクロ整形、付け高台	
33	*	底径器高	93 [20]	胎土：細砂粒 焼成：良好 色調：暗青灰色 (5 B 3/1)	ロクロ整形、付け高台	
34	須恵器・高坏			胎土：雲母 焼成：良 色調：灰色 (N 4/0)	ロクロ整形	
35	*			胎土：白色粒、5mm 糠 焼成：良 色調：灰褐色 (7.5 YR 4/2)	ロクロ整形、脚部を欠損するが透孔が認められる。 坏部内面に降灰	S-2
36	土師器・台付罍			胎土：石英、雲母 焼成：良 色調：明赤褐色 (5 YR 5/6)	体部外面斜め削り、体部下端ナデ	
37	土師器・甕	口径器高	(240) [52]	胎土：微砂粒、康化鉄 焼成：良 色調：にぶい褐色 (7.5 YR 5/4)	口辺部ナデ	2区
38	*	口径器高	(224) [118]	胎土：石英砂、金雲母 焼成：良 色調：にぶい褐色 (7.5 YR 6/4)	口辺ナデ、体部内面傾ヘラナデ	H-1
39	須恵器・甕			胎土：細砂粒、やや粗い 焼成：やや不良 色調：灰白色 (N 8/0)	ロクロ整形、口辺部最上段に7本歯の波状文	5区
40	*			胎土：白色粒、3～4mm 糠 焼成：良、摩質 色調：灰色 (N 4/0)	体部外面斜め叩き	5区
41	*			胎土：石英砂 焼成：良好 色調：褐灰色 (10 YR 4/1)	外面観平行叩き	6区
42	*			胎土：石英粒、粗い 焼成：良 色調：暗赤灰色 (5 R 3/1)	外面斜め平行叩き、内面山形の当て具痕	5区
43	*			胎土：微砂粒 焼成：良好、硬質 色調：暗青灰色 (5 B 4/1)	外面斜め平行叩き、内面板状の当て具痕	NE



第61图 SI-5出土遺物(2)



第62図 S I - 5 出土遺物 (3)

0 10cm

44	須恵器・坏	胎土：石英砂，3～5mm 礫 焼成：やや不良，軟質 色調：暗灰色 (N 3/0)	外面斜め平行叩き，内面縦のヘラナデ	2区
45	*	胎土：白色粒，細砂粒 焼成：良好，硬質 色調：暗灰色 (N 3/0)	外面横の平行叩き，内面筋を持つ板状の当て具痕	5区
46	*	胎土：白色粒 焼成：良 色調：灰白色 (2.5 Y 7/1)	外面斜め平行叩き，内面二本の筋のある当て具痕	1区
47	*	胎土：石英，長石，砂粒 焼成：良好，硬質 色調：青黒色 (5 B 1.7/1)	外面格子目叩き	S-4
48	灰釉陶器・壺	胎土：長石粒，黒色粒 焼成：良好 色調：灰白色 (2.5 Y 7/1)	ロクロ壺形 外面に明緑灰色 (7.5 GY 8/1) の釉面	1区
49	*	胎土：黒色粒 焼成：良好 色調：紫灰色 (5 P 6/1)	外面斜め平行叩き，下端ロクロ削り，内面斜めヘラナデ	2区

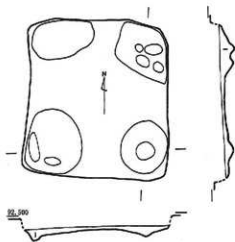
S I - 6 (第63図，図版20F.)

調査区のやや西寄りに位置する。本跡の東約13mにS I - 3，南東約6.5mにS B - 3がある。

遺構 本来の確認面はローム漸移層であったと思われるが，工事の削平によりローム層での確認となった。床面の痕跡から平面形は東西長222cm，南北長250cmの隅丸方形で，住居跡としては今次調査区で最も小さい遺構である。カマドは痕跡すら見られず，当初より設けられなかった可能性が高い。主軸方位は壁の痕跡からN-2°-Wと推定される。床面・壁・壁溝は，削平により消失している。底面の四隅に深さ13～20cm程の掘り

込みが認められた。堅穴を掘り込む際に設けられた痕跡と判断され、埋積土は黒褐色土とロームの混合土である。

遺物は出土しなかった。



第63図 SI-6

SI-6

1 黒褐色土(10YR2/3)とローム粒・塊(径5~30cm)の混合土。

SI-7

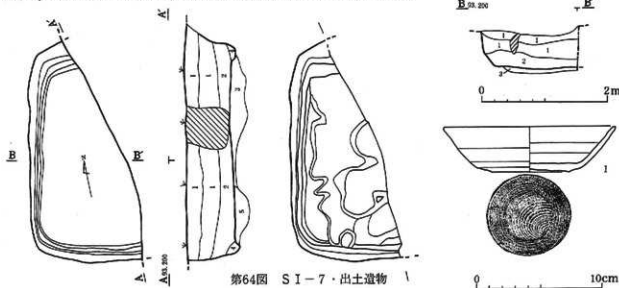
- 1 黒褐色土(10YR3/4)ローム粒(径1~5cm)3%、炭化物粒(径3~5cm)1%混入。
- 2 黒褐色土(10YR3/4)ローム粒・小塊(径1~30cm)15%混入。
- 3 暗褐色土(10YR3/6)ローム粒・塊(径1~40cm)20%、黒褐色土(10YR3/4)塊(径10~40cm)15%混入。炭化物と思われるが、炭化面は半割で多い。
- 4 暗褐色土(10YR3/4)ローム粒(径1~8cm)20%混入。
- 5 ローム粒・塊(径1~150cm)が主体、黒褐色土(10YR3/1)塊(径1~30cm)10%、暗褐色土(10YR3/4)30%混入。(灰土)

SI-7 (第64図, 図版20G・H.)

調査区北東に位置し、東側60%が調査区外の為に未掘である。本跡の付近に住居は確認できず、南西約56mにあるSI-1が最も近い。しかし、両者の間には同時代(古代)の埋積土をもつ小穴や土坑なども見られたことから、或いは存在した住居跡が削平された可能性もある。

遺構 確認面はローム漸移層。平面形は現状の東西長170cm, 南北長340cm, 平面形は一辺340cm程の方形と推定される。カマドは調査区外の為に未確認だが壁から推定される主軸方位はN-10°-Eである。壁高は45~73cmで、ほぼ直立している。壁溝は幅16~25cm, 床面からの深さ5~9cmで、壁下を圍繞している。床面はほぼ平坦で、中央部と南側の一部を除いて4~5cmの貼床が施されていた。床面には深さ25~30cmの掘り込みがある。柱穴は確認されなかった。埋積土は3層に大別され、上層より暗褐色土、黒褐色土、黒色土で自然埋没と思われる。

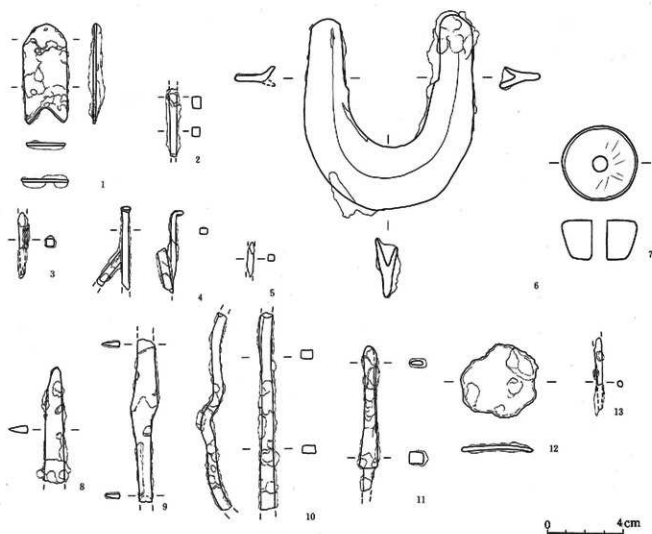
遺物は、やや南寄りの床面で、ほぼ完形の須恵器の坏が出土している。



第64図 SI-7・出土遺物

第16表 SI-7 出土遺物観察表

番号	類別・器種	寸法 (mm)	胎土・焼成・色調	整形・器形の特徴	出土位置・備考
1	須恵器・坏	口径 136 底径 62 器高 36	胎土：白色粒, 1~2mm 細 焼成：良好 色調：灰色 (N40)	ロクロ整形, 底部糸きり後外周へう割り	床直



第65図 金属・石製品

第17表 金属・石製品観察表

No	種別	出土位置	遺存度	大きさ (mm)	形状の特徴	備考
1	不明	S I - 2 埋土	完形?	53 × 22 × 1.5	板状で形状は無蓋鉄鏝と類似する。	
2	釘?	S I - 2 床面	50%?	35 以上 × 5 × 6	断面は長方形	
3	釘?	S I - 4 北東埋土	50%?	33 以上 × 4 × 4	断面は正方形, 先端部片	全体に木質が付着。
4	釘	S I - 4 北東埋土	70%	上位 43 以上 × 4 × 3 下位 22 以上 × 4 × 3	2 点が付着。断面は長方形, 一方は 4mm 程折り曲げ痕をつくる。	
5	釘?	S I - 4 北東埋土	小片上・下端 部欠損	18 以上 × 3 × 3	断面は正方形。	
6	鉄・鋼先	S I - 4 埋土	完形	長さ 104, 幅 89, 厚さ 5	U 字型。鋭利部は V 字型で、上面面傷がやや深い。	
7	紡錘車	S I - 4 床面	完形	上径 40, 下径 27, 高さ 21, 孔径 8	上面に一部放射状の線刻が見られるが不鮮明。	
8	刀子	S I - 5 埋土	40%	60 以上 × 11 × 4 (刃部長 60 以上)	刃部の中程～切先が遺存。	
9	刀子	S I - 5 床面	70%	85 以上 × 14 × 3 (刃部長 37 以上)	面は不明瞭な管筒, 刃部の研ぎ減りが目立つ。茎と刃部の先端を欠失。	茎に木質の痕跡
10	不明	S I - 5 床面	-	105 以上 × 7 × 4	断面は長方形, 全体が屈曲で, 中央部は外に向って三角の屈曲を持つ。	
11	鉄鏝?	S I - 5 床面	70%	77 以上 × 7 × 6 鏝身長 20, 握柄長 45, 茎部長 12 以上	握柄は, 断面が長方形。面は不明瞭, 茎とは大きさが大きく異なる。	
12	不明	S I - 5 床面	完形	40 × 39 × 2	不整形の板状	

(2) 掘立柱建物跡

今次調査では調査区全域に多数の小穴が認められたが建物跡として捉えられたのは僅かに3棟である。SB-1・2は重複し、南側は工事で削平され、北側は調査区外に延びている。SB-3も南辺以外は北側調査区に延びていて建物の規模・形状を知り得ることはできなかった。

SB-1 (第66図, 図版21A.~C.)

調査区北西部北端に位置し、SB-2と重複する。南側4口のみ確認であり、北側は調査区外に延びていると推定される。本跡の東約18mにSB-3、西約19mにはSI-5が存在する。

遺構 確認状況からは1×1間或いは1×1間以上の南北棟かは判断しがたいが、東西1間で柱間寸法は510cm、南北は西辺で1間215cmと東西長が著しく長いことから、南北棟でさらに北に延びてゆくものと推定される。柱列の方位はN-2°-Wである。柱掘方は平面形が推定径42~62cmの円形或いは隅丸方形であったと推察されるが、4口ともにSB-2に切られていて明確ではない。確認面からの深さは42~50cmで、柱痕跡は認められなかった。埋積土はローム粒を少量含むやや締まりの弱い暗褐色土で、南東隅の1口のみ良く締まっていた。

遺物は土師器小片が柱掘方内より出土。

SB-2 (第66図, 図版21A.~C.)

調査区北西部に位置し、SB-1と重複する。南側5口のみ確認で北側は調査区外に延びていると推察されるが、南西隅に有るべき1口が欠けており正確な規模は判断し難い。本跡の東約18mにSB-3、西約19mにはSB-5がある。

遺構 現況からは1×2間或いは1×2間以上の南北棟と推察される。東西1間で柱間寸法は南西隅の1口が欠けている為、南辺より1列北寄りで540cm、南北は東辺で2間430cm、柱間寸法は南から190+240cmである。桁行の方位はほぼ真北である。柱掘方は北東の1口のみが南北を長軸として、他は全て東西を長軸とする楕円形で長軸60~80cm、短軸50~72cm、確認面からの深さ34~66cmで北東の1口のみ柱痕跡が認められた。埋積土は黒褐色土とローム粒・塊の混合土で、焼土と炭化物を含んでいた。柱痕跡部はローム粒の少ない黒褐色土で、焼土や粘土が微量含まれていた。

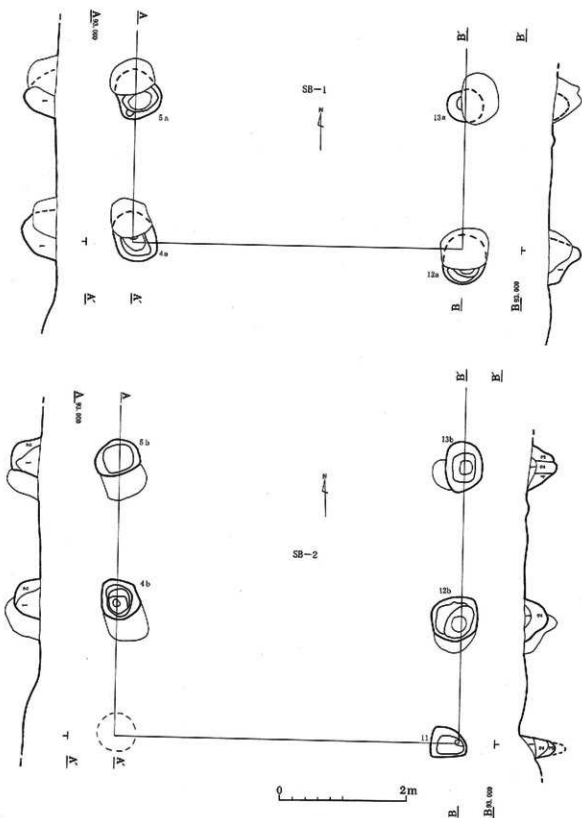
遺物は土師器小片が柱掘方より出している。

SB-3 (第67図, 図版21D.)

調査区中央やや西寄りの北端に位置する。南辺にあたると思われる3口の柱掘方を確認し、これより北は調査区外に延びていないと推定される。本跡の南西方約6.5mにSI-6、西方約18mにSB-1・2が存在する。

遺構 上記の確認状況から、2×2間或いは2×2間以上の南北棟かは明確にし難い。東西2間345cmで、柱間寸法は西から176+169cmである。柱列の方位はN-72°-Wである。柱掘方は3口とも平面形が南北を長軸とする楕円形で、長軸が50~60cm、短軸が47~50cm、深さ53~58cmで全てに径14~18cmの柱痕跡が認められた。埋積土は、黒褐色土とローム粒・塊の混合土で、柱痕跡部はローム粒の少ない黒褐色土であった。

遺物の出土はなかった。



SB-1

PT-4a

1 黒褐色土(10YR2/3)ローム粒(径1~3mm)10%,ローム塊(径4~20mm)5%含む。硝り
は弱い。下層には黒褐色土(10YR2/2)が少量混入する。

PT-5a

1 暗褐色土(10YR3/3)ローム粒・塊(径1~10mm)25%,ロームブロック少量を含む。硝りが
強い。

PT-12a

1 暗褐色土(10YR3/3)と黒褐色土(10YR2/2)の5:5の混合土。ローム粒・塊(径1~30
mm)8%含む。硝りは強い。

SB-2

PT-4b

1 暗褐色土(10YR3/3)ローム粒(径1~3mm)7%,炭土・炭化物粒(径1~3mm)1%含む。
硝り有。

2 黒褐色土(10YR2/3)ローム粒(径1~3mm)10%,ローム塊(径4~20mm)5%含む。硝り
は強い。下層には黒褐色土(10YR2/2)が少量混入。

PT-5b

1 暗褐色土(10YR3/3)ローム粒(径1~3mm)7%,炭土・炭化物粒(径1~3mm)1%,ローム
ブロックが少量含む。硝りは弱い。

2 暗褐色土(10YR3/3)ローム粒(径1~3mm)7%,ローム塊(径4~30mm)3%含む。硝りは
弱い。黄褐色土(10YR5/6)が30%混入。

第66図 SB-1・2

(3)土坑

今次調査区で土坑と認められるのは4基で、西端のSK-1は比較的大型で遺物の出土があったが他の3基は埋積土の状況からこの時代のもつと判断した。

SK-1 (第67図, 図版21F.)

調査区西方の南端に位置し、南半部は調査区外に延びる。本跡の東方約3.5mにSI-4、北西方約4.5mにSI-5が所在する。

遺構 確認面はローム漸移層である。平面形は径約2mの円形と推定され、深さは91cm程であった。底面はローム層中にあり、ほぼ平坦であるが、西側が僅かに低く掘り込まれている。壁はやや外傾して立ち上がっている。埋積土は2層に大別され、上層が黒褐色土、下層が暗褐色土で、締まりが強く自然埋没である。

埋積土上層より土師器片が出土している。

SK-2 (第67図, 図版21G.)

調査区の中央やや東寄りに位置する。本跡の北東約2mにSK-3、南西方約6.5mにはSI-1が所在する。

遺構 確認面はローム漸移層である。平面形は南北を長軸とする80×60cmの隅丸長方形である。深さ21cmで、底面はローム層中にあり、ほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がる。埋積土は2層に大別され、上層が黒褐色土、下層が黒色土で、自然埋没である。

遺物は出土しなかった。

SK-3 (第67図, 図版21H.)

調査区中央やや東寄りの北端に位置する。本跡の南西方約2mにSK-1が隣接し、南西方約9mにはSI-1が所在する。

遺構 確認面はローム漸移層である。平面形は南北を長軸とする90×67cmの長方形である。深さ26cmで、底面はローム層中にあり、ほぼ平坦である。壁は外傾し立ち上がっていた。埋積土は2層に大別され、大部分が黒褐色土で、壁際には黒褐色土とロームの混合土が認められた。

出土遺物は無い。

SK-4 (第67図)

調査区東方の南端に位置する。本跡の北東方約16mにSI-7、西方約32mにはSI-1が所在する。

遺構 工事に伴う削平により確認面はローム層である。平面形は東西を長軸とする120×105cmの不整形円形。深さ30cmで、底面はローム層中にあり、ほぼ平坦であった。壁はやや外傾し立ち上がっていた。北西隅に径20、深さ15cmの小穴が認められ、これに切られていた。埋積土は2層に大別され、上層がローム粒を少量含む黒褐色土、下層は黒褐色土とローム粒・塊の混合土層であった。

遺物の出土は無かった。

SB-2

PT-1 3b

- 1 暗褐色土(10YR3/3)ローム粒(径1~3cm)3%,焼土粒(径1~2cm),粘土粒(径1~4mm)1%含む。輝石は多い。
- 2 暗褐色土(10YR3/3)ローム粒(径1~3cm)3%,焼土粒(径1~2cm)1%含む。輝石有り。
- 3 暗褐色土(10YR3/4)ローム粒(径1~3cm)7%,ローム塊(径4~15cm)3%含む。輝石有り。
- 4 暗褐色土(10YR3/4)ローム粒(径1~3cm)3%,焼土粒(径1~3cm)1%含む。輝石有り。

PT-1 2b

- 1 暗褐色土(10YR3/3)焼土粒(径1~2cm)10%,炭化植物(径1~2cm)1%含む。輝石は多い。灰白色粘土質(10YR7/1)が30%混入している。
- 2 暗褐色土(10YR3/3)ローム粒(径1~3cm)20%,ローム塊(径4~10cm)3%,焼土・炭化植物(径1~2cm)1%含む。輝石有り。小礫が少量混入。

PT-1 1

- 1 暗褐色土(10YR3/3)焼土粒(径1~4mm)3%,輝石は多い。
- 2 黒褐色土(10YR2/2)ローム粒(径1~3cm)3%,輝石有り。
- 3 黒褐色土(10YR2/2)焼土粒に類似する。輝石は多い。

SB-3

PT-1

- 1 黒褐色土(10YR2/2)ローム粒(径1~3cm)8%混入。輝石は多い。
- 2 黒褐色土(10YR2/2)ローム粒・小塊(径1~10cm)8%混入。輝石は多い。
- 3 黒褐色土(10YR2/2)ローム粒・塊(径1~50cm)30%混入。東側の上位では70%以上含む。輝石は多い。

PT-2

- 1 黒褐色土(10YR2/2)ローム粒(径1~3cm)8%混入。輝石は多い。
- 2 黒褐色土(10YR2/2)ローム粒・塊(径1~50cm)30%混入。輝石は多い。
- 3 黒褐色土(10YR2/2)ローム粒・塊(径1~40cm)40%混入。輝石は多い。

PT-3

- 1 黒褐色土(10YR2/2)ローム粒(径1~3cm)8%混入。輝石は多い。
- 2 黒褐色土(10YR2-2)ローム粒・小塊(径1~5cm)15%混入。輝石は多い。
- 3 黒褐色土(10YR2/2)ローム粒・塊(径1~20cm)15%混入。輝石は多い。
- 4 黒褐色土(10YR2/2)ローム粒・塊(径1~60cm)40%混入。輝石は多い。
- 5 黒褐色土(10YR2/2)ローム粒(径1~3cm)4%混入。輝石は多い。

SK-1

- 1 黒褐色土(10YR2/2)ローム粒・塊(径1~20cm)15%混入。
- 2 黒褐色土(10YR2/2)ローム粒(径1~5cm)3%混入。
- 3 黒褐色土(10YR2/2)ローム粒・塊(径1~20cm)15%,赤色スロウ(径1~3cm)1%,炭化植物(径1~3cm)1%混入。

SK-2

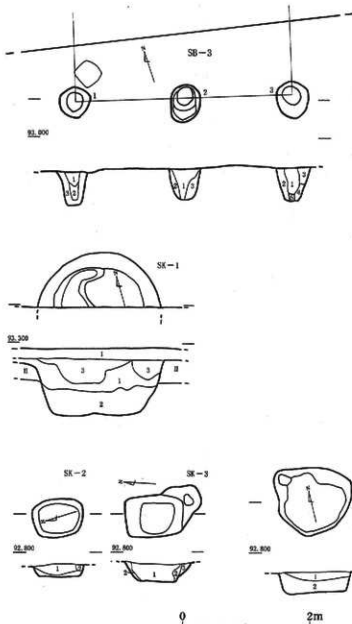
- 1 暗褐色土(10YR3/1)ローム粒・小塊(径1~10cm)10%混入。
- 2 黒色土(10YR1/1)ローム粒・小塊(径1~25cm)30%混入。

SK-3

- 1 黒褐色土(10YR2/2)ローム粒・小塊(径1~12cm)10%に赤い頁岩土(2.5YR6/3)粒・塊(径10~30cm)斑状に8%,黒色土(10YR1/1)粒(径3~8cm)1%混入。
- 2 黒褐色土(10YR2/2)とロームの混合土。比率は6:4。
- 3 灰黄褐色土(2.5YR6/2)葉くまっている。

SK-4

- 1 黒褐色土(10YR2/2)ローム粒(径1~2cm)5%,灰黄褐色土(10YR5/2)塊(径10~40cm)が斑状に10%混入。
- 2 黒褐色土(10YR2/2)ローム粒・塊(径1~120cm)40%混入。



第67図 SB-3, SK-1~4

3. まとめ

前述の通り、今次調査区は周知の遺跡の範囲外であったことから、工事に発見されたもので、本遺跡の範囲が従来の想定より北東に広がることを確認されたことが最大の成果であろう。調査区は道路用地で、幅12m、長さ130mと東西に細長く、南半部は工事に伴いローム面まで削平されていた。調査の結果、竪穴住居跡7軒（うち1軒は痕跡のみ）と掘立柱建物跡3棟などを確認したが、全体を調査できたのはS I - 3・6の2軒のみで、本来の規模・形状を明確にし難いものが多い。

住居跡は7軒のうち、竪穴の痕跡のみのS I - 6が一辺2.3~2.5mと最小で、柱穴や火処も見られなかった。逆に、S I - 5が南北8.1、東西7.1mと本調査区内最大で、竪穴の深さも確認面より53cm、土層観察では85cm程であった。カマドの設けられた北辺から北東部は調査区外となる。主柱穴は4本で、いずれも建替えの存在が認められた。また、調査し得た壁面に各2口（当初は1口）と各隅に壁柱穴があり、これらも建て替えが見られた。カマド付近が未調査であったため本跡に伴う遺物は少なく、カマド左脇付近より須恵器高台坏、坏、数点の鉄製品が出土したのみである。埋積土中より多数の土器片に混じって墨書土器片が認められたが、墨書銘の判読し得るものは無かった。しかし、遺構の面からは周辺の竪穴群の中で中心的な存在であったと推察される。

また、この南東に隣接するS I - 4は北辺付近のみの調査で、大部分が調査区外に延びる。東西長約6.8mと該期としては大形の部類に属し、火災住居であったことから調査面積の割には遺物が多い。鉄製品は鋳先もしくは鋳先、釘、石製紡錘車のほか多数の土器類が出土した。カマドの右手前には須恵器甕（本来は完形）、前面には皿状の炭化物と須恵器坏、その脇には入れ子状に須恵器坏、高台坏、碗が重なって出土し、カマドの左脇からは、ツマミを欠失した須恵器蓋の転用硯などが出土している。これらの中で注目されるのが、皿（盆）状の炭化物と共に出土した須恵器坏があり、焼成前に底部外面に「☆」印が記されていた。「☆」は「五芒星」「五行押点」として呪符に用いられている一種の魔除けの記号とされる。群馬県上野国分僧寺・尼寺中間域の染谷川河川敷、同県新田町野井萩原で8世紀代、千葉県柏市の花前遺跡群では、9世紀中葉の土器に墨書や線刻で「☆」・「井」と記されたものがあり、「井」印は魔物も迷う迷路、「星」印は魔物が入る隙がないと解され、民俗例でも確認できるとのことである。墨書、線刻などは集落内に持ち込まれてから識者が記入すればよいが、本例のように焼成前の須恵器となると、窯場で須恵器工人が記したことになる。比較的正確な表現であり、須恵器工人が理解して記したものか、単に注文どおりに記したものか、ヘラ記号が偶然この形だったのか興味深いところである。

他の住居は、S I - 2が東西長5.8m、南北長推定5mの長方形、S I - 1は一辺4.5mの方形、S I - 3が、2.5~3m×4mの不整形長方形、S I - 7は一辺3.4mの方形と推定され該期としては一般的な規模である。S I - 2は4本の主柱穴を確認したが、他は認められない。カマドはS I - 3が東壁、6・7は不明、他はいずれも北壁に設けられていた。なお、前記のS I - 4は、北カマドで一度改築を行ったあと、東に移築したと考えられるが、北側の左軸先端に小振りの土器器甕を伏せて構築材としていたほかは、大部分が地区外で詳細を明確にし難い。

掘立柱建物跡は3棟確認したが、いずれも北に延びていて南側の一部を確認したのみである。東西2間で、南北が2間もしくはそれ以上の南北棟と推察される。柱掘方及び建物規模とも一般集落のものである。

瑞穂野団地遺跡は、南流する江川（船付川）を挟んで南北800m、東西400mの約30万㎡に及ぶ広大なものである。しかし、昭和40年代後半以降開発が進み既に多くは住宅団地、工業団地などとなっている。なお、昭和48年に市教委によって2ヶ所（計12,400㎡）で発掘調査が実施され、古墳時代末~平安時代28軒を含む

計35軒の堅穴住居跡が調査された。また、このうち北地区では奈良時代前葉と考えられる一辺約8mの大形住居が確認され、ここからは金銅製耳環3点、鉄製鎌などが出土し、周辺の住居群の中心的存在と推察される。

本遺跡の北西に隣接する猿山遺跡も大規模な集落遺跡であり、本来は一連の集落であった可能性もある。今次調査区は、遺跡全体の北東端に位置するもので、奈良時代を中心とする集落の広範囲を広がり的一端が確認されたわけである。

さらに、今次調査区の北方約400mで平成19年に新たに西刑部上原遺跡【みずほの台遺跡Ⅱ】が確認された。調査地は遺跡全体の南端部で遺跡の範囲等は明確にし難いが、江川の左岸にも広範囲に古墳時代後期～奈良・平安時代の集落が存在することが明らかとなった。

なお、調査区の西端に接して南北に延びる市道があり、地元では「奥州街道」或は「こうしゅう街道」と呼ばれ、古道の名残と伝えられている。周辺の他の道路は宇都宮市街地に向かってののに対し、この道は唯一北上し、推定東山遺跡の確認された上野遺跡のある平出の台地に向かっての。本遺跡の南方では、宇都宮環状線の建設に伴い、上横田A、大開台、成願寺の各遺跡が調査されたものの、道路跡は確認されなかった。このため、残された可能性は、調査の対象とならなかった新4号国道の東から工業団地通りの間の部分であり、本遺跡を斜めに縦断するように延長するとこの調査区脇の市道付近に至る。したがって、古道の存在をも想定して調査を進めたが、本遺跡においても確認することはできなかった。今次調査区は前述のとおり、この市道より東に向かって130mほど調査しており、現段階ではさらに西寄りを通っているのではないかと推定に留まる。

本書の上梓にあたり、事業主であるトヨタウッドユーホーム㈱の学術に対する理解を高く評価するとともに、調査に対してご助力を賜った多くの方々に深謝し、また当地に眠る古墳の被葬者をはじめとする古えの御霊の安らかなることを念じて執筆する。

参考文献（両遺跡共通）

- 岩上照朗・石橋知明 『宇都宮市瑞穂野団地遺跡』 1978 宇都宮市瑞穂野団地地区調整組合・宇都宮市教育委員会
川崎由典・中山 晋 『猿山遺跡 付 久部古台墳群』 1981 栃木県教育委員会
後藤信祐 『独站状石器小考』 『唐沢考古』 5号 1985 唐沢考古会
栗木 誠・今平利幸 『下桑島西原古墳群』 1992 宇都宮市教育委員会
高島英之 『第5章第2節第2項 奥谷川河川敷部出土の刻書土器について』 『上野国分寺寺・尼寺中間地域（8）』 1992 群馬県教育委員会・（財）群馬県歴史文化財調査事業団
中山 晋 『砂田東遺跡・上横田A遺跡』 1996 栃木県教育委員会・（財）栃木県文化振興事業団
篠原浩恵 他 『成願寺遺跡』 2000 栃木県教育委員会・（財）栃木県文化振興事業団
平山 南 『黒書土器の研究』 300～304頁 2000 吉川弘文館
杉浦昭博 『大開台遺跡』 2001 栃木県教育委員会・（財）とちぎ生涯学習文化財団



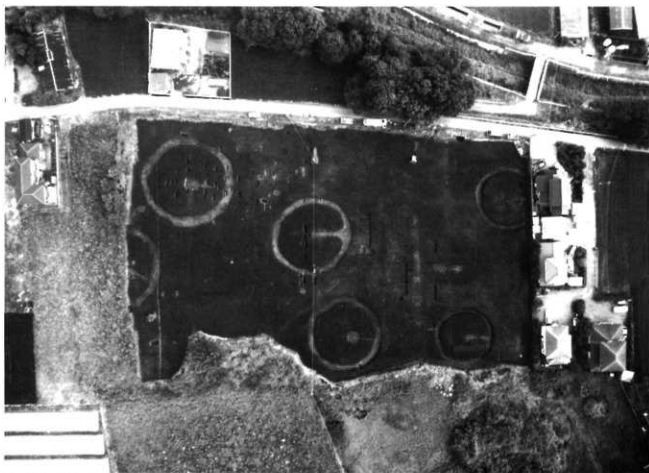
A. 第1次調査区（南より・上端が第2次調査区）



B. 第2次調査区（北より・中央上方が第1次調査区）



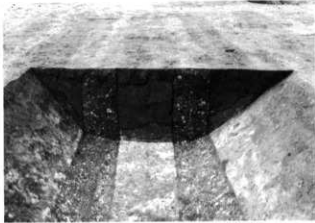
A. 調査区全景 (西より・鬼怒川を望む)



B. 調査区全景 (上より)



A. 14号墳全景 (北より)



B. 14号墳周池西側土層 (南より)



C. 14号墳石室全景 (南より)



D. 14号墳石室裏込断面 (南より)



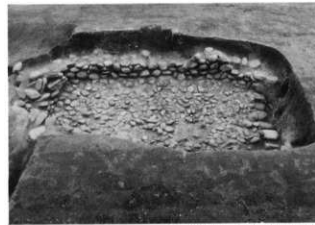
E. 15号墳全景 (南より)



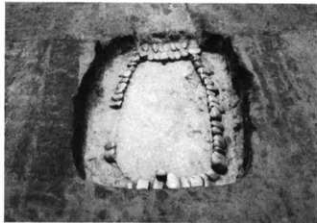
F. 15号墳前庭土層 (西より)



G. 15号墳石室全景 (南より)



H. 15号墳石室側壁 (東より)



A. 15号墳石室嵌石 (北より)



B. 15号墳石室開口 (南より)



C. 15号墳石室側壁断面 (北より)



D. 15号墳石室奥壁の支石 (東より)



E. 15号墳石室開口部 (北より)



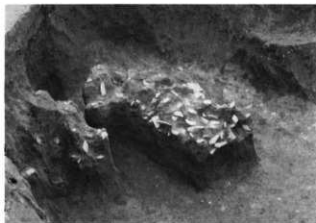
F. 15号墳石室耳環出土状況



G. 16号墳全景 (南より)



H. 16号墳周溝南側土割 (南東より)



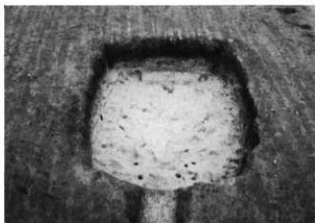
A. 16号墳南西周濠（SK-51）土器出土状況（西より）



B. 16号墳石室（南より）



C. 16号墳石室根石・敷石（北より）



D. 16号墳石室開口（南より）



E. 16号墳石室支門部付近（北東より）



F. 16号墳側壁表込断面（南より）



G. 17号墳全景（南より）



H. 17号墳周囲北側土層（東より）



A. 17号墳石室全景 (南より)



B. 17号墳石室側壁 (東より)



C. 17号墳石室根石・敷石 (北より)



D. 17号墳石室根石 (南より)



E. 17号墳石室竅穴 (南より)



F. 17号墳石室遺物出土状況



G. 18号墳全景 (南より)



H. 18号墳周濠西側土層 (南東より)



A. 18号墳石室閉塞部 (北より)



B. 18号墳石室全景 (北より)



C. 18号墳石室側壁 (東より)



D. 18号墳石室根石・敷石 (南より)



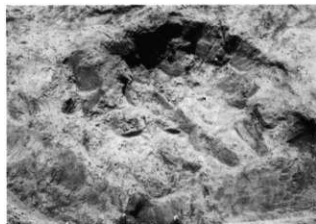
E. 18号墳石室根石 (南より)



F. 18号墳石室横穴 (北より)



G. 18号墳石室側壁断面 (北東より)



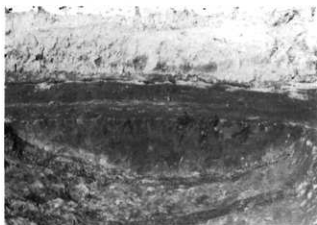
H. 18号墳石室横穴の工具痕



A. 19号墳全景（南より）



B. 19号墳周濠西側土層（南東より）



C. 19号墳周濠東側土層（南より）



D. 19号墳石室内部部（北東より）



E. 19号墳石室全景（南より）



F. 19号墳石室横石・敷石（南より）



G. 19号墳石室側壁（東より）



H. 19号墳石室側壁断面（南東より）



A. 20号墳全景（南より）



B. 20号墳周沿北側土層（西より）



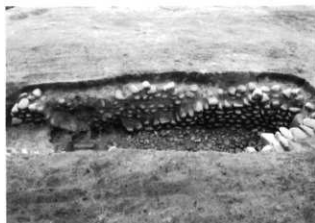
C. 20号墳前庭に凝集された石材（南より）



D. 20号墳石室落下天井石（南東より）



E. 20号墳石室全景（南より）



F. 20号墳石室側壁（東より）



G. 20号墳石室根石・敷石（北より）



H. 20号墳石室根石と奥壁（南より）



A. 20号墳石室奥壁 (南より)



B. 20号墳石室奥壁断面 (西より)



C. 20号墳石室側壁断面 (南より)



D. 20号墳石室耳環出土状況



E. 21号墳全景 (北より)



F. 21号墳周池西側土層 (北より)



G. 21号墳周池東側土層 (北より)



H. 21号墳周池北側土層 (東より)



A. SK-1 (西より)



B. SK-2 (西より)



C. SK-5土層 (北より)



D. SD-5 (東より)



E. SK-6土層 (南より)



F. SK-6 (東より)



G. SK-7土層 (南より)



H. SK-7土層 (西より)



A. SK-20土層 (北より)



B. SK-20 (東より)



C. SK-39 (東より)



D. SK-40土層 (北より)



E. SK-40 (西より)



F. SK-51 (西より)



G. SK-17土層 (西より)



H. SK-17 (西より)



11-11



21-17



26-8



16-8



21-17R



26-9



26-12



27-14

27-13



27-16



26-12



27-15



27-15



27-17上



27-17中



27-17下



27-17上R



27-17中R



27-17下R



31-4



32-6



32-6R



32-7



32-1D



32-10R



14号墳

15号墳



17号墳



20号墳



21-8



8-9



8-10



20-8



20-9



20-10



21-9



21-10



21-11



21-12



21-13



11-8



11-9



21-14



21-15



21-16



37-11



26-1



26-2



26-3



26-4



26-5



26-6



31-1



31-1



31-3



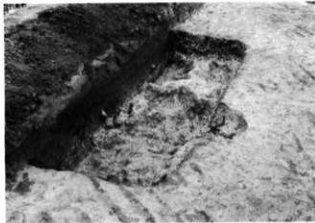
A. 調査区全景 (西より)



B. 調査区全景 (東より)



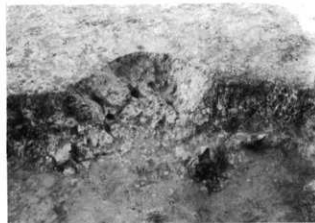
A. SI-1完掘 (北より)



B. SI-1掘方 (北東より)



C. SI-1カマド (南より)



D. SI-1カマド掘方 (南より)



E. SI-2完掘 (西より)



F. SI-2掘方 (西より)



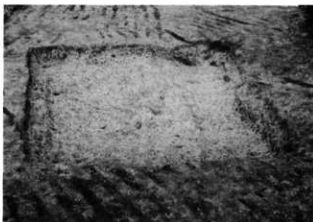
G. SI-2カマド (南より)



H. SI-2カマド掘方 (南より)



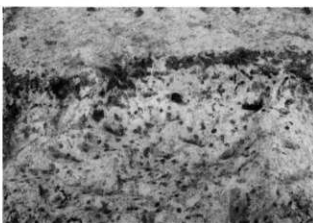
A. SI-3 (西より)



B. SI-3掘方 (西より)



C. SI-3カマド (西より)



D. SI-3カマド掘方 (西より)



E. SI-4遺物出土状況 (東より)



F. SI-4遺物出土状況 (西より)



G. SI-4 (東より)



H. SI-4掘方 (東より)



A. SI-4 カマド (南より)



B. SI-4 カマド掘方 (南より)



C. SI-4 東カマド東西土層断面 (北より)



D. SI-4 東側遺物出土状況 (南東より)



E. SI-4 床直木組と須恵器 (南東より)



F. SI-4 鍬先出土状況 (南西より)



G. SI-5 (南より)



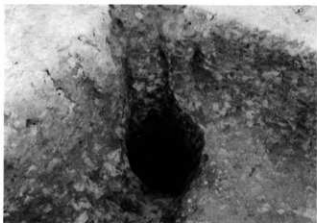
H. SI-5 掘方 (南東より)



A. S I-5掘方 (北より)



B. S I-5東壁壁柱穴P-12 (西より)



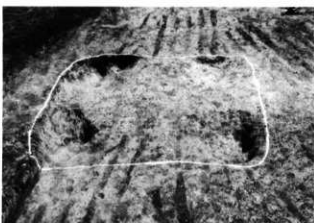
C. S I-5南柱穴P-5 (北東より)



D. S I-5Pt-2 (南より)



E. S I-5高台坪 (南西より)



F. S I-6掘方 (西より)



G. S I-7 (西より)



H. S I-7掘方 (西より)



A. SB-1・2確認状況(東より)



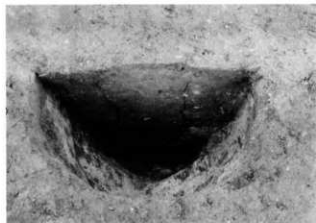
B. SB-1・2完掘(西より)



SB-2 PT-4 A・B(南より)



D. SB-3完掘(南より)



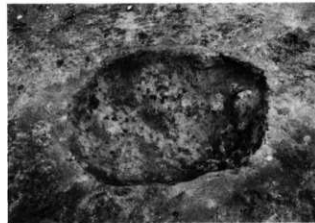
E. SB-3 PT-3土層(南より)



F. SK-1土層(北より)



G. SK-2完掘(西より)



H. SK-3完掘(西より)



52-1



55-2



60-2



47-1



50-2



50-3



55-6



55-5



60-6



60-7



64-1



50-9



60-30



55-12



55-13



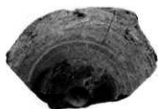
50-10



55-4



55-15上



55-17F



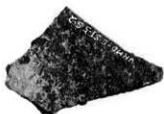
55-17



55-15



61-35F



61-35上



55-15F



55-16F



55-16



50-11



50-12



56-18



61-38



60-10



60-10



60-25



60-15



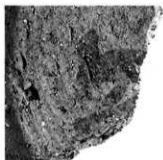
60-17



60-18



60-27



60-27



60-16



60-28



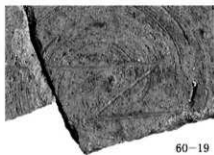
60-28



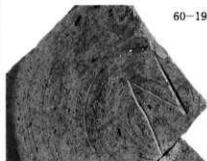
60-15



60-19



60-19



60-19



56-22



56-20



46-4



47-6



52-4



56-23



56-24



46-7



61-39



61-40



61-40R



62-48



50-15



50-15R



62-49



57-25



57-26



47-9



47-9R



47-10



47-10R



65-7



65-1



65-2



65-3



65-4



65-5



65-13



65-8



65-9



65-10



65-11



65-12



65-6

報告書抄録

ふりがな	みずほのだいせいせきぐん
書名	みずほの台遺跡群
副書名	根本西台古墳群第2次・瑞穂野田地道跡東地区
シリーズ名	宇都宮市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第68集
編著者名	水野順敏・柏崎広伸
編集機関	株式会社 日本竊業史研究所
所在地	〒324-0611 栃木県那須郡那珂川町小砂3112 TEL0287-93-0711
発行機関	宇都宮市教育委員会
所在地	〒320-8540 栃木県宇都宮市旭1-1-5 TEL028-632-2764
発行年月日	2008年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
根本西台古墳群	宇都宮市西荊部町	9201	3325	36° 30' 30"	139° 56' 3"	2005.12.1~ 2006. 9.12	10,000㎡	宅地開発
瑞穂野田地道跡東地区	同上		3320	36° 30' 25"	139° 55' 36"	2006. 8. 6~ 2006. 9.15	1,800㎡	

所収遺跡名	類別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
根本西台古墳群 第2次調査	古墳	古墳時代後期	円墳 土坑	8基 90基 鉄器, 耳環, 玉類, 土師器, 須恵器	古墳群の北への広がりか 確認された。
瑞穂野田地道跡東地区	集落跡	奈良・平安時代	竪穴住居跡 掘立柱建物跡 土坑	7軒 3棟 4基 土師器, 須恵器, 厩 瓦, 鉄器, 墨書土器	従来の推定範囲より北東 に広がる事が確認され た。

宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第68集

みずほの台遺跡群

発行年月日 平成20年3月31日
 編集 株式会社 日本竊業史研究所
 〒324-0611 那須郡那珂川町小砂3112
 TEL 0287-93-0711
 発行 宇都宮市教育委員会文化課
 〒320-8540 宇都宮市旭1-1-5
 TEL 028-662-2764
 印刷 下野印刷株式会社